

【書式A】

施設名 4館共通

処理番号 1400ABCD

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究							
【年度計画】 科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金等外部資金を活用した調査研究								
担当部課	東京国立博物館学芸研究部 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部	事業責任者	部長 田沢裕賀 部長 朝賀浩 部長 内藤栄 部長 小泉恵英					
【実績・成果】 外部資金を活用した調査研究を下記件数実施した。 (東京国立博物館) ・科学研究費補助金：8件 ・学術研究助成基金：9件 ・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：1件 (京都国立博物館) ・科学研究費補助金：1件 ・学術研究助成基金：7件 ・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件 (奈良国立博物館) ・科学研究費補助金：1件 ・学術研究助成基金：5件 ・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件 (九州国立博物館) ・科学研究費補助金：3件 ・学術研究助成基金：4件 ・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件								
【補足事項】 本項詳細は統計表c-⑦参照。								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
東京国立博物館	18件	-	-		26	26	22	22
京都国立博物館	8件	-	-		3	3	7	11
奈良国立博物館	6件	-	-		2	3	3	5
九州国立博物館	7件	-	-		10	10	8	8
【年度計画に対する総合評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 外部資金を活用した文化財に関する調査研究を行った。調査研究の実施においては、各博物館での文化財の収集・保管・展示、教育普及活動等事業と一体的に取り組み、順調に成果を挙げている。							
【中期計画記載事項】 文化財に関する調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次代への継承及び我が国の文化の向上に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B	【判定根拠、課題と対応】 文化財に関する調査研究実施に際し、外部資金を獲得し活用することで、文化財の保存と活用の推進の一助とした。31年度以降も外部資金活用による調査研究の活性化を図る。							

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411A A-1

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア a. 特別調査（「法隆寺献納宝物」（第40次））((4)-①-1))		
【事業概要】 当館では、昭和54年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	課長 今井敦
【主な成果】 (1)29年度に引き続き、「文王呂尚・商山四皓図屏風」の調査を実施し、報告書を刊行した。 ・「文王呂尚図屏風」（8月10日、9月19日、9月27日～28日、11月26日）と、当初認められていた法隆寺舍利殿（12月20日）の調査を行った。（外部調査員・村重寧、東野治之、松原茂、相澤正彦、朝賀浩、大原嘉豊、井並林太郎、森實久美子）。 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報39 文王呂尚・商山四皓図屏風1』を刊行した。 ・31年度報告書の刊行に向け、「文王呂尚・商山四皓図屏風」の調査を行った（31年1月30日～31日、2月12日）。			
(2)通年にわたって法隆寺献納宝物の染織品調査及び法隆寺宝物館保管の上代裂について調査を行い、法隆寺宝物館で保管する上代裂のうち、「双鳥円文木綿裂」と「裳」「袍」について、本格修理を行っている。			
【備考】 (1) 「商山四皓・文王呂尚図屏風」調査日数 9日 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報39 文王呂尚・商山四皓図屏風1』（31年3月29日発行） (2) 染織品の修理 3件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の各種作品に関して、継続的な調査と修理を実施することができた。また、「文王呂尚・商山四皓図屏風」については、計画どおり概報を刊行できた。

中期計画の実施状況の確認

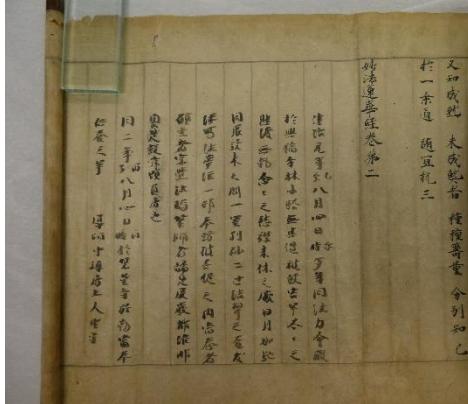
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の絵画、書跡、金工の各種作品を様々な観点から調査し、得られた新たな知見を概報刊行等により継続的に公表するなど、中期計画に沿った取組を順調に進めている。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411A A-2

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア b. 特別調査「書跡」第16回 ((4)-①-1))		
【事業概要】 本事業は平成17年度から始まり、当館収蔵品及び寄託品にかかる書跡・典籍、古文書について、古写経、和様の書、古文書など対象テーマを設定し、1年に1ないし2回、機構内の関係職員を招聘し、実施しているものである。このうち古写経の調査は、当館収蔵品について一区切りついたことから、28年度より奈良国立博物館の収蔵品を対象に実施し、比較検討を行いながら調査研究を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	書跡・歴史室長(兼保存修復課長)富坂賢
【主な成果】 (1)調査概要 古写経は名称、制作年代、形状、寸法、奥書等、出典、料紙などの調査を行う。今回は、64件の古写経を対象に調査を行い、また古文書も3件調査した。 (2)調査の成果(30年度調査の内容) 展示中のものを除き、奈良時代の古写経を1件、平安時代の古写経を27件、鎌倉時代の古写経23件、南北朝から室町時代の古写経13件、そのほか古文書も3件あわせ、調査を行った。今後も京都国立博物館などで調査を継続することで、当館の収蔵品との関連を明らかにし、研究を進めて、展示・公開の向上に寄与する予定である。			
			
特別調査の様子		調査対象資料の内 「法華經 (建治二年東大寺僧宋性願經) 卷第二」	
【備考】 調査件数:古写経64件、古文書3件 調査日数:31年2月14日、15日の2日間 調査人員:延べ31名(東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、奈良文化財研究所) 調書作成:67件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	参加者が多く、29年度を大きく上回る件数の調査ができた。また、文化財機構内各機関の同一分野研究員が集まることで、最新の研究成果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。他館の収蔵品をまとめて調査する機会はないため、文化財機構所蔵文化財横断検索システム(ColBase)への反映、今後の研究の推進及び展示・公開に寄与するところが大きい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、計画通りに作品調査を実施することにより、研究を推進し、展示・公開の向上に寄与するという所期の目標に向けて順調に推移している。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411A A-3

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア c. 特別調査「工芸」第10回 ((4)-①-1))		
<p>【事業概要】 当館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館4館及び文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、担当研究員の体調や他業務を鑑み、30年度は陶磁・染織の調査会を行うこととした。</p>			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	工芸室長 竹内奈美子
<p>【主な成果】</p> <p>(1) 陶磁 (2月1日 1日間)</p> <p>出席者 伊藤嘉章、酒井田千明(九博)、降矢哲男(京博)、今井敦、三笠景子(東博) 当館所蔵品のうち、未活用であった楽茶碗のG-152 黒楽梯子文茶碗 道入作、G-76 黒楽茶碗 一入作など、30年度に新収品となったG-5882 備前三耳壺、G-5884 染付龍渕文壺 宮川香山作など、ほかに寄贈候補、購入候補作品などについて、意見を交わしながら調査を行なった。また、各館所蔵作品について、展示予定や各館の展示の性格などを鑑みて、長期管理換などの方法で31年度より相互に活用していくことを確認した。</p> <p>(2) 染織 (①6月20日～22日 3日間、②2月19日 1日間)</p> <p>①大倉集古館寄託能装束調査 出席者 原田あゆみ(九博)、輿石英里子、佐々木智子(以上、大倉集古館)、小林彩子(文化庁)、菊池理子(東京文化財研究所)、小山弓弦葉、三田覚之、四戸菜穂(以上、東博) 東博に寄託されている大倉集古館所蔵能装束(備前藩池田家伝来)について、江戸時代中期から後期における能装束の特徴や仕立て替えなどの留意しながらその制作年代や技法について調査した。これらの調査は、30年度に開催された九博での大倉集古館展のほか、31年度以降の当館や大倉集古館での展示に活用される。</p> <p>②上代裂調査 出席者 田中陽子(正倉院事務所)、山川暁(京博)、沢田むつ代、小山弓弦葉、三田覚之、四戸菜穂(以上、東博) 法隆寺に伝來した上代裂のうち、修理が必要な「古幡(I-335)」について熟観し、今後の修理方針について協議した。また、29年度に調査した上代裂のうち、未登録の袍1件について、法隆寺宝物館で保管される共裂に関する協議を行った。これらの調査は、今後の上代裂修理に有効に活用されるほか、修理後には、初公開作品として当館において展示される予定である。</p> <p>【備考】陶磁調査作品約10件、能装束調査作品33件、上代裂作品調査5件</p>			

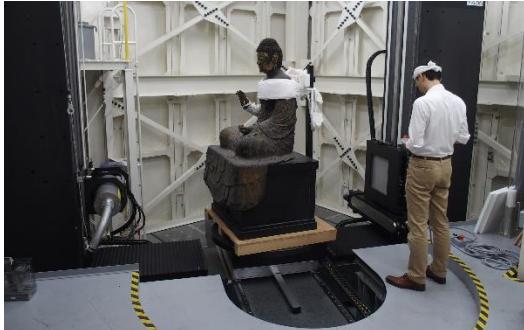
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各機関の陶磁・染織の専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	陶磁調査では、おもに東京国立博物館が新たに収藏した作品について、知見の交換を行うとともに、今後の相互活用を含めて検討することができた。染織調査でも、寄託中の大倉集古館所蔵の能装束調査を通して大名家における能の実態について様々な知見を得た。これらの成果を工芸史研究ならびに当館の展示に反映させるべく、中期計画の「収蔵品・寄託品をはじめとする文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究」に沿った調査を実施することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア d. 特別調査「彫刻」第8回 ((4)-①-1))		
【事業概要】 社寺等所蔵の仏像、神像、肖像彫刻等を調査し研究報告論文活動に結び付けあるいは寄託増加特別展等の企画につなげて示質向上を図る。31年度は、大型の館蔵品及び寄託品に対して、X線CT撮影並びに新規の写真撮影を実施し、分析研究を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長 浅見龍介
【主な成果】			
1)次のとおり調査を行った。 • 10月16日 C-318 薬師如来坐像(X線CT撮影・X線撮影) C-20 菩薩立像、淨瑠璃寺(寄託)広目天立像(写真撮影) 以上、参加人数5人 • 11月20日 大田区(寄託)十一面觀音菩薩立像(X線CT撮影) C-318 薬師如来坐像、法隆寺(寄託)阿弥陀如来坐像(写真撮影) 以上、参加人数4人 • 31年2月18日 大倉集古館(寄託)普賢菩薩騎象像(X線CT撮影) 以上、参加人数7人			
2)X線CT撮影においては、作品の構造や保存状態が明らかとなった。写真撮影においては、あわせて実査を行うことによって作品の表面仕上げや保存状態等に関してさまざまな新知見が得られた。			
3)研究成果は、逐次作品解説等において報告を行うとともに、CT活用の報告を行う特集展示に反映させる。			
			
10月16日のX線CT撮影		11月20日の写真撮影	
【備考】 調査回数: 3回 調査作品数: 7件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近年、非破壊による文化財調査が進むなか、X線CT撮影は作品の内部を観察する上で不可欠となっていいる。このたび、大型作品のCT撮影と写真撮影に伴う調査が実施できたことで、乾漆を用いた重要な遺品の内部構造や表面仕上げ、保存状態といった点について、新たな知見が得られた。これにより、おおむね所期の目的は達成できたと思われる。今後は、さらにデータの解析を進めることで、仏像作品における構造技法の特色について研究を進め、逐次その成果を展示や刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品など文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411A A-5

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究																																																														
プロジェクト名称	ア e. 特別調査「絵画」第3回																																																														
【事業概要】 列品調査・研究の一環として、東博所蔵の絵画作品についてテーマを設けて、機構内各絵画担当者、およびテーマごとに関係のある機構外協力者で集中的に調査を行い、対象の列品について知見・理解を深めようとするもの。30年度は儒教関係の絵画というテーマで実施。																																																															
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎																																																												
【主な成果】 当館の儒教関係作品では漆工分野で登録されている湯島聖堂由来の「歴聖大儒像」(H-1342)が著名であるが、絵画の主題として儒教関係という枠組みを設けて調査・研究はされてこなかった。そこでまずはどのような作品があるか全容を知る絶好の機会とすることことができた。 今回は筑波大学助教の水野裕史氏を機構外協力者として招き、機構内では九州国立博物館・山下氏、畠氏、京都国立博物館の大原氏、および当館・鷺頭、高橋、大橋、土屋（貴）、瀬谷、沖松が参加した。 <table border="0"> <tr><td>A-10</td><td>重要文化財 先徳図像</td><td>1巻</td><td></td></tr> <tr><td>A-11967</td><td>重要文化財 孔子像</td><td>1幅</td><td></td></tr> <tr><td>H-1342</td><td>聖賢図</td><td>15幅</td><td>狩野山雪筆</td></tr> <tr><td>A-76</td><td>賢哲肖像</td><td>2巻</td><td>狩野常信筆</td></tr> <tr><td>A-283</td><td>聖賢図</td><td>3巻</td><td>狩野探幽筆</td></tr> <tr><td>A-1013</td><td>聖賢図屏風</td><td>8曲2双</td><td>住吉広行筆</td></tr> <tr><td>A-9548</td><td>儒者道統絵</td><td>1幅</td><td>筆者不詳</td></tr> <tr><td>A-6928</td><td>聖賢障子下絵</td><td>3巻</td><td>模者不詳</td></tr> <tr><td>A-6786</td><td>聖賢障子下絵</td><td>27点</td><td>模者不詳</td></tr> <tr><td>A-5612</td><td>孔子一世縦跡図</td><td>1帖</td><td>模者不詳</td></tr> <tr><td>A-9223</td><td>帝舜像</td><td>1幅</td><td>平貫雄模</td></tr> </table> 等26件を調査した。 その中で、 <table border="0"> <tr><td>A-9548</td><td>儒者道統絵</td><td>1幅</td><td>筆者不詳</td></tr> <tr><td>A-6928</td><td>聖賢障子下絵</td><td>3巻</td><td>模者不詳</td></tr> <tr><td>A-6786</td><td>聖賢障子下絵</td><td>27点</td><td>模者不詳</td></tr> <tr><td>A-9223</td><td>帝舜像</td><td>1幅</td><td>平貫雄模</td></tr> </table> 以上の作品は今まで内容等ほとんど紹介されてこなかったもので、「歴聖大儒像」をはじめ、近世の儒者像の形成を考える上で様々な示唆を含んだ作品であることがわかった。				A-10	重要文化財 先徳図像	1巻		A-11967	重要文化財 孔子像	1幅		H-1342	聖賢図	15幅	狩野山雪筆	A-76	賢哲肖像	2巻	狩野常信筆	A-283	聖賢図	3巻	狩野探幽筆	A-1013	聖賢図屏風	8曲2双	住吉広行筆	A-9548	儒者道統絵	1幅	筆者不詳	A-6928	聖賢障子下絵	3巻	模者不詳	A-6786	聖賢障子下絵	27点	模者不詳	A-5612	孔子一世縦跡図	1帖	模者不詳	A-9223	帝舜像	1幅	平貫雄模	A-9548	儒者道統絵	1幅	筆者不詳	A-6928	聖賢障子下絵	3巻	模者不詳	A-6786	聖賢障子下絵	27点	模者不詳	A-9223	帝舜像	1幅	平貫雄模
A-10	重要文化財 先徳図像	1巻																																																													
A-11967	重要文化財 孔子像	1幅																																																													
H-1342	聖賢図	15幅	狩野山雪筆																																																												
A-76	賢哲肖像	2巻	狩野常信筆																																																												
A-283	聖賢図	3巻	狩野探幽筆																																																												
A-1013	聖賢図屏風	8曲2双	住吉広行筆																																																												
A-9548	儒者道統絵	1幅	筆者不詳																																																												
A-6928	聖賢障子下絵	3巻	模者不詳																																																												
A-6786	聖賢障子下絵	27点	模者不詳																																																												
A-5612	孔子一世縦跡図	1帖	模者不詳																																																												
A-9223	帝舜像	1幅	平貫雄模																																																												
A-9548	儒者道統絵	1幅	筆者不詳																																																												
A-6928	聖賢障子下絵	3巻	模者不詳																																																												
A-6786	聖賢障子下絵	27点	模者不詳																																																												
A-9223	帝舜像	1幅	平貫雄模																																																												
【備考】																																																															

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	儒教関係の絵画作品は、今まで体系立てて研究されていない分野であったが、近年筑波大学で科研テーマとして儒教美術に関するものが成果を上げられており、その中には元来、当館の列品と一連のものである作品も含まれているため当館での体系的な調査研究の必要性があった。それを今回、全体像を把握する一歩となる調査ができ、館内でも認識されていなかった作品などをリスト化することができた

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	31年度以降、より詳細かつ本格的な調査・研究をするための基礎データを整備できた。将来的に特集展示あるいは特別展に成果を反映できるようにしていく足がかりを作ることができた。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411A イ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	イ 関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館では29年度より関東地域の社寺に伝存する文化財の悉皆調査を開始した。30年度は29年度に引き続き天真寺(東京都港区)所蔵文化財の調査を行ったほか、祐天寺(東京都目黒区)所蔵文化財の調査に着手した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	課長 今井敦
【主な成果】 10月9日、10月12日、11月20日に天真寺(東京都港区)において所蔵文化財の調査を行った。漆工は膳椀と供養具が多く、中でも天保6年の箱書がある「春慶塗木具膳」は本膳形式で28基の大部に渡っている。陶磁は天保3年の箱書のある宮川長造作の赤楽・黒楽の数天目を確認できた。彫刻は、寛文12年箱書の誕生仏を確認できた。書跡は港区指定文化財である松平不昧・月潭書状の調査を行った。 また、31年2月13日に祐天寺(東京都目黒区)所蔵の彫刻作品31件の予備的な調査を行った。			
天真寺での調査風景		祐天寺での調査風景	
【備考】 調査日数: 5日 調査点数: 絵画19件、書跡34件、彫刻32件、工芸126件 延べ参加人数: 16名			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査を、29年度に引き続いだ。30年度は天真寺(東京都港区)を対象として所蔵文化財の調査を計画し、3日間4分野に関して行うことができ、悉皆調査を完了した。また、新たに祐天寺(東京都目黒区)所蔵の文化財の調査に着手し、1日間1分野に関して行うことができた。調査した文化財の中に、貴重な遺品が含まれていることを確認することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、文化財の基礎的調査を関東地域の社寺に広げて行うこととした。2年度目にあたる30年度は、天真寺(東京都港区)の調査を完了し、祐天寺(東京都目黒区)の調査に着手した。31年度も祐天寺の継続調査を行うことを計画している。以後も、毎年新規寺院の調査を行う体制を確立している。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411A ウ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 油彩画の材料・技法に関する共同調査 ((4)-①-1))		
<p>【事業概要】 本研究は東京藝術大学との共同研究で20年度から開始し、続行している。当館所蔵の油彩画約150件の中から、明治期を中心とした作品を調査対象としている。東京藝術大学大学院油画保存修復研究室は、これまで大学所蔵の明治期油彩画について、調査研究を続け、多数の成果を公表している。本共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析などの科学的調査を通じ、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行ない、これまで東京藝術大学が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考える。 </p>			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 土屋裕子
<p>【主な成果】</p> <p>(1) ①A-12220 松岡寿筆「ダリヤ」、② A-12215 松岡寿筆「初春」、③A-12216 松岡寿筆「微雨の熱海」、④A-12214 松岡寿筆「自画像（39歳）」、⑤A-12217 松岡寿筆「自画像（80歳）」の状態調査、普通光、側光、紫外線、赤外線写真撮影を行なった。</p> <p>(2) 松岡寿作品は遺族より平成10年に寄贈を受けた作品であるが、上記作業時に行った状態調査により、②③において絵具に浮きが発見されたため、その後館内で応急処置を行った。また、①のように額に装丁されていないものもあり、こうした作品に関する詳細な調査は、これまで展示されなかつた作品が公開・活用するための準備にもなりえる。</p>  <p style="text-align: center;">調査風景</p>			
<p>【備考】</p>			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	油彩画の光学調査は東京藝術大学でそのデータの蓄積が行われており、それに続く質と量をもつ当館の油彩画資料の基礎データ蓄積は、今後の油彩画研究において重要な情報をもたらすことになる。この点において、この作業を続けることにより、確実にデータを蓄積しているため、当該評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで行った調査で、基本的なデータの蓄積は進めてきたが、今後はこれをまとめて活字にする必要がある。5年計画の後半では、これまで行った調査を『MUSEUM』などの研究誌への掲載を目標とする。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411Aエ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	エ 仏教美術等の光学的手法による共同研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館所蔵の仏教美術について高精細カラー撮影、近赤外撮影、蛍光撮影、蛍光X線撮影、X線透過撮影を行い、材質や技法についての調査・研究を行う。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】 A-10498 虚空蔵菩薩像の分割カラー撮影、近赤外撮影、蛍光撮影、蛍光X線分析、蛍光X線分析箇所のマクロ撮影、A-1 普賢菩薩像の蛍光X線分析箇所のマクロ撮影、A-10506 千手觀音像の蛍光X線分析、蛍光X線分析箇所のマクロ撮影、A-11529 孔雀明王像の蛍光X線分析箇所のマクロ撮影を行った。			
【備考】 調査3回(1回につき3~4件、分析箇所40箇所程度)、検討会2回 成果発表:『東京国立博物館所蔵 国宝 平安仏画 一光学調査報告書一』 B4判 264ページ(平成31年3月31日発行)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	30年度まで、当館所蔵の国宝の平安仏画4件の調査が終了できた。ここまで調査を通じ、従来、表現技法がはつきりわかつていなかった背景の表現に、群青と銀、特に銀が特徴的に使用されていることを知ることができた。これは、この調査で用いた特殊な照明の方法で撮影した高精細画像による細部の拡大観察と、それを基にターゲットを絞った綿密な蛍光X線分析による元素の存在の確認によって知りえたものであり、今後の平安仏画の理解や調査研究の上で重要な視点を与えるものといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	年度計画で書いたように、背景処理における銀の使用など、従来知られていなかった表現、技法が明らかになったことを受け、31年度以降の調査・分析における指針を得ることができた。今後の調査では、特に銀の使用についてのデータを収集することを一つの目安として、当館所蔵の残りの平安仏画や寄託品の平安仏画について調査を進め、銀の使用が平安仏画の表現においてどのような意義を持っていたのかを明らかにしていくことを計画している。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411Aオ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	オ 東洋民族資料に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 インドネシアのジョグジャカルタの宮廷・博物館にてクリス（短剣）の用途・分類に関する調査、ソロ郊外にてヒンドゥー教寺院に関する調査、ソロの宮廷およびジャカルタの国立博物館にてインドネシア工芸資料に関する調査を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのクリス（短剣）の分類や展示活用に資する知見を得た。 ・東京国立博物館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にヒンドゥー教関係資料の分類や展示活用に資する知見を得た。 (3) 調査研究の成果 ・ジョグジャカルタやソロにはインドネシアの宮廷があり、伝統文化が集積されている。ソロ郊外にはヒンドゥー教の寺院があり、古代文化の遺跡がある。ジャカルタには国立博物館があり、インドネシアの伝統工芸資料が収蔵・展示されている。これらの場所を調査し、当館が所蔵する東洋民族列品のうち特にインドネシア関係資料に関する有意義な知見を得ることができた。その成果は 30 年度の東洋館企画「博物館でアジアの旅 海の道 ジャランジャン」の一環としてクリスの展示に反映した。また今後の平常展示「アジアの民族文化」の参考とする。			
			ソロ郊外のヒンドゥー教寺院スクー寺 クリスの展示（東京国立博物館 東洋館 13 室）
【備考】	クリス展示：東京国立博物館 東洋館 13 室 7月 18 日～10月 14 日 館外調査：インドネシア（ジョグジャカルタ、ソロ、ジャカルタ） 8月 1 日～ 8月 10 日		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 28年度の南山大学・天理参考館・早稲田大学、29年度の兵庫県立考古博物館の調査に引き続き、今年はインドネシアの宮廷・博物館・工房・寺院などの調査を行うことで、東洋民族列品のうちインドネシア関係資料に関する基礎的な情報を充実させた。 当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのクリス（短剣）の分類や展示活用に資する知見を得た。 当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にヒンドゥー教関係資料の分類や展示活用に資する知見を得た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 当館が所蔵する東洋民族列品については、南洋資料・台湾先住民族資料・その他から構成されている。東洋館の平常展示「アジアの民族文化」では、インドネシアのワヤンクリ（影絵人形劇）やクリス（短剣）に関する特集陳列を定期的に行っており、そのための分類整理を進めている。 従来、ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館の平常展示「アジアの民族文化」に展示活用されて、展示内容が着実に充実してきている。 31年度以降は特集陳列「朝鮮王朝の宮廷文化」を行い、また当館所蔵の東洋漆工の図版目録を作成する計画があるため、中国・韓国の資料の調査に取り組みたい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411Aカ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	「上杉家伝来の能面・能装束」ほか特集に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】	当館が所蔵する米沢藩上杉家伝来の能面・能装束について調査研究し、特集展示、図録での成果を公表する。		
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長 浅見龍介
【主な成果】	<p>29年度、米沢市上杉博物館で調査した際に撮影をした米沢藩の能楽関係資料と、上杉家関係史料とを照らし、精査することによって、能面・能装束等能道具の収集・管理について新知見を得た。</p> <p>また、当館所蔵の上杉家伝来品の調査を行い、上杉家の伝承に基づいていた従来の名称・作者・制作年代について、近年蓄積してきた研究成果を反映した内容に改めることができた。</p> <p>これらを発表し、かつ今後の研究に寄与するために図録を刊行した。上杉家の歴史を踏まえつつ、能道具についてまとめた初の資料である。</p> <p>能面・能装束の撮影も行ない、特に能面は全点新規撮影した。従来、表と裏の画像のみであったが、左右斜め、左右側面を撮影し、研究資料として活用するための基礎を固めた。</p>		
			
	図録「上杉家伝来の能面・能装束」表紙		
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上杉家旧蔵の能面・能装束は当館が一部をまとめて所蔵するほかは散逸しており、当館の研究と公開が長く望まれていた。本研究は、米沢藩の歴史を伝える基礎史料として刊行されている『上杉家御年譜』と、米沢市上杉博物館保管の米沢藩能楽関係資料と照らし合わせたうえで、実際の能道具について考察する初めての研究である。能楽史だけでなく、上杉家の歴史にもかかわる能面・能装束等能道具の収集・管理についての新知見を得ることができた。大名家の能楽に関する研究は備前池田家、彦根藩井伊家、尾張徳川家などまだ一部に過ぎない中で、米沢藩上杉家という大名家の能楽研究に関して一つの視点を提示したともいえる。また、本研究にあたり行った画像や法量など基礎資料の整備は、今後の研究の発展に寄与するものであり、当館でしか成しえないことでもある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館は良質な仮面を多数所蔵していることで定評があるが、制作年代や作者に関する情報の精査は不十分であった。所蔵品の情報の正確な発信という観点で前進することができた。 『東京国立博物館図版目録 仮面篇』の増補改訂版刊行の作業の一環としても位置付けられる。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411A ク

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 特集「明治 150 年記念 書と絵が語る明治」に関する調査研究		
【事業概要】 特集「明治 150 年記念 書と絵が語る明治」の開催準備に当たって、出品予定の作品や関連する文献を調査し、成果を展示に反映する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 田良島哲
<p>【主な成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで注目されることが少なかった明治前期の書跡・洋画について調査を行い、新たな知見を得ることができた。(例:「七言絶句」大久保利通筆 (B-1080) の制作年代と成立事情)。 7月 10 日から 9月 2 日まで本館特別 1, 2 室で展示を行った。併せて図録『明治 150 年記念 書と絵が語る明治』を刊行した。 			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査を通じて、館蔵品に関する学術的情報を充実することができた。 展示によって、これまで比較的知られることが少なかった明治前期の書作品や洋画について、その存在や歴史的意義を周知することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画が求める「収蔵品・寄託品をはじめとする文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究」の一環として成果をあげることができ、また、「調査研究成果の公表」についても展示図録というわかりやすい形で公表することができた。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411Aケ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ケ 特集「岡野繁蔵コレクション—インドネシア由来の染織と陶磁器」に関する調査研究		
【事業概要】 東洋館の年間企画である「博物館のアジアの旅」にかかる特集「岡野繁蔵コレクション—インドネシア由来の染織と陶磁器」「ワヤン—インドネシアの人形芝居」及び「インドネシアの染織」のための調査研究を行い、展示やワークショップ、ディスプレイなどを充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室長（兼貸与特別観覧室長） 小山弓弦葉
【主な成果】			
(1) 調査概要			
<ul style="list-style-type: none"> ・ジャカルタのインドネシア国立博物館にて、インドネシア染織・陶磁器の展示方法を調査した。 ・チルボン・プカロガンのバティック工房でインドネシア染織の製作工程を調査した。 ・ソロのダナル・ハディ・バティック美術館にて、バティックの展示方法や歴史について調査した。 ・ジョグジャカルタの宮廷・博物館・工房、ソロの宮廷、ジャカルタのワヤン博物館にてワヤン（影絵人形劇）の実演・分類・製作に関する調査を行った。 			
(2) 調査の結果得られた知見			
<ul style="list-style-type: none"> ・当館が所蔵するインドネシア染織の製作工程とその発展の歴史について知見を得た。また、ワヤンの分類・展示活用に資する知見を得た。 			
(3) 調査研究の成果			
<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシアにおける専門の博物館での展示を調査することによって、インドネシア染織や陶磁器に関する有意義な知見を得ることができた。また、インドネシア染織の製作を調査することによって、ワークショップに活かすことができた。その成果は特集「岡野繁蔵コレクション—インドネシア由来の染織と陶磁器」「ワヤン—インドネシアの人形芝居」および「インドネシアの染織」に反映した。また、今後の「アジアの染織」での展示にも有効に活用できる。 ・ジョグジャカルタのワヤンの劇場や博物館、ジャカルタのワヤン博物館での調査によって、ワヤンに関する有意義な知見を得ることができた。その成果は30年度の東洋館の特集展示「ワヤン—インドネシアの人形芝居」に反映した。また今後の平常展示「アジアの民族文化」の参考とする。 			
【備考】			
特集展示：東京国立博物館 東洋館 12室 9月4日～12月25日/東洋館13室 7月3日～9月30日			
館外調査：①インドネシア（ジャカルタ、チルボン、プカロガン、ソロ、ジョクジャカルタ）7月18日～7月25日			
②インドネシア（ジョグジャカルタ、ソロ、ジャカルタ）8月1日～8月10日			



プカロガンのバティック工房の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシアの博物館・工房・宮廷などを調査することによって、インドネシア美術・民族に関する列品の知識や情報を深めることができた。 ・インドネシア染織に関しては、工程の画像や動画などの資料も入手し、観覧者に展示室内でわかりやすく紹介することができる。また、教育普及事業であるワークショップにも有効に活用できる。 ・インドネシアには、各地域における特徴的な工芸があり、当館にも所蔵されている。31年以降は、今回調査した地域以外にも調査範囲を広げ、より充実した調査研究を目指したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・東洋館においては、例年「アジアの旅」で列品をテーマにした企画が行われ、企画に沿った調査研究が進められている。博物館事業の幅を広げ、列品を有効に活用していく上で非常に意義のある事業となっている。 ・31年度に開催される「アジアの旅」に向けて、列品を精査し、来館者が満足すると同時に、列品の調査研究も充実するような計画を立て、実行したい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411Aコ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	コ 特集「ワヤン—インドネシアの人形芝居—」に関する調査研究		
【事業概要】 東洋館企画「博物館でアジアの旅」の特集展示のためワヤン（影絵人形劇）の調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 インドネシアのジョグジャカルタの宮廷・博物館・工房、ソロの宮廷、ジャカルタのワヤン博物館にてワヤン（影絵人形劇）の実演・分類・製作に関する調査を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのワヤンの分類・展示活用に資する知見を得た。 (3) 調査研究の成果 ・ジョグジャカルタにはワヤンの劇場や博物館があり、ジャカルタにはワヤンを専門的に収蔵・展示するワヤン博物館がある。これらの場所を調査し、当館が所蔵する東洋民族列品のうち特にインドネシアのワヤンに関する有意義な知見を得ることができた。その成果は今年度の東洋館の特集展示「ワヤン—インドネシアの人形芝居—」に反映した。また今後の平常展示「アジアの民族文化」の参考とする。			
			
ワヤンの上演風景 (ジョグジャカルタのソノブドヨ博物館)		ワヤン（影絵人形）の展示 (東京国立博物館 東洋館 12室)	
【備考】 特集展示：東京国立博物館 東洋館 12室 9月4日～12月25日 館外調査：インドネシア（ジョグジャカルタ、ソロ、ジャカルタ）8月1日～8月10日			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシアの宮廷・博物館・工房などの調査を行うことで、東洋民族列品のうちワヤン関係資料に関する基礎的な情報を充実させた。 ・当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのワヤンの分類や展示活用に資する知見を得た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・当館が所蔵する東洋民族列品については、南洋資料・台湾先住民族資料・その他から構成されている。東洋館の平常展示「アジアの民族文化」では、インドネシアのワヤン（影絵人形劇）やクリス（短剣）に関する特集陳列を定期的に行っており、そのための分類整理を進めている。 ・従来、ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館の平常展示「アジアの民族文化」に展示活用されて、展示内容が着実に充実してきている。 ・31年度以降は特集陳列「朝鮮王朝の宮廷文化」を行い、また当館所蔵の東洋漆工の図版目録を作成する計画があるため、中国・韓国の資料の調査に取り組みたい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411A #

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	サ 特集「京都御所 飛香舎（藤壺）の調度」に関する調査研究		
【事業概要】 当館が所蔵する列品のうち、京都御所の飛香舎で用いた調度一式を対象とする調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室主任研究員 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 ・当館が所蔵する列品のうち京都御所の飛香舎で用いた調度一式の調査、宮内庁書陵部が所蔵する京都御所関係史料の調査を行った。 (2) 調査の結果得られた知見 ・当館が所蔵する列品のうち、京都御所の飛香舎で用いた調度の分類・用途や展示活用に資する知見を得た。 (3) 調査研究の成果 ・当館には京都御所の飛香舎で用いられていた調度一式が収蔵されている。また、宮内庁書陵部には京都御所の飛香舎に関する史料がある。これらを調査し、東京国立博物館が所蔵する飛香舎調度に関する有意義な知見を得ることができた。その成果は今年度の特集陳列「京都御所 飛香舎（藤壺）の調度」の展示に反映した。また、今後の宮廷関係資料の展示の参考とする。			
 飛香舎調度の展示 (東京国立博物館 本館 14 室)		 松喰鶴蒔絵螺鈿二階棚 (飛香舎調度のうち)	
【備考】 特集展示：東京国立博物館 本館 14 室 10月2日～12月25日 館外調査：宮内庁書陵部 7月18日～19日			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 当館が所蔵する列品のうち、京都御所の飛香舎の調度一式に関する基礎的な情報を探求した。 当館が所蔵する列品のうち、京都御所の飛香舎の調度の分類や展示活用に資する知見を得た。 特集「京都御所 飛香舎（藤壺）の調度」の展示に伴い、リーフレットの刊行、月例講演会、ギャラリートークを行い、一般の方々に対する普及に努めた。 31年度以降も当館所蔵品をはじめとする宮廷関係資料の調査に取り組みたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 当館が所蔵する宮廷関係資料は、漆工・染織・金工・その他から構成されているが、それらの関係性が不透明な状況にある。従って、平常展示や特集展示などの機会を通じて、それら宮廷関係資料の分類整理を進めて、有機的な関連付けを行う必要がある。 29年度をもって当館に管理替が確定した宮内省旧蔵の宮廷関係資料は、従来、展示活用される機会が少なかった。この度、特集「京都御所 飛香舎（藤壺）の調度」の展示を行ったのを契機とし、当館が所蔵する宮廷関係資料に関する調査・展示を充実させてゆく。 31年度以降も引き続き、これまでの調査研究を通じて得た知見に基づき、更なる調査研究を重ねて宮廷関係資料を活用した平常展示や特集を工夫してゆく。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411Aシ

業務実績書

中期計画の項目		(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称		シ 特集「白磁の誕生と展開」に関する調査研究	
【事業概要】 特集「白磁の誕生と展開」に関する調査研究			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 三笠景子
<p>【主な成果】 公益財団法人常盤山文庫の協力のもと、中国隋から初唐の頃に華北地方で生産された白磁を調査し、これまで研究史上、おもに唐白磁と位置づけられてきたそれらを、あらためて古墓出土資料との比較によって隋時代までさかのぼることを明らかにした。その成果は、公益社団法人常盤山文庫と当館の所蔵品を使って、31年1月2日～4月21日まで東洋館5室にて特集「白磁の誕生と展開」と題して展示公開した。</p>  <p>特集「白磁の誕生と展開」の展示風景</p>			
<p>【備考】 公益財団法人常盤山文庫所蔵品30点、当館所蔵品3点の白磁作品を調査した。 ほかに天理参考館5点、大和文華館2点、黒川古文化研究所4点の調査を行なった。 常盤山文庫中国陶磁研究会より研究紀要7『初期白磁』(30年12月14日)刊行。</p>			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでその位置づけが明瞭ではなかった隋～初唐の白磁について、国内に所蔵されている主な作品を実見した点、また中国国内の古墓出土資料との比較によって器種器形ごとに生産時期をより狭めて考えることができるようになった点において先進的な研究ができたと考える。また、その成果を特集で展示公開できたことは評価に値する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今回の調査研究は、基本的に現在までに報告されている中国古墓出土資料の内容に基づく。今後は新しい発掘報告や新資料の出現がなされることを前提に、本研究を礎に、白磁の誕生に大きな影響を及ぼしたと推測される6～7世紀の金銀器やガラス器などの研究にも視野を広げて調査につとめたい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1411Aス

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ス 特集「ラファエル・コランと黒田清輝」に関する調査研究		
【事業概要】 特集「ラファエル・コランと黒田清輝」(黒田記念館黒田記念室、31年1月22日～4月14日)に関する調査研究。29年度に寄託を受けたフランスの画家ラファエル・コランの作品13点、および東京文化財研究所が所蔵する黒田清輝関係資料の調査を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部（兼東京文化財研究所文化財情報資料部近・現代視覚芸術研究室長） 塩谷純
【主な成果】			
(1) 調査とその成果 29年度に寄託を受けたフランスの画家ラファエル・コランの作品13点の調査を行った。あわせて東京文化財研究所が所蔵する黒田清輝関連の写真資料を調査、黒田の画室を撮影した写真に寄託作品のうちの1点である「三人の女下絵」(写真左上段)、および久米美術館が所蔵するコランの「夏の野」が写っていることが判明した(写真左から3枚目)。			
 <p style="text-align: right;">画室で撮影された黒田のポートレート</p>			
(2) 成果の公開 特集「ラファエル・コランと黒田清輝」(黒田記念館黒田記念室、31年1月22日～4月14日)を行い、コランと弟子の黒田の作品を通して、その交流の様子を紹介した。また同特集鑑賞の手引きとなるリーフレットを作成した。			
【備考】			
調査作品数：13点 展示：特集「ラファエル・コランと黒田清輝」(黒田記念館黒田記念室、31年1月22日～4月14日、展示作品件数23件) 刊行物：特集「ラファエル・コランと黒田清輝」リーフレット(A3判二つ折り、31年1月22日)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館へ寄託されたラファエル・コランの作品の展示は、11年から12年にかけて全国の美術館を巡回した「ラファエル・コラン展」以来、19年ぶりの公開となった。国内外からコランの作品を一堂に集めた同回顧展の成果に、今回の特集展示も負うところが大きかったが、一方で東京文化財研究所所蔵の写真資料を調査し、寄託品が黒田清輝の愛蔵品であったことが同時代の資料から改めて裏付けられたのは、大きな収穫であった。黒田清輝の作品を展示公開してその画業を顕彰する施設である黒田記念館だが、コランのような黒田周辺の作家の作品もあわせて展示することで、黒田への理解がより深められるよう、今後も調査研究に努めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	寄託品も含めた収蔵品に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物を通して広く一般に発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	セ 特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」に関する調査研究 ((4)-①-1)		
【事業概要】 東京国立博物館が手がける文化財保存と修理の役割と成果をわかりやすく広く一般に紹介するため、近年解体を含む根本的な修理を終えた作品を修理過程で得られた情報とともに展示公開し、理解を促進する。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	課長（兼書跡・歴史室長） 富坂賢
<p>【主な成果】</p> <p>(1) 調査概要 30年度は近年、本格修理を行うことにより取り扱いや保存上の安全性が向上した作品や、鑑賞性が向上して展示活用が可能となった作品を対象として、一般の鑑賞者が、博物館における保存修復への理解向上につながる作品の選定、処置内容の解説方法について調査と検討を行った。</p> <p>(2) 調査の結果得られた知見 対象としたのは、本格修理の場合、9月30日までに修理が完了した作品で、修理後十分な期間を置いて状態が安定したことが確認できた作品とした。</p> <p>展示作品のうち「南蛮屏風」(列品番号:A-11128)の主な損傷問題は、骨木地の変形、白い点や液ダレのような茶色の付着物、また膠の濃度が原因と考えられる著しい黒い絵の具の剥落、そして橡木と金具の構造による作品画面の擦れや凹みであった。特に茶色の付着物は東京文化財研究所の分析により「膠」と判明し、旧修理の処置が原因であることが分かった。また、黒い絵の具の剥落部は、濃い膠を使用したため表面が膠によって硬く引き攣れを起こしていたことが原因であった。そのため、東京文化財研究所の指導の下、タンパク質を溶解する有機溶媒「アセトニトリル」を用いて塗膜を軟化させ剥落止めを施し、安定した結果を得た（今後、経過観察が重要となる）。このように作品に使用された材料に対する分析とその結果や処置事例は、修理処置や材料の選択の判断材料としても、より良い修理を行う上で大変重要な知見の蓄積となつた。</p> <p>(3) 調査研究の成果 「濃紺ヴェルヴェット地花卉文様金銀糸刺繡」(列品番号:TI-418-1)や夢窓疎石筆の「杜甫詩」(列品番号:B-3474)など10件は、オリジナル部分や旧修理部分の損傷や劣化により安全に展示することが困難な作品であった。特に「杜甫詩」は虫損による損傷が著しい状態であったが、修理により安定した展示が可能になった一例である。</p> <p>今回の展示では、修理処置だけでなく「修理で使用した特殊な材料」、「東博の保存修復の仕事」に関し、鑑賞者の理解を深める工夫をして処置材料や画像を多用した解説パネルを作成し、鑑賞者の関心を得た。</p> <p>会期中、一般向けにバックヤードツアー、ギャラリートークを行い、多くの参加者が熱心に鑑賞、聴講した。</p>			
<p>【備考】</p> <p>展示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」平成館企画展示室、31年3月12日～4月7日、展示作品件数10件。 教育普及事業 ・バックヤードツアー 31年3月15日、参加者60名。 ・ギャラリートーク 31年3月19日参加者73名、3月26日参加者121名、計2回参加者のべ194名。 			



バックヤードツアーの様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>保存修復課ではより専門的な内容を含む詳細な修理報告を別途『東京国立博物館文化財修理報告』として刊行しており、一般向けの平易な展示として特集「東京国立博物館コレクションの保存と修理」を毎年、年度末に行っている（30年度で19回目）。修理を終え展示が可能になる作品はその都度変わるために、それにあわせた展示の工夫が例年の課題である。</p> <p>30年度は本格修理を中心に、使用した修理材料や当館の保存修復の仕事についても紹介した。修理前後の様子や使用した材料などを紹介することで、修理技術の素晴らしさや博物館の文化財保存のありかたについて、来館者の方々への理解促進につなげることができた。31年度に向け、さらに博物館内での保存修復事業の重要性を一般の人々へ分かりやすく伝えるための視点も意識し、修理技術者とともに修理時の資料情報や材料の収集を継続する。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>装こう修理は、外部技術者を招き修理対応を継続。30年度、立体作品の修理は専門の研究員、調査分析室には専門職員が配置された。館内での分析診断、応急修理の対応が安定的に可能になったことで、本特集で紹介できる案件の分野や研究の視点が広がっている。様々な文化財保存の専門技術者が館内の保存修理事業に長期的に関わることで、修理で得られる知見の蓄積と技術進歩、また保存管理の安定化が図られてきている。</p> <p>保存修復課の活動と成果が本特集によって臨場感を持って来館者に伝わり、文化財保存に関する興味関心と理解の向上につながるよう、毎年新しい視点で鑑賞できるテーマを設け事業を展開する。</p>

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1411B ア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧会事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 京都周辺出土の考古遺物に関する調査研究 ((4)-①-1)		
【事業概要】	館蔵品を中心に京都周辺の考古遺物に関する調査研究を実施して、その成果を当館における展示、講演、論文などの博物館の事業に還元する。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 宮川禎一
【主な成果】	<p>(1) 古く昭和30年代に京都国立博物館に収蔵された京都府相楽郡和束町原山古墳から出土した鉄製武具のうち衝角付冑を調査し、その研究成果を反映し、元興寺文化財研究所で保存処理及び損傷部分の修復を行い、修理を完了した。</p> <p>(2) 新たに寄贈された中国唐代の銀鍍金狩獵文杯に関して科学的に製作技法を検討するために当館のCTを用いて断面映像を撮影し、その製作過程を検証した。</p> <p>(3) 重要文化財「画文帶四仏四獸鏡（伝河内金剛輪寺伝来）」の由来を文献的に調査して、金剛輪寺旧蔵の他の考古遺物を現在所蔵する神戸市の白鶴美術館において青銅馬具類の調査を行った。</p> <p>(4) 館蔵の吳王伍子胥鏡（後漢）を検討するために、大阪市立美術館において類似の吳王伍子胥鏡の調査を行った。</p>		
	 <p>銀鍍金狩獵文杯 CT 調査画像 (垂直断面画像)</p>		
【備考】	<p>京都とその周辺の考古遺物を対象とするが、館の収蔵品の性質から日本全体・東アジアに及ぶ考古遺物についても調査対象としている。さらに科学機器による分析も着実に進める。</p> <p>(1) 31年度に展示公開予定。</p> <p>(2) (3) 研究成果は論文として公刊を予定。</p>		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>館蔵品で唯一の鉄製短甲と衝角付冑の調査から、古墳時代中期の武具の一端を検証できたことに加え、衝角付冑の修理を進めて公開を目指すことができた。</p> <p>唐代の銀杯の検討のためにCT調査を行って、その内部構造や製作技法の検証を行うことができた。</p> <p>出土状況が不明な大型鏡の画文帶四仏四獸鏡について、その歴史的な伝来経緯や共伴遺物と推定される銅製馬具の調査を行った。</p> <p>考古展示場は撤収展示が頻繁であり、時間的・人的な制約もあることから研究の量的には充分とはいえないが、そのなかでも最新の科学機器も活用しつつ、新たな知見の発見や展示に繋がる作品の保存修理を行い、研究の質としての成果は確保できたことから、順調に成果をあげたといえる。</p> <p>31年度以降も計画的に作品の調査研究・修理などをを行い、科学機器も積極的に活用して新知見を広げていくこととした。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>中期計画に基づき、京都文化を中心とした有形文化財の調査・研究として、館蔵品を中心とする京都周辺および関連する考古遺物の調査研究を行った。</p> <p>31年度以降、さらに研究の量的な面を確保するために、夏期・冬期の考古展示場での展示作業と調査研究のバランスを考慮しながら計画的な作品調査と報告を着実に行う。加えて調査においては博物館に備わる最新の科学調査機器を積極的に活用し、科学的側面からの研究と報告を行うこととする。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称	イ 訓点資料としての典籍に関する調査研究((4)-①-1))	
<p>【事業概要】 漢文を訓読するために施された、「訓点」と呼ばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は経典・漢籍・和書などの典籍にみられる。これらに付された訓点により、当時の日本人がどのように本文を訓読していたか、あるいは日本語の有り様が判明する。当館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く収蔵することから、それらを中心とする調査研究を行うことにより、得ることの出来た成果を展示や講演、又は刊行など、博物館における事業へと還元する。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】 美術室長（兼 列品管理室長） 羽田聰
<p>【主な成果】</p> <p>(1) 典籍の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、アソシエイトフェローの上杉智英（仏教学）のほか、調査スタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、計8回の調査を実施した。</p> <p>(2) 調査作品は、重要美術品「根本説一切有部密薦尼毘奈耶卷第九（五月一日經）」や国宝「世説新書卷第六残巻」（以上、館蔵品）、重要文化財「開元元釈經録卷第十八残巻」（文化庁長期貸与品）など18件に及び、今後の研究にも資するよう全巻撮影を行った。</p> <p>(3) 調査対象作品のうち、「根本説一切有部密薦尼毘奈耶卷第九（五月一日經）」は、正倉院文書中に見える料紙の種類や筆者の記載と、顕微鏡などによる観察結果から得られた知見を同種の作品とともに展示し、あわせて講演を行った。</p> <p>(4) また、「色紙金字觀無量寿經」は、特別展「国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」（会期：31年4月13日～6月9日）の開催にあたり、重要美術品「色紙金字阿弥陀經」（清淨光寺蔵）と一具で作成された可能性が高いことが判明し、その見解を刊行される図録に反映させた。さらに、「涅槃經疏」は、紙背に記された説話の解題と翻刻を当館紀要に掲載することが決定している。</p>		
<p>【備考】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査回数 8回 ・調査件数 18件 ・撮影コマ数 約150カット ・成果の公開（展示） 1回 平成知新館名品ギャラリー「五月一日經」（7月18日～9月2日） ・成果の公開（講演） 1回 上杉智英「奈良写經の魅力—五月一日經—」（土曜講座、7月21日） ・成果の公開（刊行） 1件 宇都宮啓吾「京都国立博物館蔵『大般涅槃經疏』紙背の説草資料について」（『学叢』41、31年5月発行予定） 		



平成知新館調査室での調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業の大きな目的である作品の調査研究及び成果の公開に照らし、【備考】欄に記載した調査回数や件数、あるいは公開などの数値を29年度と比較すると、回数こそ減じているが、ほかは同等かそれ以上の成果をあげることが出来ているため、所期の目標を達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。年度計画における実績値は、29年度とほぼ同等であるため、順調に進捗し、所期の目標は達成していると判断する。無理のない継続性に基づき、文献学的な手法では着実に成果を積み上げて来ている。一方、蛍光X線など科学的手法による調査は、いまだ未着手であるため、31年度はその対象となる作品を選定し、実験的に取り組むことを視野に入れたい。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1411B ウ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 陶磁に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 主に日本国内に伝わる陶磁器（出土品も含む）について、総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室研究員 降矢哲男
【主な成果】			
(1) 調査 ・4月22日～28日にサンフランシスコ・アジア美術館所蔵の日本陶磁について調査、写真撮影を行い、その所蔵の状況や傾向などについて検討を行った。 ・29年度に引き続き、近畿地方の江戸時代から続く旧家の所蔵品や観心寺所蔵の陶磁器の調査を行い、調査書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。（詳細は処理番号1411B4及び1411B5参照）。 ・韓国・全羅南道地域を中心として、高麗青磁、粉青沙器の窯跡や窯跡出土資料を調査した。調査により、茶の湯の茶碗に用いられる粉引茶碗の製作窯の特定ができた。 ・個人コレクションの陶磁器の調査を行い、写真撮影等を行った。			
(2) 成果内容 ・29年度に引き続き、旧家や寺院、そして個人コレクションの調査を行い、それぞれの様相を把握することができた。そこから、陶磁器流通の状況やコレクション形成の過程について、新たな知見を得ることができた。 ・個人コレクションの調査により、作品の寄贈を受け、さらに今後、作品の寄託を受けることとなった。それによつて、館蔵品で網羅されていない時期や産地の作品の展示をすることができ、より充実した内容の展示を行うことが可能となつた。 ・これまでに蓄積した研究成果をもとに、公刊図書の発行、学会での発表、学会誌等への論文公開を行つた。			
【備考】			
(1) 調査回数 30回 (2) 主な成果 ・学会発表：降矢哲男「座敷飾りにみえる陶磁器の使用状況とその在り方について」家具道具室内史学会2018年度大会・シンポジウム、5月26日 ・公刊図書：降矢哲男『中国朝鮮の陶磁器』（全248頁）淡交社、9月5日 ・論文：降矢哲男「座敷飾りにみえる陶磁器の使用状況とその在り方について」『家具道具室内史』第10号、家具道具室内史学会、5月26日			

サンフランシスコ・アジア
美術館調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本プロジェクトの主眼は、基礎データを蓄積し、研究を進めることにある。29年度に引き続き、複数の事例の調査を行い、30年度は海外調査も行うことができた。こうした基礎データの蓄積を継続的に行えたことは大きな成果である。30年度もこれまでのデータの蓄積を活かして、国内外において学会発表等を行うなどしたこととともに、特に公刊図書として、その成果を広く一般に公表できたことは、年度計画を上回ったといえる。また、調査の過程で展示を拡充できるだけの寄託品を受け入れられることになったことも大きな成果であり、大規模な展覧会や講演会などの博物館事業の内容の充実に繋がることが期待できる。本事業は31年度以降「旧家伝来の工芸品に関する調査研究」の枠組みの中で行うこととなるが、当該事業にも十二分に寄与できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。今中期計画の3年目として、着実に調査を進め、多くの基礎データの蓄積を行つた。その成果をもとに行つた公刊図書の公表や国内外における研究発表や展示を通じて、研究成果を研究者、一般に広く還元できた。また、本調査研究の基礎データの収集を通じて、館蔵品や寄託品の充実を図ることができたことは、当初の想定を越える成果であったと言える。本事業は31年度以降、「旧家伝来の工芸品に関する調査研究」に移行するが、引き続き基礎データの蓄積を継続して進めていくとともに、従来の蓄積データを照らし合わせながら研究を行い、さらなる成果の結実に結び付けていきたい。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1411B エ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	エ 近畿地区社寺文化財の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 京都国立博物館では長年にわたり、京都を中心とした近畿地区の社寺に伝存する文化財の悉皆調査を行ってきた。28年度からは、4年計画で科学研究費補助金による助成を受け「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」というテーマのもと、大阪・河内地域に存在する社寺の文化財を中心に調査を併せて行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 浅瀬毅
【主な成果】			
(1) 河内地域の社寺調査 ・30年度は4年計画の3年目にあたり、河内長野市に所在する観心寺において第2、第3回目の悉皆調査を行った。 また、同市金剛寺において一部の分野では補足調査及び撮影を行った。 観心寺悉皆調査 6月19日～22日 (※当初計画では18日からの予定であったが、地震の影響で延期。) 金剛寺補足調査 31年2月8日 観心寺悉皆調査 31年2月18日～22日			
(2) 過去の社寺調査成果の公表等 ・28、29年度行った金剛寺における社寺調査の成果の一部を、『社寺調査報告 29 金剛寺(彫刻編)』として公表した。 ・過去に行った京都市内の社寺調査のうち、建仁寺塔頭及び永觀堂禪林寺に関して、報告書刊行に向け、これまでに作成した調書の分類・整理を継続して行った。			
 観心寺調査風景			
【備考】 科学研究費補助金基盤研究(A)「河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究」の4年計画の3年目 (1) ・調査回数3回 ・本調査の最終成果は、科研の最終年度である31年度末に報告書にて公表予定。 (2) ・『社寺調査報告 29 金剛寺(彫刻編)』31年3月31日刊行			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、河内長野市の観心寺において蔵に収められている文化財の調査・撮影、金剛寺において金堂に29年度修理を終えてそろった大日・不動・降三世の三尊について補足調査と撮影を行った。今回の調査で、観心寺が所蔵する文化財については過半数を超える文化財に關し調査を行うことができた。また、金剛寺においては報告書刊行に向けての調書作成及び写真撮影を一部の分野を除いて終えることができ、最終年度である31年度に発行予定の報告書刊行に向けての調書作成及び写真撮影をすることができた。あわせて、これらの情報をデジタルデータとして入力し、資料の整理を行った。以上のことから、年度計画の所期の目標を達成した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究の一環として、河内地域の仏教文化と歴史に関する科学研究費助成事業に申請し、それに基づく調査研究を実施した。本事業は4年計画であり、初年度から3年度にかけては年度毎に1ヶ所以上の寺院を当該地域から選択し(28年度は金剛寺、29・30年度は観心寺)、全研究員参加による悉皆調査を行う計画であった。30年度は当初の予定どおり、金剛寺の補足調査と、観心寺の悉皆調査を2回行い、100件を超える多数の文化財を調査し資料を収集できた。31年度についても引き続き観心寺の悉皆調査を行うとともに、教興寺等で安置仏の調査を行う予定である。 過去に行った調査寺院の補足調査に関しては、河内地域の調査に重点を置いていたため十分には行うことができなかつたものの、調書の整理等に関しては継続して行い、データベースへの入力も順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 特集展示「美麗を極める中国陶磁」に関する調査研究		
【事業概要】 特集展示「美麗を極める中国陶磁」(30年12月18日～31年2月3日)の開催のため、寄贈作品の松井コレクション及び関連作品の調査を行った。併せて、図録掲載のための写真撮影も行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室研究員 降矢哲男
【主な成果】 (1) 24年に中国陶磁を中心に美術品の蒐集していた松井宏次氏から、陶磁59件、考古13件、彫刻2件、計74件の寄贈があった。この寄贈を顕彰するため、受贈作品全点を分野毎に調査、写真撮影をし、基礎資料の収集を行った。作品調査により、個々の作品の年代や来歴等が明らかとなり、寄贈以降に分かってきた新知見を鑑みながらそれぞれの作品についての解説文を執筆した。特に寄贈作品の中心をなす中国陶磁については、その歴史的背景から松井コレクションがどのような年代に作られた作品で、どのような意図を持って集められたかなどの詳細についての考察を行った。 (2) 特集展示については視覚的、効果的に作品の状況や研究成果が観覧者にも分かり易くなるように、ライティングや解説文にも注意して作成し、概ね好評を得た。また、図録を作成し、上記の研究成果を収録した。特に写真図版については、全点カラー図版で掲載を行い、愛好家や研究者にも研究資料として用いられるように鮮明なものとするとともに、所蔵品目録としても長く活用されるように基礎データについても収録した。 (3) 本研究の成果は特集展示の関連土曜講座や論文でも発表した。			
【備考】 (1) ・調査件数 約150件 (*寄贈作品と比較検討を行うために行った作品調査数を含む。) ・撮影コマ数 約300カット (2) 特集展示「美麗を極める中国陶磁」(12月18日～31年2月3日) 平成知新館1階(全2室) 図録『特集展示 松井コレクション受贈記念「美麗を極める中国陶磁』12月18日刊行 (3) ・土曜講座：降矢哲男「美麗を極める中国陶磁」31年2月2日 ・論文：降矢哲男「美麗を極める中国陶磁」『陶説』第789号、12月1日		 特集展示「美麗を極める中国陶磁」 展示風景	
 展覧会図録			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	それぞれの分野において作品調査を実施し、最新の研究成果との比較検討などを行った。その成果を展示や解説にも活かし、一般にも見やすく分かり易い展示を心掛けた。 特に松井コレクションの中核をなしている中国陶磁については、その歴史的な流れのなかでのコレクションの位置付けや、日本における中国陶磁の価値観などについても考察することができた。こうした成果は、展示や図録などの成果物にも反映し、広く一般に公開され、研究者の基礎資料として今後幅広い活用がなされることが予想されるなど、所期の目標以上の成果が得られた。 また、本特集展示及び図録により、寄贈の顕彰とともにできたことも博物館事業として意義深いものとなった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施することが中期計画目標として定められている。京都文化のうち陶磁分野では、通史的に調査研究を進めて情報を収集し、陶磁器の歴史における京焼をはじめとした陶磁器の位置付けを考えていくことが不可欠である。以上の点で、今回の寄贈作品は、重要な作品であるとともに幅広い作品群となっていることから、松井コレクションのみでも通史的に陶磁史の考察を行えることを示すなど、当初の想定を超えて研究を進めることができた。本研究成果を展示及び図録により公開したことは、陶磁史研究の発展に大いに寄与するものであり、所期の目標を超える成果と言える。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1411B ケ-2

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称	ク 特集展示「百萬遍知恩寺の名宝」に関する調査研究((4) -①-1)	
<p>【事業概要】 京都国立博物館が実施している「近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究」の成果公開の一環として、近年、調査が完結した知恩寺を対象に、同寺所蔵の文化財の研究を行い、調査研究成果を公開した。平常展示のなかでもテーマ性をもたせた「特集展示」の枠組みでの展示とし、京都に根差した浄土宗美術の精華を広く認知してもらうことも狙った。</p>		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】 列品管理室主任研究員 吳孟晋
<p>【主な成果】 知恩寺は京都市左京区にある浄土宗七大本山の一つで、「百萬遍」の名でも知られる名刹である。京都国立博物館では、知恩寺の全面的なご協力のもと、20年度から断続的に同寺が所蔵する文化財の悉皆調査を行ってきた。27年度末に刊行した『社寺調査報告』第27号（知恩寺篇）では、調査時に作成した調書に基づき、合計434件の文化財の詳細を掲出した。今回の展示にあたり、調査に関わった学芸部の全研究員が展示作品を精査し、展示室にあわせて総計37件の文化財を選出し、その研究成果を作品解説及びリーフレットに反映した</p>		
 <p>展示風景</p> <p>展示は全3章で構成した。第1章「宗祖の教え」では、開基の法然上人と第二世の源智上人をはじめ、中国浄土宗から始まる宗派の教えを、肖像画などを中心に関連する文化財で示した。第2章「浄土の世界」は、「淨土曼荼羅図」や「阿弥陀淨土変相図」といった大幅の展示のほか、快慶作の学説が提示された「阿弥陀如来立像」も同寺から出陳を賜り、CTスキャナー調査の結果、内部に納入品を発見したことなどに言及した。第3章「所縁の名宝」では、徳川將軍家をはじめ有力な檀越からの寄進などによる名品やゆかりの品を展示し、今回の調査で明らかになった円山応挙や高田敬輔ら近世絵画の優品もあわせて出陳した。展示規模は特集展示としては、これまでのなかでも最大級のものとなった。</p> <p>会期中には関連事業として、土曜講座を計2回開講した。また、平成30年度公益財団法人仏教美術研究上野記念財団「研究発表と座談会」（9月2日、主催：仏教美術研究上野記念財団、共催：京都国立博物館）を「仏師とその工房をめぐる諸問題」というテーマで開催し、前述の「阿弥陀如来立像」をめぐって活発な議論が交わされた。</p> <p>なお、知恩寺からはすでに数多くの文化財の寄託を受けているが、今回の調査及び展示を契機に同寺から新規に預かることになったことについても附記したい。</p>		
<p>【備考】</p> <p>特集展示「百萬遍知恩寺の名宝」（8月7日～9月9日）平成知新館2階（全5室） 特集展示リーフレット『百萬遍知恩寺の名宝』8月発行 関連土曜講座：福原隆善氏（浄土宗大本山百萬遍知恩寺法主）「百萬遍知恩寺の歴史」（8月25日）、 吳孟晋「京都の社寺と博物館—京都国立博物館による百萬遍知恩寺什物調査について—」（9月8日）</p>		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>調査で新たに認知された文化財の展示はもちろん、展示にあわせて学術団体主催のシンポジウムも開催されたことで、出陳文化財に関する議論をより深めるとともに、学会をはじめとする専門家にも知恩寺所蔵の文化財の全体像を明らかにすることができた。</p> <p>特集展示の会期は夏休み期間中にあたったことから、中学、高校生の来館者が増加することも想定して、作品解説は過度に専門的にならないように配慮し、英語、中国、韓国語も併記し、説明内容を追記するなどして海外の観覧者にも京都の宗教文化とその美術についての理解が深まるように工夫するとともに、リーフレットにより詳しく概論やコラムなどを掲載し、専門性も担保した。</p> <p>京都にある寺院の文化財を展覧するのは、同地に立地する当館に求められる使命であり、十全に果したものと考える。特に今回は調査、展示、保管という博物館運営を支える3つの柱のすべてを満たした理想的な形の調査研究事業となり、所期の目標を上回る成果を得られた。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関する調査研究として、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究にも関連する調査研究事業として実施した。これまでの調査研究を活かし、展示を通じてその成果を公開するとともに、寄託品の拡充にもつながっており、着実に成果を上げている。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1411B ケ-3

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究				
プロジェクト名称	ク 特別企画「日中平和友好条約締結40周年記念 中国近代絵画の巨匠 齊白石」に関する調査研究 ((4)-①-2))				
【事業概要】日中平和友好条約の締結から40周年を迎えるのを記念して中国近代水墨画を代表する齊白石(1864-1957)の展覧会を開催するにあたり、齊白石の絵画や書跡についての調査を実施する。					
【担当部課】学芸部	【プロジェクト責任者】列品管理室主任研究員 吳孟晋				
【主な成果】 20世紀の中国を代表する画家の一人である齊白石について調査研究を行い、その成果を31年1月から3月にかけて開催された特別企画「日中平和友好条約締結40周年記念 中国近代絵画の巨匠 齊白石」に反映した。 齊白石は単純化した造型に鮮やかな色彩で中国の水墨画に革新をもたらした一人である。大正、昭和初期の日本でも高く評価され、日本人の収集家も多かった。京都国立博物館では齊白石の名品を核とする須磨コレクションを受贈しており、近年、齊白石研究を継続して進めてきた。 今回の展示の借用先となった北京画院は齊白石が晩年に名誉院長を務めたことから齊白石の名品を数多く所蔵することで知られている。京都国立博物館で齊白石研究を進めるにあたり、数年前から北京画院を継続的に訪問し、研究員と交流を深め、国際シンポジウムで研究成果を発表してきた。特に齊白石の作品評価について、日本での評価が中国本国の画壇での高い評価につながったこと、戦後もそれが継続していたことを明らかにした。また、簡単な描写が多いことで知られる齊白石の作品のなかでも、草虫図をはじめとする画題では昆虫を精緻に描くことに改めて注目し、簡略化した花木に配することで、簡潔な表現が主体の文人画において革新をもたらしたことを強調した。 こうした研究成果を昭和53年(1978)に締結された日中平和友好条約が40周年を迎える30年度に企画された記念展示や土曜講座において十分に反映することができた。具体的には、北京画院所蔵の齊白石作品による齊白石名品展を開催するにあたり、中国側が提示したリストに日本側からも希望作品を伝え、中国側からの満額回答により総計120件を超える大規模な展覧が実現した。 あわせて、京都国立博物館独自の構成として平常展示(名品ギャラリー)では、当館蔵の須磨コレクションを中心とする「須磨コレクションにみる齊白石の名品」を同時開催し、中国と日本での齊白石の一大コレクションによる「競演」とした。					
					
調査風景					
【備考】 展示: 特別企画「日中平和友好条約締結40周年記念 中国近代絵画の巨匠 齊白石」東京国立博物館との共同企画。東博での展示(10月30日~12月25日)の後に、京博に巡回(31年1月30日~3月17日)。 図録: 北京画院・東京国立博物館・京都国立博物館編『中国近代絵画の巨匠 齊白石』南寧: 广西美術出版社、2018年10月 講演等: 吳孟晋「齊白石作品鑑賞入門」(東京国立博物館ギャラリートーク、11月9日) 西上実「須磨コレクションの中国近代絵画」(当館土曜講座、31年2月9日) 呂曉「木匠から巨匠へ: 齊白石の人生と芸術」(当館土曜講座、31年2月23日) 吳孟晋「齊白石の絵画における現代性」(当館土曜講座、31年3月9日)					

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでの研究成果の蓄積を活かしつつ、日中平和友好条約締結40周年という節目の時期に時宜を得た展示を行うことができた。具体的には、中国での学会発表や論文発表を通して、日本からの視点という独自性で齊白石の書画を再評価したことによって、今後、評価が高まってゆく中国近代絵画研究に貢献することが期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関する調査研究を実施した。京都国立博物館の所蔵品のうち、中国絵画コレクションの特色の一つである近代絵画の分野において、当館所蔵品に加えて、北京画院の一大コレクションとの展示することにより、量的・質的な充実を図ることができた。また、このことにより齊白石の画業の全体像を示し、中国近代絵画研究の進展に貢献することができた。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1411B ケ-4

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ク 特集展示「初公開！天皇の即位図」に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 特集展示「初公開！天皇の即位図」(31年1月30日～3月10日)の開催のため、展示の中心となる即位図及び関連史料の調査を行った。併せて、特集展示への出品交渉を進め、リーフレット等印刷物に掲載するための写真撮影等も行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室研究員 福士雄也
【主な成果】			
(1)他機関研究者の協力も得ながら、狩野永納筆「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」に関する史料約15件の調査を行った。			
(2)展示の中心となる屏風に描かれるのが、即位式及び譲位式のどの場面であるのか、概ね明らかにすることができた。			
(3)屏風の模本が公家の正親町公明により収集された可能性が高いこと、またその動機として公明自身の後桜町天皇譲位式及び後桃園天皇即位式への関与が想定し得るということを明らかにすることことができた。			
(4)上記の成果は、天皇の即位式を描く他作例の制作意図等を解明していくうえでも有意義であり、宮廷文化史研究など美術史研究の枠を超えた研究の広がりが期待される。			
【備考】			
・調査件数 約15件 ・出品予定作品数 8件			



東京大学史料編纂所での史料調査
(「御即位図」)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>調査研究の主たる対象である狩野永納筆「靈元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」は、天皇の即位及び譲位を記録的に描くという点で宮廷文化に深く関わる作品であり、しかも京都を活動の拠点とした京狩野の画家により制作された作品である。その意味で、京都文化の発信を活動の柱に据える当館にとって、本作と関連史料を調査研究することは館の使命に沿ったものであり、一般社会及び学会の要請にも応えるものであった。折しも、今上天皇の退位と皇太子殿下の即位を間近に控えた時期であることから、社会的関心の高い時宜にかなった調査研究テーマであったと言える。</p> <p>本調査研究を通じて、屏風に描かれたのがいかなる儀式の場面か概ね明らかとなり、屏風模本の収集者やその意図についても特定の公家との関わりを想定し得るに至り、展示においてもその成果を反映した。こうした成果は、今後類似する作品の調査研究を進めるうえでも有意義なものであり、今後はさらに宮廷文化史等との学際的研究の展開が期待でき、所期の目標を上回る成果が得られたと言える。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施した。</p> <p>そのなかで近世絵画分野においては、京都ゆかりの諸画家に関する資料・作品の調査研究を進め、情報を蓄積していくことが必要である。この点で、狩野永納という京都ゆかりの画家が宮廷儀式を記録的に描いた作品について、その描写内容のみならず受容のありかたにまで踏み込んだ調査研究を進めることができたことは、今後の画家に関する調査研究や、さらに江戸時代における画家と公家との関係等の把握に大きく寄与するものであり、大きな成果であったと言える。また、天皇陛下の譲位を控え注目を集めている宮廷儀式という京都に深く関わる文化事象の調査研究であった点で、美術史研究の枠を超えて、今後のさらなる学際的な展開に繋がることが期待される有意義な成果となった点で、所期の目標を上回ったと言える。</p>

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称	ク 特集展示「雛まつりと人形」に関する調査研究((4)-①-1)	
【事業概要】 江戸時代に製作された各種の人形について、収蔵品の調書作成および画像撮影などの基礎調査を継続的に実施するとともに、各所蔵先における調査も実施し、寄託や寄贈という形で収蔵品の充実をはかる。その成果を加味しながら、恒例の展示となっている「雛まつりと人形」に反映させ、伝統的な節供文化の継承に寄与する。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】企画室長(兼工芸室長) 山川暁
【主な成果】		
(1)これまでに当館が築き上げた人形コレクションの形成過程と現在の状況について、第30回日本人形玩具学会において発表した。		
(2)個人を中心とする各所蔵先の訪問調査を実施し、そのうちの一件を寄贈品として受け入れた。また、京都旧家に伝来する節供人形コレクションの基礎調査を継続して実施した。		
(3)上記の成果を加え、恒例の特集展示「雛まつりと人形」を開催し、雛飾りの歴史や各種京人形についてまとめたリーフレットを作成した。		
 <p style="text-align: center;">人形調査風景</p>		
【備考】		
(1)山川暁「京都国立博物館における人形コレクションの形成」日本人形玩具学会第30回研究発表大会、7月8日		
(3)特集展示「雛まつりと人形」31年2月13日～3月17日、展示作品47件 山川暁「雛御殿—雛人形の暮らす館—」31年3月3日、関連土曜講座 特集展示リーフレット「京人形を楽しむための鑑賞ガイド」8000部		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国際化が進む中で日本固有の生活文化が希薄になっていく中、雛まつりとして知られる節供行事の継承もまた、困難な局面を迎えている。日本人の文化の多様性は国際的にも例がなく、そこには日本人固有の心性が託されているはずであり、博物館における人形の展示は、その継承への気づきともなる可能性を有している。恒例の展示を楽しみにしている来館者も多く、少しずつ作品を替えながら特集展示を継続的に実施するために、本年も収蔵品および新たな作品の調査を実施した。また、京都周辺には江戸時代の雛飾りを所蔵する旧家も少なくなく、世代交代を迎える中で処分を検討する事例が跡を絶たない。当館に寄せられる相談に応じ、聞き取り調査や実地調査を行うことにより、当館への寄贈や、より適切な収蔵先の決定へつなげることができた。31年度以降も、継続して同様の調査研究を行っていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究の一環として、特集展示「雛まつりと人形」に関する調査研究を実施した。高級工芸品の製作地でもあり消費地でもあった京都の特色を、調査研究を通じて得られた知見を活かしつつ、人形を通して紹介する展示につなげることができた。国内だけでなく諸外国からの観光客が増加する中、日本の豊かな生活文化の一端を示す雛まつりの展示をするための調査研究をこれからも継続的に実施していく。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1411Cア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剥落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料綱・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光X線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】			
<p>(1) 東京藝術大学の大学院生が行う信貴山縁起絵巻模写制作のため、高精細デジタル画像の撮影及び同絵巻山崎長者巻の原本熟覧調査を2度実施した(5月24日・9月26日)。同模写制作に当たっては、東京文化財研究所と当館の共同研究報告書『朝護孫子寺蔵 国宝信貴山縁起絵巻 調査研究報告書—光学調査編一』の成果に基づき使用する顔料の検討を重ねた。</p> <p>(2) 愛知県立芸術大学が進める聖衆来迎寺蔵絹本着色楊柳観音像復元模写制作の基礎資料を提供するために高精細デジタルカメラ等の光学機器を用いた顔料調査を実施し、制作が進められた復元模写と原本との詳細な比較検討を行った(31年1月29日)。</p>			
 東京藝術大学大学院生による 信貴山縁起絵巻模写制作			
【備考】			
調査回数: 3回 (5月24日・9月26日: 信貴山縁起絵巻調査、31年1月29日: 聖衆来迎寺蔵楊柳観音像調査) 調査作品数: 2件 (信貴山縁起絵巻山崎長者巻1巻、聖衆来迎寺蔵楊柳観音像1幅)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京藝術大学大学院生による信貴山縁起絵巻模写のため、当館と東京文化財研究所の共同研究による光学的調査の成果を提供するとともに、原本の詳細な熟覧調査を2度設けることができた。また、愛知県立芸術大学大学院生による聖衆来迎寺蔵楊柳観音像模写制作のため、当館が撮影した高精細カラー画像・近赤外線画像を提供するとともに、同大学と共同で各種の光学的調査を実施し、そこで得られた成果に基づいて制作当初の顔料を復元的に考察した。こうした文化財の現状模写や復元模写は、未来に継承すべき文化財の現状を顔料や基底材の質感と共に詳細に記録するとともに、現在は経年の劣化などによって失われた文化財の制作当初の姿を明らかにすることで、文化財が持つ比類なき価値を広く共有することが可能となるものである。こうした模写制作に当館が実施する最新の光学機器を用いた調査成果を反映することにより、模写の精度を飛躍的に向上することが可能となる。さらにこうした取り組みを31年度以降も継続し、模写制作を通じて得られる顔料・基底材等の知見を蓄積していくことで、絵画作品を中心とする文化財の素材研究に大きく寄与することができるだろう。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	信貴山縁起絵巻、聖衆来迎寺蔵楊柳観音像という当館を代表する寄託品について復元模写を制作するにあたり、東京藝術大学、愛知県立芸術大学とともに精度の高い光学的調査・熟覧を実施し、その成果に基づいて研究会等を重ねながら彩色等の復元的考察を加え、着実に復元模写制作に寄与することができた。31年度以降も、芸術系大学による復元模写制作に積極的に寄与できるよう、引き続きこれまでと同様の光学的調査をはじめ各種の調査研究を実施することで、中期計画の達成を目指す。

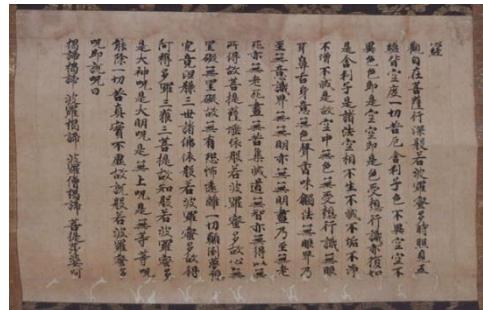
業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称	イ 古代の写経と聖教に関する基礎的研究 ((4)-①-1))	
【事業概要】		
我が国には、寺院を中心に古代の写経や聖教が数多く伝来している。それは、人文科学全般にとって重要な研究資料であるが、たとえば文学作品や歴史書、古文書などに比較すると、仏教学以外の分野での資料としての利用が低調である。本研究は、当館の主要な蔵品である古代の写経と聖教を基軸に、文化財学的な立場から資料を調査し、多分野での利用に堪える基本情報の提示を目指すものである。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】 企画室長 野尻忠

【主な成果】

(1) 写経の調査

- ・奈良時代（8世紀）書写的『大般若経』で白点の施された遺品について、国語学の専門家を招いて共同調査し（6月11日）、白書の仮名・反切等が平安初期の加点であること、訓読を示すヲコト点も同時期で、種類としては喜多院点であることが判明した。
- ・「隅寺心経」の名で知られる『般若心経』を、3種調査した（7月13日個人蔵分。7月20日寄贈候補分）。その結果、寄贈候補の品は、すでに知られている海龍王寺本と同筆であることが判明した。
- ・『法華経』の断簡「蝶鳥下絵経切」と、『賢愚経』の断簡「大聖武」（いずれも個人蔵）を調査した。（9月5日）
- ・科研：基盤研究(A)「古代～中世の『鎌石』と『真鎌』の研究—金に等しい価値があったころー」（課題番号：18H03591、研究代表者：西山要一）の一環として、金字経研究会を当館で4回開催し（12月18日～31年2月24日）、館蔵の紺紙金字経を集中的に蛍光エックス線調査した。その結果は、材質を特定できないものが多かったが、金(Au)使用と真鎌(Cu, Zn等の合金)使用の両様が認められた。
- ・31年2月14日・15日に、東京国立博物館主催の書跡特別調査を受け入れ、機構内書跡担当により写経・版経の総合調査を実施した。



海龍王寺本との同筆関係が判明した隅寺心経

(2) 聖教の調査

- ・醍醐寺所蔵の『聖徳太子伝記』『太子曼荼羅講式』『諸寺縁起』を調査した。（4月14日、5月30日）
- ・東大寺（奈良市）において、同図書館蔵の聖教を調査した。（6月4日～5日）
- ・仁和寺（京都市）において、御経蔵の聖教を調査した。（7月30日）
- ・寄託品である『聖徳太子伝暦』を、徳島県の文化財調査員とともに調査した。（9月13日）

(3) 紙素材文化財一般の調査

- ・『三会定一記』や『古今和歌集』等、それに南都寺院文書（旧石崎文書）（以上いずれも個人蔵）を調査した（9月14日・20日・29日、10月30日、11月26日・29日）。『古今和歌集』の調査では、国文学の専門家の同席を得た。

(4) 研究成果の開示

- ・上記の研究や、29年度までに蓄積された研究の成果の一部を、修理完成記念特別展『糸のみほとけ—国宝 緞織當麻曼荼羅と繡仏—』図録に掲載の解説文で発表したほか、平常展での展示解説等に反映させた。

【備考】

- ・野尻忠「奈良時代の二つの紫紙金字経」（奈良国立博物館サンデーターク、31年1月20日）などで研究成果を発表

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、以前から継続している基本的な文化財調査に加え、新たに金字経の材質調査に着手した。今のところデータの蓄積を優先し、解析は先送りしているが、31年度以降に研究へと発展させる。また、調査点や国文学関係典籍の調査にあたっては、外部の研究機関に属する専門家に同席してもらい、新たな知見を得ることができた。このように、年度計画にうたう着実な基本情報の蓄積は達成できているが、一方で、外部への公表の面ではやや物足りない結果となつており、31年度以降は積極的に発表の場を設けていく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の調査と研究は、順調に実施できている。調査により得られた知見は、順次、展示会場や出版物における解説文等に反映できており、中期計画にある展覧事業に関連する調査研究の1つとして成果を上げている。30年度は、新たな手法による調査も試みており、今後さらに多角的な文化財情報の蓄積が期待できる。蓄積した情報は、原品の保管者として、それを簡単には調査できない多くの研究者に対する責任を果たすめ、機会あるごとに公表していく必要があり、今後はその取り組みを強化する。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1411C ウ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 仏教工芸・上代工芸の総合的調査 ((4)-①-1))		
【事業概要】 仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関・社寺等が所蔵する作品に及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館の所在する奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長 清水健
【主な成果】			
1) 展覧会に関する調査 ・創建 1250 年記念特別展「国宝 春日大社のすべて」(以下、「国宝 春日大社のすべて」)にて借用した文化財の調査・写真撮影を実施した。 ①借用した文化財の X 線 CT 撮影、蛍光エックス線分析を含む調査(6月 20 日、8月 10 日)。 ②借用した文化財に係る調査・研究会を実施(6月 6 日) ・修理完成記念特別展「糸のみほとけ—国宝 織織當麻曼荼羅と繡仏—」(以下、「糸のみほとけ」)にて借用した文化財の調査・写真撮影を実施した。 ・科学研究費助成事業 基盤研究(C)「染織技法による仏像の研究」(研究代表者・内藤栄)は、仏教工芸の調査研究の一環として、「糸のみほとけ」展の事前調査を兼ねて実施した。また本研究によって会期前後にも借用した文化財の調査を行った。 ・31 年度特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」に係る事前調査・写真撮影を実施した。			
2) 外部資金による調査 ・科学研究費助成事業 基盤研究(C)「染織技法による仏像の研究」(研究代表者・内藤栄)による調査を 10 件実施した。 ①川島織物セルコンにて復元模造(特別展「糸のみほとけ」にて公開)の打ち合わせ。進捗状況の確認(4月 18 日)。 ②館蔵・寄託品及び借用した文化財の光学的手法による染料調査(9月 5 日)、ほか。 ・科学研究費助成事業 基盤研究(B)「海洋交易路による仏教流伝形態の研究」(研究代表者・松長有慶)による文化財調査に研究分担者として内藤栄が参加し、オランダ・アムステルダム国立美術館、ライデン民族学博物館で調査を行った(12月 9 日～13 日)。			
3) 経常調査、その他の調査 ・国宝当麻寺西塔発見の舍利莊嚴具の調査・撮影を実施し、一般財団法人デジタル文化財創出機構の支援を得て、金製・銀製・金銅製舍利容器の模造品を制作した(11月 14 日に記者発表)。 ・修理寄託中の文化財につき、X 線撮影を含む調査を行った(5月 26 日、6月 29 日)。 ・調査・研究のため一時的に預かる文化財の X 線 CT 撮影、蛍光エックス線分析を含む調査を行った(12月 20 日)。 ・国宝当麻寺西塔発見の舍利莊嚴具に関して調査・研究会を実施した(31 年 2 月 16 日)。 ・収蔵する仏教工芸品について隨時調査を実施した。			
【備考】 ・調査 59 回(うち客員研究員・調査員による調査 6 回。海外調査 2 回)			



年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表するという、事業概要に従い、当初の計画に基づき、概ね成果を達成している。30年度は、国宝当麻寺西塔より発見された舍利莊嚴具のうち金製・銀製・金銅製舍利容器の模造品の制作を行ったことや、科学研究費助成事業も活用し、特別展「国宝 春日大社のすべて」、同「糸のみほとけ」で借用した文化財等の調査を数多く実施することができた点が評価される。加えて、所蔵者の協力を得て特別展「藤田美術館展」の事前調査・写真撮影についても成果を上げることができた。また、29年度新たに導入された X 線 CT 装置を用いた調査・研究も充実し、金工・木漆工のデータを蓄積した。今後は一層の多くのデータの取得と活用に努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会に関する調査に加え、継続して行っている奈良周辺の文化財の調査・研究、仏教工芸に関する調査・研究、上代工芸に関する調査・研究について一定程度成果を上げることができた。また、光学機器を用いた調査では、新たに導入した X 線 CT 装置を活用して模造制作に取り組むなど、大きな前進を遂げた。なお、光学調査は成果の期待される分野であり、一層のデータの蓄積や分析、活用に努力すべきと考える。31年度は従来の成果を引き継ぎ、調査回数の維持に努め、対象となる文化財の多角的な調査に励むなど、計画の遂行に努力したい。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1411Cエ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	エ 墳墓出土品の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 当館蔵の墳墓出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室長 吉澤悟
【主な成果】			
(1)群馬県白山古墳出土品の調査 28年度より続いている白山古墳（群馬県前橋市）出土品の調査・研究を30年度も推進した。本品には和同開珎や銅碗など8世紀初頭の遺物が含まれており、関東地方の古墳消滅過程を考える上で定点となる資料である。28年度に発表した「群馬県白山古墳出土品の研究1」に続く「同2」を、新たな研究メンバーを加えて作成しており、新たな分析成果や三次元計測図などを公表している。これにより東日本の古墳の消滅と畿内の律令的文化の波及が重なり合いながら、新たな地域文化が形成されて行く過程を見通すことができた。また、30年度、本品一式を地元の群馬県立歴史博物館に貸与し、その展示企画と併せて地元研究者と公開鼎談を行った。その際、同古墳の発掘当時の貴重な情報を地元より得ることができ、本品の評価に大いに役立った。			
(2)五條猫塚古墳出土品の貸与と情報発信 五條猫塚古墳出土品の中から主要な遺物約20件を選び、地元の五條市文化博物館に貸与・公開を進めた。本古墳の発掘60年を記念し、また当館から研究報告書が刊行されたことから、過去の成果と新たな知見を紹介するべく、普段よりも多くの重要遺物を貸与・公開した。			
(3)行基墓誌断片の調査 奈良時代の僧侶にして社会事業の先駆者として知られる行基の唯一の直接遺品、銅製墓誌断片（当館蔵）の再調査を行った。本品の再実測、蛍光X線分析による素材調査などから得られた特徴について詳細に報告を作成し、さらに行基墓の造営に関わった「行基集団」の性格について考察を行った。			
(4)中世墓出土品の基礎調査 当館所蔵の古瀬戸瓶子や常滑甕等、寄託保管されている白磁四耳壺や銅製骨蔵器など、鎌倉から室町時代にかけての墳墓出土品について写真撮影や再計測、類例の探索などを行った。その成果の一部は、特別陳列「覚盛上人770年御忌 鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」の展示品解説や論考に活用している。			
【備考】			
(1)研究報告／諫早直人・大江克巳・金字大・降幡順子・山口欧志・吉澤悟「群馬県白山古墳出土品の研究2」 『鹿園雑集』第21号 奈良国立博物館 31年4月予定 展示／群馬県立歴史博物館 テーマ展示 白山古墳出土品 8月7日～9月24日 発表・鼎談／吉澤悟「出土遺物からみた白山古墳の特徴」 松本浩一・右島和夫・吉澤悟「鼎談・古墳と和同開珎－最後の古墳・白山古墳を考える－」 於：群馬県立歴史博物館、9月15日			
(2)展示／夏季特別展「五條猫塚発掘60年」 五條市立文化博物館 7月21日～9月24日 (3)論文／吉澤悟「行基墓誌断片を考える」『鹿園雑集』第21号 奈良国立博物館 31年4月予定 (4)図録解説／特別陳列「覚盛上人770年遠忌 鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」 奈良国立博物館 31年2月8日			



年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵および寄託の墳墓出土品を積極的に調査・研究・展示することができた。特に白山古墳出土品や五條猫塚古墳出土品の展示では、館外における公開、情報発信に寄与することができた。また行基墓誌の再調査や中世墳墓遺物の調査は、科学研究費助成事業の助成を受けた研究活動とも連動しており、基礎的研究を着実に進めると同時に、その成果を展覧会の解説にも繋げることができた点で、大きな成果を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の調査研究の一環として、当館の所蔵品・寄託品を中心に、積極的に調査や整理活動を行った。また館の内外の展示でその成果を活用することができた。中期計画に従った活動はおおむね順調である。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1411C オ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	オ 南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究 ((4)-(1)-1))		
【事業概要】 展覧会開催に際して借用した作品や館蔵・寄託作品、また館外の寺社等の作品のなかから、南都伝来もしくは南都と関わりの深い古代・中世の彫刻を選び、詳細な調査の作成とデジタル高精細画像の写真撮影やX線ないしCTスキャン調査を通じ、データの収集と蓄積を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 岩田茂樹
【主な成果】 (1) 館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名は下記のとおり。 (2) 調査を通じて重要な学術的知見を得ることができた。 (3) 特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、講座等における報告、また論文等刊行物のかたちで新知見の発表を行った。また一部については31年度以降の刊行物に発表する。 [作品名] 氷室神社舞楽面(5月10日)／春日大社舞楽面(5月14日)／東京国立博物館文殊五尊像(5月21日)／奈良市写真美術館ガラス乾板(5月22日)／興福寺古写真(5月24日)／奈良大学ガラス乾板(5月29日)／醍醐寺不動明王坐像・阿弥陀如来坐像(5月30日)／悲田院宝冠阿弥陀如来坐像(5月30日)／觀音寺菩薩坐像(6月18日)／当館愛染明王坐像(6月18日)／法徳寺地蔵菩薩立像・菩薩立像・菩薩半跏像・二天王立像(6月22日)／安樂寺阿弥陀如来立像・地藏菩薩立像(7月18日)／法徳寺文殊菩薩坐像・如来坐像・飛天像(7月26日)／藤田美術館阿弥陀菩薩坐像・釈迦三尊像・楊柳観音立像(8月8日)／春日大社流鏑馬像(8月21日)／法徳寺千体仏像(9月7日)／念佛寺阿弥陀三尊像・如来坐像(9月8日)／西光寺十一面觀音菩薩立像・不動明王立像・毘沙門天立像(9月8日)／甘南備寺藥師三尊像(9月9日)／西念寺阿弥陀如来立像(9月9日)／法明寺天部立像(9月14日)／十市町自治会大日如来坐像(9月14日)／藤田美術館阿弥陀如来立像(10月2日)／藤田美術館十二神将立像・四天王立像(11月8日)／長林寺聖德太子立像(11月11日)／西念寺藥師堂藥師如来坐像・地藏菩薩坐像・毘沙門天立像・不動明王立像・十二神將立像(11月23日)／如意輪寺如意輪觀音菩薩坐像(11月29日)／金剛峯寺深少大將立像・執金剛神立像(12月5日)／遍照光院阿弥陀如来立像・阿弥陀三尊像(12月6日)／光台院阿弥陀三尊像(12月7日)／慶照寺阿弥陀如来立像・阿弥陀三尊像(12月22日)／極樂寺阿弥陀三尊像(12月22日)／當麻寺光背(8面)(12月26日) [調査の成果] 奈良市写真美術館と奈良大学所蔵のガラス乾板を興福寺所蔵の古写真と照合する調査を通じて、国内外に現存する複数の彫刻作品の原所在地を突きとめることができた。觀音寺菩薩坐像のCTスキャン撮影を通じて木心乾漆造の構造技法について新たな知見を得ることができた。春日大社流鏑馬像の調査の結果、同像が從来言われているより時代がさかのぼり、平安時代の作とみなされるにいたった。長林寺聖德太子立像について鎌倉時代にさかのぼる作品であることが新たにわかり、かつその構造技法上の特色が知られた。如意輪寺如意輪觀音坐像については秘仏のため從来調査が行われていなかったが、初めての本格的学術調査の結果、鎌倉時代の作であることが判明するとともに、像の伝来に関わる銘記も発見された。遍照光院阿弥陀三尊像も本格的学術調査は今回が初めてであり、その結果、鎌倉時代の慶派作品と推定され、同院の歴史に関連する重要作品と考えられることとなった。			
【備考】 (1) 調査回数 53回 (3) ・奈良市写真美術館・奈良大学および興福寺所蔵の古写真・ガラス乾板に関する調査の成果を、東京国立博物館研究誌『MUSEUM』676号(10月15日発行)掲載論文「明治時代の興福寺における仏像の移動と現所在地について—興福寺所蔵の古写真をもちいた史料学的研究—」(執筆山口隆介・宮崎幹子)で公開した。 ・当館愛染明王坐像ほかの諸像と、十市町自治会大日如来坐像についての調査成果及び写真を、11月1日に発行した『なら仏像館 名品図録』に反映させた。 ・法明寺天部立像に関する調査の成果は、12月26日から31年1月20日に開催された特集展示「新たに修理された文化財」の展示を通じて公開した。 ・醍醐寺不動明王坐像・悲田院宝冠阿弥陀如来坐像・安樂寺阿弥陀如来立像・同寺地蔵菩薩立像・遍照光院阿弥陀如来立像・同院阿弥陀三尊像・光台院阿弥陀三尊像に関する知見ならびに写真を、30年度末に発行予定の当館研究紀要『鹿園雑集』21号に掲載する「(調査報告)快慶展CTスキャン調査報告」(執筆岩田茂樹・岩井共二・山口隆介)ならびに31年度発行予定の豪華図録『快慶』(執筆同上)において発表する。 ・藤田美術館所蔵の複数の彫刻作品に関する調査成果及び写真を、31年4月13日から6月9日まで開催される特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」に反映させる。また同展開催中の公開講座「(仮)藤田美術館の仏教美術コレクション」(5月25日、担当岩井共二)にも反映させる。 ・法徳寺の諸尊像に関する調査で得られた知見ならびに撮影した写真を、31年7月13日から9月8日に開催予定の特別陳列「(仮)法徳寺の仏像」の展示・図録で公開する。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	調査回数は29年度は35回であったので、さらに大幅に増加した。かつその成果は30年度発行の刊行物や特集展示に反映され、また31年度開催予定の特別展や特別陳列、あるいは講座等に反映される。計画に対し、十二分に成果が得られたと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	29年度に引きつづき、南都に伝来ないし南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、調査の作成や記録写真の撮影、CT・X線等の光学的手法による調査を行った結果、データの収集・蓄積に十二分の成果をあげている。中期計画の3年目として、ハイペースで事業を継続している。今後も同様のペースで事業を進めたい。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1411C カ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	カ 東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づいて、当館が所蔵及び保管する仏教絵画を中心とする美術作品について、高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器など最新の光学機器を用いた文化財調査を実施し、併せてデジタルコンテンツの作成を行うものである。上記の調査を通じて、色料や基底材など作品に用いられる素材の情報や、制作技法に関する情報、補彩・補綴など補修箇所に関する情報を大量・精緻に蓄積し、報告書等でその成果を広く公表することで、美術史的研究や将来の修理に資することも視野に入れている。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】			
<p>(1) 29年度末に刊行した報告書『信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵卷調査研究報告書一光学調査編一』の掲載データに基づいて、国宝信貴山縁起絵卷に用いられる顔料の復元的考察に関する研究会を開催した。さらに同絵巻に関する光学的調査成果と美術史的考察を総括的に盛り込む研究報告書『信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻調査研究報告書一研究編一』の31年度中の刊行に向けて東京文化財研究所研究員と編集会議を開催した(12月11日)。</p> <p>(2) 24年度から継続的に実施してきた国宝綴織當麻曼荼羅(當麻寺蔵)を対象とする光学調査の一環として、29年度末に本格修理が完成した原本に対する追加調査を実施した(4月23日)。本調査では高精細デジタルカメラを用いてカラー画像、近赤外線画像、顕微鏡写真の撮影を実施し、分割撮影した高精細画像の接合データを7月14日から開催の修理完成記念特別展「糸のみほとけ—国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏—」(以下、「糸のみほとけ」)において展覧会図録や復元模型制作、ミニシアターなどに活用した。</p>			
【備考】			
調査回数 1回(4月23日)、調査作品数 1件(国宝 綴織當麻曼荼羅 1幅) 研究会等開催件数 2件(5月24日・9月7日)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から継続的に実施してきた東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づき、平安絵巻を代表する名品である国宝信貴山縁起絵巻について、光学的調査の成果報告書第2冊の31年度刊行に向けて、調査データの整理・分析を進め、美術史的な考察を加える検討会も計画どおり実施することができた。また24年度から協同研究の一環として継続的に実施してきた国宝綴織當麻曼荼羅(當麻寺蔵)の光学的調査について、原本の本格修理が完成したという絶好の機会を捉えて追加調査を実施することができた。これら精度の高い調査データは、東京文化財研究所の研究員とともに詳細な分析を加え、現在刊行を計画中の綴織當麻曼荼羅に関する調査成果報告書において広く公表する予定である。



国宝綴織當麻曼荼羅の光学的調査で得られた近赤外線写真

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所との共同研究に基づき、30年度は平安絵巻を代表する信貴山縁起絵巻の調査報告書第2冊の31年度刊行に向けて、検討会及び編集作業を着実に進めた。さらに、24年度から継続的に実施してきた国宝綴織當麻曼荼羅に関する追加調査を実施し、その成果として得られた画像データを7月14日から当館で開催した特別展「糸のみほとけ」に活用・公開することができた。今後はこれまでの個々の作品調査や研究から一步踏み込んで、彩色の施された文化財に関する総合的な研究と情報の共有という広い枠組みの中で検討を重ねることで、中期計画の達成を目指した更なる進展を図りたい。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1411C キ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	特別陳列「おん祭と春日信仰の美術—特集 大宿所—」に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 春日大社摂社若宮社の祭礼であるおん祭の歴史・伝統と、春日信仰に関連した美術作品を紹介する展覧会。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 斎木涼子
【主な成果】 (1)京都大学附属図書館所蔵「奈良与力橋本家律令雜記」に含まれる、春日若宮おん祭関係史料の調査 江戸時代に奈良奉行与力を務めた橋本家の記録、「奈良与力橋本家律令雜記」に含まれるおん祭関係史料については、28年に同年度の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」への出陳を前提とした調査を行い、その概要を把握していた。その際に、存在を確認していたものの、調査に及ばなかった史料について、30年に詳しい調査を行い、30年度の特集テーマに沿った史料を選定することができた。 (2)春日大社所蔵「大宿所春日若宮祭式事件并品書」の調査 調査の結果、すでに知られている別所蔵者写本の原本となった作品であることが確認された。 (3)以上の(1)(2)の調査成果により、30年度特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の特集テーマ「大宿所」の内容を充実したものにすることができた。またこれにともない、従来未紹介であった「奈良与力橋本家律令雜記」の史料2点、また「大宿所春日若宮祭式事件并品書」を、展示・紹介することができた。			
【備考】 ・調査：京都大学附属図書館 1回（2点） 春日大社所蔵品 1回（1点） ・論文等：斎木涼子 「おん祭と春日信仰の美術—特集 大宿所—」（特別陳列『おん祭と春日信仰の美術』図録 展示概説、奈良国立博物館、12月） ・特別陳列『おん祭と春日信仰の美術』（12月11日～31年1月20日、奈良国立博物館東新館）			



春日大社所蔵「大宿所春日若宮祭式事件并品書」

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	春日大社の伝統行事「春日若宮おん祭」について、注目されることの少なかった江戸時代の史料群の調査を行い、その存在を評価し、展示を通じて広く公表することができた。また例年、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」については、主に美術作品や芸能関係資料、また華やかな祭礼の側面を中心としたテーマ設定がなされることが多かったが、30年度は祭礼を支える部分にスポットをあて、その結果、今までにない新しい観点から展覧会を構成することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平安時代以来の長い歴史を持ち、重要無形民俗文化財である「春日若宮おん祭」の歴史、また春日社に対する信仰について、例年新たな切り口を見出し、展覧会を通じてその多様な魅力、歴史・文化における重要性を紹介することができている。今後も、祭礼や信仰の様々な側面に関する研究を行い、新たな知見を提示していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究
プロジェクト名称	特別陳列「覚盛上人 770 年御忌 鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」に関する調査研究 ((4)-①-1)

【事業概要】

特別陳列「覚盛上人 770 年御忌 鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興」の開催にあたり、展示候補となる文化財を調査し、実際の展示や図録などの形で研究成果を発表し、さらに今後の研究活動へと結びつける。

【担当部課】 学芸部	【プロジェクト責任者】 企画室長 野尻忠
------------	----------------------

【主な成果】

(1) 展示候補資料の調査

- ・覚盛上人の命日に、今も毎年おこなわれる「梵網会」を、特別陳列準備のため取材した。(唐招提寺) (5月 19 日)
- ・出陳候補の「證玄骨藏器」を初めて開封するにあたり、元興寺文化財研究所とともに構造を調査した (8月 28 日)。開封は唐招提寺に於いて 9月 10 日に実施された。

(2) 展示のための調査・写真撮影

- ・證玄骨藏器の細部を調査した。(元興寺文化財研究所) (10月 3 日)
- ・大悲菩薩(覚盛)坐像を調査し、構造等を確認した。(唐招提寺中興堂) (11月 5 日)
- ・図録やパネルに使用する写真原板を調査した。(京都国立博物館、飛鳥園) (11月 29 日ほか)
- ・初出陳となる円律上人(證玄)像や、覚盛願経などを調査し、また写真撮影した。(唐招提寺) (12月 21 日)
- ・證玄骨藏器の内容品を調査した。(唐招提寺) (12月 21 日)

(3) 研究成果の公開

- ・特別陳列の開催にあわせて展覧会図録を刊行した。図録には論文 3 本を掲載したほか、初公開の證玄骨藏記や円律上人像を含む 21 件の展示品の図版と解説文を収めた。
- ・会期中に、一般観覧者向けの公開講座「覚盛上人の事跡—唐招提寺中興—」を講堂で実施した。(31年 2月 23 日)

(4) 本研究の意義

- ・覚盛(1193~1212)は、鎌倉時代前期に奈良での戒律復興に重要な役割を果たした僧だが、その事跡についてはあまり広く知られていなかった。今回、覚盛関係史料を網羅的に整理したことは、研究史上に特筆されるものである。
- ・今回初めて科学的調査の対象となった證玄骨藏器は、X線 CT 等の手法を取り入れて構造の分析が進み、同時代の他の骨藏記との比較研究に資する情報を提供することができた。



図録掲載の證玄骨藏記 CT 画像

【備考】

- ・図録に掲載した論文は、野尻忠「総説 鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興～覚盛の事跡を中心に」、吉澤悟「證玄と忍性の骨藏記—律僧の選んだ「舍利瓶」のかたち—」など 3 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奈良の中世史や仏教史を語るうえで欠かせない僧覚盛の御忌の年に、その生涯と事跡を広く紹介することができた。あわせて、覚盛の前後に唐招提寺を支えた貞慶、證玄といった僧の活動にも触れ、覚盛の事跡を相対化することができた。初公開の資料については十分に調査し、今後の研究進展に資する情報を探査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査を通じて得た知見を展覧会の形で国民に還元するという計画は、順調に達成されている。31年度以降も、引き続き、奈良の地域に密着したテーマにより、文化財の着実な調査と、それに基づく研究、そして展示公開を継続していく。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1411Cケ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関する調査研究
プロジェクト名称	X線CTスキャナ等による彫刻・漆工・考古資料などの文化財に関する構造技法の調査研究 (4)-(①-1))

【事業概要】

本事業では、以下の内容について実施した。

- (1) 展覧会で借用した文化財に対して、状態確認や製作技法解明などを目的としてX線CTスキャナによる調査を実施した。得られた結果は文化財の保管環境向上の資料として活用を図る。
- (2) 館蔵品や寄託品に対して、状態確認や製作技法解明などを目的としてX線CTスキャナによる調査を実施した。得られた成果は保存カルテ作製や修理の際での利用を予定している。
- (3) 他の博物館・美術館、教育委員会や大学等から依頼のあった文化財等について、構造や製作技法解明を目的としてX線CTスキャナによる共同調査を実施した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
--------	-----	-------------	---------------

【主な成果】

- (1) 創建1250年記念特別展「国宝 春日大社のすべて」出陳品6件、修理完成記念特別展「糸のみほとけ-国宝 緞織當麻曼荼羅と繡仮-」出陳品1件、特別展「国宝の殿堂 藤田美術館」出陳予定品1件の木彫像や漆工品に対してCT調査を行い、構造、納入品や虫損などの状況が確認できた。
- (2) 館蔵や寄託の彫刻・考古資料を8件CT調査し、外観から把握できなかった構造や劣化、過去の修理状況が確認できた。
- (3) 指定候補作品や仏教美術に関する資料など16件あまりの文化財に対してCT調査を行い、構造や製作技法などに関する知見を得た。

調査で得られた成果については、報道発表「法華寺所蔵 文殊菩薩坐像の公開」、「岡寺所蔵 本尊脇侍 不動明王像・愛染明王像 平成の大修理完了調査報告」などを行うとともに、31年度以降当館紀要や学会等での公開を予定している。



梱包状態でのCT調査の様子

【備考】

- ・ X線CTスキャナ調査件数：152件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度に導入したX線CTスキャナを活用し、展覧会の借用品、館蔵品や寄託品、外部から依頼のあった文化財など、152件の文化財などを調査し情報の蓄積を図った。成果は研究紀要や学会等で発表し、構造や製作技法など文化財の価値の再評価に役立つ基礎資料を提供した。31年度についても、継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度に導入したX線CTスキャナは順調に稼働しており、展覧会の借用品、館蔵品や寄託品などを随時調査し情報の蓄積を図った。31年度も調査を継続し、データの蓄積を図るとともに中期計画の達成を目指す。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1411Dア

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア X線CTスキャナ等による文化財の構造技法解析に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 X線CTスキャナ等による有形文化財の構造技法に関する調査研究を実施し、展覧事業・教育活動等に資する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】			
(1) 銅鐸及び大刀の内部構造調査 神戸市立博物館所蔵の国宝桜ヶ丘銅鐸については、過去に当館でX線CTスキャナ等による総合診断調査を実施したが、X線減衰の影響のため舞(鐸の上面部)を可視化することはできなかった。30年度は、全14口の銅鐸のX線CTスキャナによる再調査を実施した。舞面をX線の照射方向と垂直に保持した状態でスキャンを行うことで、舞の内部状態を記録に収めた。この他、銀象嵌大刀のX線CT調査を実施し、鑄に埋もれた象嵌及び表面に残った象嵌の文様を確認することができた。			
(2) 3Dプリンタによるレプリカの製作 野村美術館所蔵の南蛮毛織水指のX線CTスキャン及び三次元計測を実施した。その結果、身は中央で異なる金属板を鍛接させていること、蓋は9個の部材を組み合わせて作られていること等、構造技法に関する特徴が明らかになった。得られたCTデータと三次元計測データを組み合わせ、3Dプリンタによって精巧な立体資料を作成した。これによって、薄く延ばした水指の特徴を手にとって観察できるようになった。また、熊本県の国越古墳出土銅碗の過去の測定データに基づき、3Dプリンタによってレプリカを出力した。レプリカは2点製作し、熊本県立装飾古墳館と当館にてハンズオンで展示した。			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・X線CT調査件数 20件、調査回数 160回 ・三次元計測調査件数 7件、調査回数 45回 ・学会発表：「国宝『初音の調度』-耳盤・輪台、渡金箱、旅眉作箱-のX線CTによる構造・技法調査」 日本文化財科学会第35回大会（7月6日、7日） ・関連展覧会：「特集展示『国宝 銅鐸絵画』」（7月10日～9月2日）、「文化交流展『たたいて削って青銅器－東アジアの響銅－』」（9月15日～12月23日） 			



桜ヶ丘銅鐸のX線CT調査の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は26件の文化財調査を実施し、銅鐸や象嵌大刀などの作品の保存状態や内部構造に関する新たな知見を得ることができた。また、これまでの調査データをレプリカの製作や学会発表などを通じて公表し、研究成果の普及に努めた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿ってこれまで各種文化財の構造技法解析を実施し、文化財の製作技法に関する理解を深め、展示や学会発表などによって公表してきた。30年度もこれまで通り調査を進められたことに加え、文化財の材質・形状に応じた調査手法の改良及びレプリカの製作を実施することができた。31年度は、更新後のX線CTスキャナを活用してより高精細な解析を実施する。また、銀象嵌大刀における象嵌文様を効果的に解説するための実物大ポスターを作成する等、研究成果を展示事業・教育活動へ還元していく。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1411D イ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	イ 近世キリスト教に関する研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 近世（安土桃山時代から江戸時代まで）の時代性を特徴付けるキリスト教の日本伝来と禁教に関する作品を展示して、近世日本におけるキリスト教の歴史や信仰に関する研究成果を発信する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 松浦晃佑
【主な成果】			
(1) 29年度からの継続事業として、「キリスト教の伝来と禁教」というテーマで、キリスト教の日本伝来から明治時代にキリスト教が撤廃されるまでの歴史を、観覧者がたどるように作品展示を行った（8月28日から31年3月31日まで）。また、同じく継続事業として、「キリスト教信仰の道具」というテーマで、幕末に長崎奉行所がキリスト教徒から没収、又は海外からもたらされた十字架やメダイ、島原・天草一揆に参加した人々が所持していた十字架やロザリオを展示し、信徒たちの信仰を知ってもらう作品展示を行った（11月20日から31年1月14日まで）。			
(2) 奈良・天理大学附属天理参考館と天理大学附属天理図書館が所蔵するキリスト教関係資料や南蛮関係資料、重要文化財に指定されているキリスト教版を調査した（11月6日、7日）。両館が所蔵するキリスト教関係資料の多くは、従来歴史的な位置付けがなされてこなかったが、調査を通じて、一定のまとまりに区分ができる見込みを得た。			
 「キリスト教の伝来と禁教」展示風景		 キリスト教関係資料調査風景 (於：天理参考館、11月6日)	
【備考】 調査回数 2回。 11月6日、天理大学附属天理参考館、調査点数 80点。11月7日、天理大学附属天理図書館、調査点数 15点。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	7月に「長崎と天草地方の潜伏キリスト教関連遺産」がUNESCO世界文化遺産に登録され、日本のキリスト教の歴史や信仰のあり方に対する関心が高まるなか、近世日本のキリスト教の歴史、キリスト教徒の信仰を作品展示にて紹介することで、社会的な要請に応えることができた。また、天理大学附属天理参考館と天理大学附属天理図書館の所蔵品の調査を通じて、従来歴史的な位置付けがなされてこなかった作品群を評価し直す見通しがついた。両館の協力を得て、展覧会を開催し、作品展示と解説図録にて研究成果を公開したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした文化財についての展示及び調査研究の一環として、近世日本の文化交流にとって非常に重要なキリスト教の歴史を、展覧事業を通じて、30年度も継続して広く紹介することができた。また、天理大学附属天理参考館と天理大学附属天理図書館等、他館の協力を得て、中期計画最終年度にキリスト教の歴史と文化を一般に紹介するとともに、研究成果を公開する展覧事業を行う見込みである。31年度は上記の継続事業と、32年度に行う展覧事業の準備を行う予定である。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1411D ウ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究					
プロジェクト名称	ウ 高等学校が所蔵する歴史資料に関する研究 ((4) -①-1))					
【事業概要】						
全国の高等学校には現在、校内遺跡出土品、発掘調査出土品等々、様々な来歴の考古資料が保管されている。高等学校所蔵考古資料の実態把握は、考古学研究上の重要性に加え、社会史的、教育史的意義を有する。しかしながら、考古学的知識を有する教職員の不足から、十分な管理、活用が行われているとはいえない状況にある。本研究は、高等学校所蔵考古資料の更なる活用に向けて、全国的な調査を実施し、その成果を展示、教育普及活動等の博物館活動を通じて広く公開するとともに、高等学校と博物館の効果的な連携活動について研究するものである。						
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 今井涼子			
【主な成果】						
(1) 高等学校所蔵考古資料の調査						
・30年度は東京都立北野高等学校（17年統廃合により廃校）と福島県立双葉高等学校（29年3月より休校）の旧蔵資料調査を行った。						
(2) 「全国高等学校歴史学フォーラム」の実施						
・29年度同様ポスター発表形式で実施し、7県10校（うち、福岡県4校）がポスター発表を行い、約300人が来場した。（8月4日）						
・福岡市内の中学校教員の視察、ケーブルテレビの取材を受けた。						
・「実験タイム～きゅーはく石器 de クッキング！」と題して、長崎県立壱岐高等学校生徒とともに、彼らが製作した黒曜石製石器で食材を切り、その切れ味を確かめることで、石器が生活に必要な道具であることを理解する体験事業を行った。						
・フォーラム終了後、参加生徒全員にフォーラム参加の感想、特に他校の発表についての意見を発表してもらい、参加生徒相互の意見交換を図った。						
・事業趣旨に賛同いただき、公益財団法人九州国立博物館振興財団の後援、太宰府天満宮の協力を得た。						
(3) 高等学校との連携事業の実施						
・30年度「全国高等学校歴史学フォーラム」に参加した福岡県立筑紫丘高等学校と連携し、写真研修を行った。（8月17日）29年度に当館において実施した文化財写真研修を踏まえ、高等学校において高校生が文化財写真を撮影する方法を習得することを目的とした。参加者は同校郷土研究部及び写真部の部員。撮影対象は同校所蔵考古資料。当館職員が講師を務めた。						
(4) 高等学校との連携事業の視察						
・当館での高校生を対象とした教育普及活動や博学連携活動の参考にする目的で、各地の博物館等が実施した高等学校との連携事業を視察、調査した。						
【備考】						
・30年度資料調査：福島県立双葉高校所蔵資料（4月20日、福島県文化財センター白河館）、都立北野高校旧蔵資料（5月24日、板橋区立民俗資料館）						
・30年度事業視察：日本考古学協会高校生ポスターセッション（5月27日）、岐阜県立関高等学校地域研究部企画展「東アジア史の案内人 渡辺三三旧蔵資料の研究」（9月29日）、登呂博物館・日本考古学協会共催公開講演会「子どもたちと語る考古学と未来」（11月3日）、群馬県立歴史博物館高校生向けワークショップ（11月20日）、福島県文化財センター常設展示室「みんなの研究広場」コーナー福島高校展示（11月21日）、京都市学校歴史博物館常設展示（11月27日）、京都文化博物館「第2回ミュージアムの課題と可能性を考えるワークショップ まちづくりと博物館」（31年2月2日）・「京都府内の学校所蔵考古・歴史資料展2」（31年3月9日）、京都市学校歴史博物館シンポジウム「学校資料の活用を考える-学校資料の価値と可能性-」（31年3月10日）						
・「全国高等学校歴史学フォーラム」取材：ケーブルステーション福岡						



全国高等学校歴史学フォーラムの様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、29年度に実施した調査等の成果を「全国高等学校考古名品展2018」で紹介し、「全国高等学校歴史学フォーラム」の運営に反映させた。また、29年度実施事業を踏まえ、高校生自身の研究活動を支援する内容の博学連携事業を実施した。31年度以降、30年度の実施成果を基に、継続的な博学連携事業の実施方法を検討する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。 31年度は引き続き博学連携事業に取り組みながら、3年間の研究結果を取りまとめ、他機関で参考にできるような形に整理する予定である。長期間継続可能な博学連携事業のあり方、内容について、実践を通して検討を進めるとともに、他機関の取り組みについてもさらに取材研究を進める必要がある。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1411D エ-1

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	エ 特集展示「国宝 銅鐸絵画」に関する調査研究 ((4) -①-1))		
【事業概要】 本事業は、特集展示「国宝 銅鐸絵画」展に関する調査研究事業である。8か年をかけた銅鐸に関する共同研究の成果を展覧会及び図録において広く、わかりやすく一般に公開した。			
【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 進村真之
【主な成果】 本展示は22年度より神戸市立博物館と当館が国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈（神戸市立博物館蔵）に関する共同研究を行ってきた成果を展示、図録、講演会、ワークショップ等で紹介するとともに、実物と計測データを見比べ検討する共同調査を行った。			
<p>(1) 7月10日～9月2日の期間に特集展示「国宝 銅鐸絵画」展を開催し、国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈の科学的調査の研究成果を展示及び図録で紹介した。桜ヶ丘4号・5号銅鐸と同一工房作とされる東京国立博物館所蔵の国宝・伝香川銅鐸も合わせて展示を行い、九州で初めて3口を並べての紹介となった。東京国立博物館からは伝香川銅鐸の三次元画像の提供を受けるとともに、関連展示として桜ヶ丘1号銅鐸と同じ鋳型で作られた泊銅鐸も借用し、展覧会の内容を更に深化させることができた。</p> <p>(2) 記念講演会「絵画銅鐸の魅力」(8月5日)を開催したほか、展覧会場内でのミュージアムトーク(7月18日1回、8月7日2回)を行った。教育普及活動としては3Dプリンターを活用した銅鐸拓本ワークショップ(8月12日)を行った。</p> <p>(3) 神戸市立博物館の研究者2人を招聘し、館内の研究員とともに桜ヶ丘4号・5号銅鐸と伝香川銅鐸の実物及び調査で取得した三次元画像による調査検討会を行った。</p>			
 <p>「国宝 銅鐸絵画」会場写真</p>			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	神戸市立博物館や東京国立博物館と緊密に連携を取り、これまでのX線CTや三次元デジタル計測のデータを活かして更に多くの研究成果を得ることができた。この研究成果を特集展示に反映し、広く一般に発信することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画「有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究」に基づき、銅鐸に関する調査研究を進め、その成果を特集展示に反映し、広く一般に発信することができた。 今回の共同研究に得られた知見を今後の調査研究および展覧事業、新たな教育普及事業に活用する予定である。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1411D エ-2

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	エ 特集展示「全国高等学校考古名品展 2018」に関する研究 ((4) -①-1))		
【事業概要】 30年度開催の特集展示「全国高等学校考古名品展 2018」の開催に向けた調査研究			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 今井涼子
【主な成果】			
(1) 資料調査 ・沼津市の加藤学園高等学校は、郷土研究部の活動が発展し、校内に考古学研究所が設立されており、同校の所蔵資料を調査した。研究所は静岡県東部を中心に発掘調査等の研究を行っており、非常に多くの資料が集積されていた。学校側の理解を得て、希望どおりの資料を借用できた。			
(2) 特集展示「全国高等学校考古名品展 2018」 ・10都道府県 11校の所蔵資料並びに関係資料を展示了。学校はこれまでの「全国高等学校考古名品展」出品校を除いた中から選定した。また、考古資料だけでなく、高校生による考古学的研究活動に関する資料を展示し、研究活動の内容や成果を盛り込んだ。 ・考古資料は時代順に展示し、歴史上または学史上の重要性、地域性や普遍性など、資料ごとにポイントをしぼった解説を付し、考古資料の用途や意義等をわかりやすく示すよう努めた。 ・高校生による研究活動をより具体的に理解できるよう、古墳群の平板実測図の展示に合わせて平板測量に使用する道具を展示し、実測作業の一部を体験できるようにした。 ・会場内は一部資料を除いて写真撮影可とした。 ・所蔵資料を出品いただいた学校のうち 5校の関係者が来館し、本展を観覧。展示状況、内容ともにご満足いただけた。 ・資料の借用、返却の際は、できるだけ学校側の対応者と多くの情報交換を行うよう留意し、本展開催にあたって得られた成果を還元できるよう努めた。 ・交流課教育普及室および企画課教育普及担当と連携して、特集展示関連イベント「なりきり考古学者体験 平板測量スペシャル」を実施した。小学校 4年生から 6年生までを対象とした回と、中学生以上を対象とした回を設け、各 2回ずつ計 4回行った。実施前は体験者にとって理解が難しい作業であることを懸念していたが、遺跡の成り立ちや実測対象と実測図の見比べなど、実測作業の前後にあたる部分を丁寧に説明することで小学生も作業の意味を理解できることがわかり、十分に体験事業として実施できる手応えを得た。 ・企画課教育普及担当と連携して、本展とほぼ同時期に開催した特集展示「国宝 銅鐸絵画展」と併せた PR 動画を制作し、当館ウェブサイトに掲載した。また、当該 PR 動画には、和歌山県立紀伊風土記の丘と京都府京都文化博物館の協力を得て、本展と同様に学校所蔵資料を紹介する展覧会である「学校のたからものⅡ」展と「京都府内の学校所蔵考古・歴史資料展 2」の告知を盛り込んだ。			
【備考】 ・30年度資料調査：1回 加藤学園高等学校（4月 11日） ・福島県立相馬高等学校、玉川学園教育博物館（町田市）、島根県立松江北高等学校、福岡県立宗像高等学校、長崎県立対馬高等学校の関係者が展示視察。 ・「なりきり考古学者体験 平板測量スペシャル」8月 11日（小学 4~6年生）10人、9月 1日（中学生以上）10人。 ・8月 12日付毎日新聞に高校所蔵考古資料の意義や活用の可能性について寄稿。			



平板測量の道具の展示状況

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は、26年度、28年度に続く3回目の開催のため、都道府県・市町村教委、博物館等に十分周知されているとともに過去展の図録等で成果を示すことができる状況にあった。そのため、関係者から理解、協力を得やすく、露出展示や写真撮影、PR動画製作等、様々な試みを行うことができ、概ね好評であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究を通じて高等学校所蔵考古資料の実態・内容把握に加え、高等学校の現状や考え方を知ることができた。また、高等学校所蔵考古資料を含む学校所蔵資料の掘り起こしや展示による紹介を行っている他施設と情報交換を行い、互いの活動を支援することができた。 近年、高等学校所蔵考古資料あるいは高校生による考古学研究に注目が集まりつつある。この状況に本研究並びに本展も貢献できたと考える。本研究の成果を今後の当館の展示・教育普及活動の計画、展開に活かし、より一層博学連携を進めていく必要がある。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1411D オ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称	オ インドネシアの装飾古墳に関する調査研究 ((4)-(1)-1))	
【事業概要】 日本ではほとんど知られていないインドネシア・南スマトラの装飾古墳を対象に、考古学研究とデジタルアーカイブの構築を行い、当館で推進してきた日本の装飾古墳研究にも寄与する成果を挙げる。		
【担当部課】 学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】 前課長 河野一隆	
【主な成果】		
<ul style="list-style-type: none"> 31年度に写真測量調査を計画中であるインドネシア装飾古墳について、インドネシア考古学研究所(ARKENAS)と協議を重ねた結果、遺構の遺存状況が良好で、彩色文様も鮮明な南スマトラ・パガララムに所在するレンバク7号墳を調査対象として選定した。 実地調査を円滑に進めるため、レンバク7号墳の石室床面へ任意座標を設定し、測量精度について検証した。その結果、床面が奥壁に向かって傾斜するため、日本の古墳で行ったような平面を作る3点では精度が担保できず、任意座標を、最低限4~5点設定しないと十分な精度が得られないことが分かった。 必要機材の準備を進めるため、遮光素材と撮影条件の関連性について現地で実証実験を行った。その結果、入口全体を覆うように遮光を行わないと、入射光が乱反射してVRモデルリングに支障が生じることが分かった。 今までの撮影データ並びに今回現地を訪問して簡易測量した結果、取得したデータに基づいて、オルソ画像を作成した。その結果、必要な撮影回数と現地での調査に要する時間について見積もることができた。 簡易測量による任意座標に基づいて高さデータを割り振り、簡易的なVRモデルリングに成功した。 31年度実施予定のデジタルアーカイブ共同調査について協議し、時期や実施方法について具体的に詰めることができた。 叩打によって装飾された文様を持つ古墳を踏査し、当地に彩色以外の装飾古墳が展開していることが分かった。 		
  		
【備考】		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は31年度実施予定の本調査に向けて、現地機関との協議、予備調査、簡易的な画像処理を行い、課題を洗い出すことができた。これを踏まえ31年度に向け十分な準備作業を進めるための基礎情報が得られた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究を実施した。日本とインドネシアが共同で、埋葬施設の構造的特徴が日本と類似する装飾古墳のデジタルアーカイブ化を推進するため、最も良好な状態の装飾古墳を調査し、成果を共有することが本研究の目的である。30年度は、良好な成果を挙げるための現地の課題整理を行い、31年度の現地調査を成功に導くためのさまざまな準備を進めた。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1411Dカ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究					
プロジェクト名称	水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業 ((4)-①-1))					
【事業概要】						
本事業は、25年度から29年度まで当館が実施した文化庁委託事業「水中遺跡の保存活用に関する調査研究」の成果を踏まえ、新たに30年度から5年計画で実施される事業である。本事業は、国内外における水中遺跡の調査手法と技術の検証を行い、その結果とともに『発掘調査のてびき－水中遺跡調査編一』(仮称)を作成することを目的とする。当館では遺跡の探査技術、水中での位置確認方法、遺物の保存処理、遺跡の活用方法、遺跡の現地保存やモニタリングの手法などを検証する。また、共同研究を行っている奈良文化財研究所ではてびき作成に向けた作業部会を設立してその内容を吟味する。						
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 小泉恵英			
【主な成果】						
30年度の事業は、①『発掘調査のてびき－水中遺跡調査編一』(仮称)の作成、②国内の水中遺跡の保存と活用の手法に関する調査研究、③海外における水中遺跡保護に関する最新情報の収集、の3つの課題で構成される。						
課題①：主に奈良文化財研究所が担当し、作業部会の設立・運営、4回の作業部会会議を開催した。また、全国の自治体から参加者を募り、研究会（水中遺跡の保護の現状について発表、討論、ポスターセッション）を福岡県大野城市心のふるさと館で開催した。						
課題②：						
・「国指定史跡(鷹島海底遺跡)周辺の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討」—長崎県松浦市鷹島海底遺跡から出土した遺物や沈没船に関して、現在行われている手法と今後の研究・調査の進め方について、松浦市教育委員会ならびに同史跡の調査研究を行っている琉球大学池田栄史教授などと協議した。松浦市主催の水中考古学セミナーへ参加し学生や一般市民と遺跡の保護について意見交換を行い、また、協力者会議を鷹島で開催した。						
・「国内の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討」—北海道上ノ国町では、昇平丸（薩摩・島津斉彬による建造船・明治初期に座礁）の推定座礁地点でサイドスキャナーソナーおよび海底ビデオカメラによる探査手法を検証した。福岡県新宮町相島では、水中遺跡の発掘に参加し、海底での掘削の方法を確認した。鹿児島徳之島では、遺跡状況確認調査、鉄製遺物のモニタリング手法を検討し、協力者会議を開催した。						
課題③：						
・「スリランカ現地調査」—諸外国の水中遺跡保護体制と調査手法の事例収集のため、現地の水中遺跡調査担当者と協議した。また、調査現場における作業の視察と水中遺跡の現地確認調査を実施した。						
・「ユネスコ水中文化遺産マニュアルの翻訳」—諸外国のマニュアルの例としてユネスコが刊行した『水中文化遺産マニュアル』を翻訳し、てびきの内容（目次案など）に反映した。						
【備考】						
文化庁の取組：水中遺跡調査検討委員会（2回）、作業部会・協力者会議（4回）、研究会（1回）						
文化庁報告書：『水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業1』（奈良文化財研究所と共に著）						
取材：新聞（朝日新聞、西日本新聞、北海道新聞、他）、テレビ（NHK北海道、他）						



上ノ国町で実施した海底探査の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	①～③の課題について、予定通りに実施することができた。①てびきの全体像と目的、5年間のスケジュールを確認した。②鷹島海底遺跡の現状の確認、また、31年度以降の調査の指針を確認した。上ノ国町、新宮町、徳之島ではそれぞれの自治体の文化財担当官が水中遺跡の調査・保護に積極的に参加したことにより、遺跡調査方法の好事例として紹介できる調査となった。③南アジア地域において、水中遺跡調査の体制整備の例について日本でも学ぶべきことが多いことが分かった。また、てびき作成の土台となる内容を持つユネスコマニュアルを翻訳した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、5か年事業の初年度であり、これから事業計画の組み立て、てびきの主眼や構成を考える上で重要な1年となった。具体的な探査・調査手法の検証やてびきの内容についての考察は、31年度から実施する。個々の課題については高い評価をすることができる一方、実際に文化財担当者が使いやすいマニュアルの作成に向け、現場の担当者や有識者からの意見を吸い上げ、また、当事業により得られた知識や見解を広く伝えるために積極的な行動を起こす必要が感じられた。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1412A ア-1

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「京都 大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展に際し、出陳された作品の調査を実施して学術的な新知見を得るとともに、研究報告や研究論文の作成につなげ、広く共有する。この度の展覧会では、X線CT撮影ならびに新規の写真撮影を実施した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 浅見龍介
【主な成果】	<p>1) 次のとおり調査を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9月20日大報恩寺如意輪觀音菩薩坐像（X線CT撮影） ・9月25日大報恩寺聖觀音菩薩立像（X線CT撮影） ・9月26日大報恩寺十一面觀音菩薩立像（X線CT撮影） ・9月27日大報恩寺馬頭觀音菩薩立像（X線CT撮影） ・10月29日大報恩寺准胝觀音菩薩立像（X線CT撮影） ・11月27日・28日大報恩寺十大弟子立像等調査 ・12月5日・6日大報恩寺十大弟子立像等調査 ・12月11日・12日大報恩寺十大弟子立像（新規撮影） ・12月17日大報恩寺本堂厨子の調査 		
 <p>10月29日のX線CT撮影の様子</p>			
2) X線CT撮影においては、作品の構造や保存状態が詳細に知られるところとなった。写真撮影、厨子の調査等においては、対象像に関する新知見が得られた。			
3) 研究成果については、逐次、当館の研究誌上などで公表する予定である。			
【備考】			
調査回数 : 9回			
調査作品数 : 16件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国立文化財機構内の博物館施設すべてにX線CTスキャナーが設置され、その成果への注目があつまるなか、特別展で出陳された作品をできる限り、こうしたX線CT撮影を実施することは、文化財保存の観点からも、必須の事項となりつつある。このたび、京都・大報恩寺の六觀音菩薩立像のほぼすべてについて、X線CT撮影を実施した（千手觀音菩薩立像については、安全性の問題を考慮して、実施を見送った）。本像の構造については、修理時に報告がなされているが、写真等は残されておらず、再確認をすることが不可能だった。このたびのX線CT撮影により、詳細な新情報が得られたのは幸いであった。X線CT撮影は、今後、彫刻の調査研究の手法や知見を劇的に変えていく可能性が高い。当館が継続して、撮影および情報の公開を行うことによって、研究水準の向上、進展につとめたい。さらにデータの解析を進めることで、仏像作品における構造技法の特色について研究を進め、逐次その成果を展示や刊行物等によって紹介したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展という貴重な機会をとらえて、文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会の企画や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1412A A-2

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 10月2日から12月9日まで開催予定の東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画特別展「マルセル・デュシャンと日本美術」において、フィラデルフィア美術館が所蔵するマルセル・デュシャンの作品と日本美術と対比して、両者の持つ意味や価値観を浮き彫りにするため、作品調査を実施し、並びに効果的な展示手法を検討する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室 (兼文化財活用センター企画担当課長) 松嶋雅人
<p>【主な成果】</p> <p>(1)米国・フィラデルフィア美術館において、出品作品の交渉並びに作品の事前調査を行い、あわせて会場での展示方法などの参考のために、関連する作品の展示を行っているフィラデルフィア美術館の常設展示の調査を行った。本調査によって、デュシャンの生涯にわたる芸術活動を示す効果的な展示を行うことができた。</p> <p>(2)東京大学駒場博物館において、デュシャン作品のレプリカ（「花嫁は彼女の独身者たちによって裸にされて、さえも」）の出品交渉、並びに作品状況の事前調査を行ったことで、デュシャンの創作活動の一端をわかりやすく、効果的な展示を実施することができた。</p>  			
<p>フィラデルフィア美術館学芸員によるデュシャン作品の説明</p> <p>フィラデルフィア美術館の各部門スタッフと当館研究員との会場デザイン、環境保存状況の検討</p>			
【備考】			
<p>(1)作品の調査、並びに展示手法の検討：4月5、6日（フィラデルフィア美術館）1回</p> <p>(2)作品の調査、並びに展示手法の検討：7月24日（東京大学駒場博物館）1回</p>			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>1) 現代美術において世界的に注目されるマルセル・デュシャンの重要な作品の大半を所蔵するフィラデルフィア美術館のコレクションを当館において展示するため、詳細な作品調査を行い、展示手法を両館相互に幾度も検証を重ねたことで、多くの来館者にその意義をわかりやすく提示することができた。</p> <p>2) 本展は從来になかった日本美術と現代美術の組み合わせによって展開されるものとなり、目標値を超える8万人の来場者を迎えることとなった。この結果も踏まえ、当館並びに各種文化財の展示施設にとって新たな発想や着想を生むきっかけになると考えている。</p> <p>3) 本展の準備作業のなかで、フィラデルフィア美術館と出品交渉や交流を行うことによって、今後さらなる共同研究や特別展の企画立案に役立つと考える。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本展を開催する上で、当館並びにフィラデルフィア美術館の収蔵品の総合的な調査研究が行えたとともに、当館の収蔵品の歴史的意義などを総合的に示せたことで、歴史・伝統文化の理解促進に多いに資することができた。またさらに、作品調査や打ち合わせなどで行った検討を踏まえて、広報・展示・図録など本展にかかる様々な事業にその成果を反映することができた。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1412A A-3

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究					
プロジェクト名称	ア 特別企画「中国近代絵画の巨匠 齊白石」に関する調査研究 ((4)-①-2))					
【事業概要】						
日中平和友好条約締結40周年を記念し、齊白石（1864-1957）の人と芸術を広く紹介するための展覧会を、京都国立博物館及び北京画院と協力して実施する。中国で最も有名かつ人気のある近代画家でありながら、現在の日本であまり知られていない齊白石の魅力をわかりやすく説明し、文化面における日中の相互理解を深める。						
【担当部署】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	出版企画室研究員 植松瑞希			
【主な成果】						
(1) 展覧会の実施						
 <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会名：「日中平和友好条約締結40周年 特別企画 中国近代絵画の巨匠 齊白石」 ・会期：10月30日～12月25日 ・会場：東洋館8室 ・来館者数：62,405人 ・出陳作品件数：126件（全て北京画院所蔵） 						
(2) 図録の編集						
北京画院研究員、京都国立博物館研究員と協力し、出陳作品全件の図版を掲載する展覧会図録を編集した。						
<ul style="list-style-type: none"> ・論文3件（呂曉「木匠から巨匠へ」、吳孟晋「上見る鷹」、周蓉「齊白石と20世紀日本の美術界」） ・コラム2件（植松瑞希「草虫図の伝統と齊白石」「齊白石の目がとらえた水中の生き物たち」） 						
(3) 教育活動						
調査研究の結果得た知見を、ギャラリートークおよび当館ブログで説明した。						
<ul style="list-style-type: none"> ・ギャラリートーク <p>11月9日吳孟晋「齊白石作品鑑賞入門」 参加者：163人</p> <p>12月11日植松瑞希「齊白石の魅力」 参加者：170人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1089 ブログ <p>吳孟晋「世界に羽ばたく齊白石」</p> <p>植松瑞希「齊白石作品のたのしみかた」</p>						
【備考】						
北京画院は1957年に成立した美術アカデミーであり、初代名誉院長に齊白石を迎え、その優品を多く所蔵することでも知られている。						

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・中国有数の齊白石コレクションである北京画院の所蔵品を、「花木」「鳥獸」「山水」「昆虫」「魚蝦」「人物と神仏」「書と印」という幅広い主題にわたって借用し、日本で初めて公開した。 ・目標数2.5万人を超える多数の来館者を迎える、図録、ギャラリートーク等を通じて、中国の国民的画家である齊白石への理解を深めた。 ・当館は齊白石作品および関連する中国近代画家作品を所蔵しており、これらを使った31年度以降行われる東洋館8室の平常展への興味関心を高めることができた。

中期計画の実施状況の確認

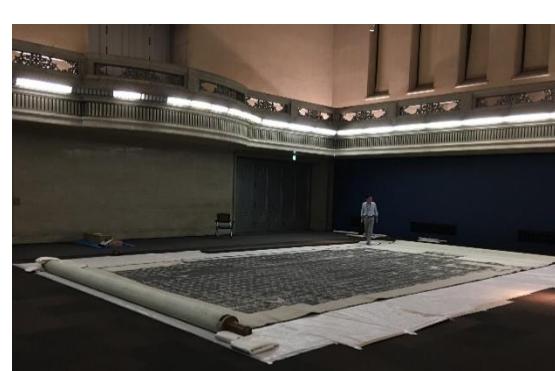
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・現代日本人になじみのない中国近代絵画を主題にしたが、その中の一人の画家の作品を集中的に展示することで、来館者に「齊白石」という名前を印象付けることができた。この画家を入口に中国近代絵画、また中国絵画全体への興味関心が高まることが期待できる。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1412A ア-4

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「顏真卿 王羲之を超えた名筆」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】	本展は、書の普遍的な美しさを法則化した唐時代に焦点をあて、顏真卿の人物や書の本質に迫るとともに、後世や日本に与えた影響にも目を向け、唐時代の書の果たした役割を検証する。		
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	部長 富田淳
【主な成果】			
(1) 調査概要	特別展に出陳予定の作品を調査した。調査機関は下記のとおり。 大阪市立美術館・観峰館・漢字ミュージアム・個人所蔵作品(奈良)・個人所蔵作品(香川)。 また当館所蔵の大型掛軸の事前調査を行った。		
(2) 調査の結果得られた知見	<ul style="list-style-type: none"> 出陳作品の状態や、安全な梱包のための有益な情報が得られ、展覧会の構成や解説、安全な輸送のための準備に取り組むことができた。 大型掛軸については、状態を確認し、X線調査を行った結果、応急修理を施し、安全かつ効果的な陳列を検討することができた。 		
			
	大型掛軸の調査風景 1	大型掛軸の調査風景 2	
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> 調査回数：のべ8回。 プロジェクトメンバー 六人部克典(学芸研究部列品管理課登録室研究員)、鍋島稻子(当館客員研究員) 		

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	事前調査を行うことにより、展覧会のテーマにそった作品選定が可能になっただけでなく、出陳予定作品の状態を把握し、内部構造をX線で調査することによって、安全な輸送と展示を検討することができた。また、調査による知見を会場構成や図録の解説に反映させることができた。一部の作品については新たに撮影を行い、図録に未公開の画像を掲載することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画にそって調査や出陳交渉を進めることによって、日本初来日の作品や所在が不明であった作品などを選ぶことができたことは、斯界の調査研究および今後の研究に大きく寄与しうると考えられる。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1412A ア-5

業務実績書

中期計画の項目		(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称		ア 特別展「国宝 東寺-空海と仏像曼荼羅」に関する調査研究 ((4)-①-2))	
【事業概要】 真言宗総本山 東寺が所蔵する文化財を紹介する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 丸山士郎
【主な成果】 会期 31年3月26日～6月2日（62日間） 会場 平成館 主催 東京国立博物館、真言宗総本山教王護国寺（東寺）、読売新聞社、NHK、NHKプロモーション 特別協賛 大和証券グループ 協賛 NISSHA 入場料金 一般 1600円（1400円／1300円）、大学生 1200円（1000円／900円）、高校生 900円（700円／600円） 中学生以下無料、（ ）内は前売り／20名以上の団体料金 真言宗総本山東寺は、平安遷都とともに創建された寺院で、弘仁十四年（823年）に空海に預けて真言密教寺院となった。真言宗は造形物を重視することから優れた作品が多く残る。本展覧会は、空海が造営を指導した講堂21体の中から15体の仏像（国宝）を出品するのをはじめ、空海請來の密教法具（国宝）、御請來目録（国宝）、両界曼荼羅（西院曼荼羅）（国宝）など、東寺の主だった文化財を紹介する。			
【備考】調査回数：東寺所蔵作品については全て事前の調査を実施した。 論文：総論1、各論4、コラム7、作品解説110件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東寺所蔵の全ての出品作品について事前の調査を実施し、その成果を図録や会場の解説に活かすことができた。 一部の重要な絵画作品についてスキャンを行い高精細な画像を作成し、彫刻作品についてはCT撮影を実施した。得られたデータは今後の研究に活かすことができる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	真言密教の根本道場である東寺が所蔵する国宝、重要文化財をはじめとする密教美術の名品を広く紹介することができた。また、東寺所蔵の全作品について事前に調査を行い、図録原稿や会場解説にその成果を生かすことができた。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1412Aア-6

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「三国志」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】31年夏開催予定の三国志展にむけて、後漢時代から三国時代の文物を中心に調査研究をすすめる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東洋室主任研究員 市元墨
<p>【主な成果】 6月27日から6月30日にかけて河南省文物局を訪問し、曹操高陵出土人骨に関する情報を得た。8月1日から8月3日にかけて北京を訪問し、市内最古の関帝廟を調査し、近代中国における関羽信仰について知見を得た。また、地質博物館にて漢時代玉石器の材質に関する情報を収集した。12月1日の月例講演会において、曹操高陵出土画像石に関する研究成果を報告した。12月17日から21日にかけて河南省と江蘇省を訪問した。曹操高陵出土品のうち、白磁とされていたものを詳細に観察し、この従来の見解を追認した。江蘇省南京市では上坊1号墓の墓室規模が安徽省天子墳を超える最大規模となることを確認した。曹操高陵の白磁については31年2月20日にテレビ、新聞で報道され、また特別展「三国志」報道発表会でも報告し、大きな反響を得た。31年3月末に、三国時代に関する論文を2本発表した。 </p>  <p>河南省文物考古研究院にて 曹操陵出土品を調査(12月19日)</p>			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	後漢から三国時代にかけての考古資料は、年代根拠があいまいな資料が多く、これを実地調査において明らかにしていく必要がある。30年度は、河南省の曹操高陵出土品や南京の吳墓出土品など、比較的年代を絞り込める資料の調査を実施できることで、相応の成果を上げることができた。それらの成果の一部は、講演会や論文の形で年度内に公開した。また曹操高陵出土の白磁については31年2月20日にテレビ、新聞で報道され、同日の特別展「三国志」報道発表会でも報告し、大きな反響を得た。しかしながら、本来であれば、より幅広い地域の調査を継続的に実施することが求められる。なんとなれば三国志は、広大な中国全域にわたる課題であるからである。それについては他の業務との兼ね合い及び時間的費用的制約からおのずと限界がともなうであろうが、31年度はさらに研究を深化させるべく、業務の効率化等をはかっていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	31年度は東京国立博物館および九州国立博物館において特別展「三国志」を開催し、これにあわせて、展覧会図録や講演会などで研究成果を広く公開する予定である。30年度は、この31年度の成果公開に向けた事前の調査研究を主としたことから、成果公開の側面はなお限定的であった。そうしたなかで、曹操高陵出土の白磁について学術的な見解を披瀝できたことは大きな成果であった。31年度は調査研究を継続させるとともに、成果公開についても一層努力していきたい。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1412B A-1

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「京のかたな 匠のわざと雅のこころ」に関する調査研究((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「京のかたな 匠のわざと雅のこころ」(9月29日～11月25日)の開催のため、各地に所在する山城鍛冶関連作品・資料の調査を行った。併せて、展覧会への出品交渉を進め、図録等印刷物に掲載するための写真撮影も行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室主任研究員 末兼俊彦
【主な成果】			
<p>(1)他機関の研究者等の協力も得ながら所在情報を収集したうえで、約300件の作品・資料の調査を行い、基本的な情報をまとめた調書を作成した。調査の過程で、従来未紹介の作品、近年の所在が不明であった作品、研究上重要な意義を有する資料等を見出すことができた。</p> <p>(2)数値データ等の記録に加え、作品の細部や付属資料も含めた詳細な写真撮影を進め、作品間の様式比較や伝来等周辺情報の収集を可能とする画像データの蓄積を行った。</p> <p>(3)作品調査と並行して出品リストの絞り込みを行い、展覧会への出品交渉をスムーズに進めることができた。</p> <p>(4)既刊の研究書・論文、同時代史料等を幅広く参照し、作家・作品に関する知見を深めることができた。</p> <p>(5)写真撮影については、可能な限り先行集荷のうえ館内で撮影を行い、経費節減とともに質の高い写真の確保に努めた。</p> <p>(6)祇園祭長刀鉾の大長刀など、抜群の知名度を誇りながらこれまで一切の開示がなされていなかった作品を調査し、初の一般公開を実現させた。</p>			
 長刀鉾の大長刀 (長刀鉾保存会所蔵)			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・調査件数 約300件 ・出品作品件数 200件 			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	<p>京都で製作された刀剣を通史的に時代・作者・工房・流派ごとに揃えることにより、作家性の問題や技術系譜、時代背景のもたらす変化などを日本の歴史とリンクさせ、大局的な視点で分析を行った初の試みとなった。山城鍛冶の作品は、鎌倉時代以降最も格式ある刀剣として公家・武家を問わず珍重された存在でありながら、山城鍛冶を主テーマとした大規模展覧会は一度も開催されてこなかった。その意味で、京都文化の発信を活動の柱に据える当館にとって、山城鍛冶の作品主軸とした特別展の開催は使命といってよく、一般社会および学会の要請にも応えるものであった。</p> <p>そのような一地域の作品群を通史的に総括する展覧会を開催するにあたっては、代表作を網羅するのみならず、各工人・作家の多様性を示す作品や資料として重要な作品を視野に入れた調査研究を進める必要があった。この点において、新出作品や行方不明文化財を含む質の高い作品の調査研究を行ったことは、初期目標を超える成果であった。特に、宗教行事に用いられる秘蔵の作品を初めて一般に公開できた意義は大きく、展示・図録にはこうした調査研究の成果が反映されたものとなり、今後の研究に資する基礎資料として高い完成度を達成することができた。</p> <p>また、特別展に出品されたいいくつかの作品については新規寄託品として受け入れており、年度計画に叶う成果が得られた。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	<p>中期計画に沿って、文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。</p> <p>文化財保護法に基づいた重要な役割のひとつである、国立博物館に収蔵・寄託されている国宝・重要文化財をはじめとする作品をあまねく広く公開するという点で、各館の収蔵・寄託品を数多く展示できたことは大きな成果といえる。また、調査研究の成果を基に京文化と日本刀という一貫したテーマを設けた展覧会であったことや、27年度からの計画的に準備をしての開催により、質の高い展覧会を行うことができた。展覧会計画当初には起きていた刀剣ブームの時流に合わせ、従来の刀剣愛好家のみならず、これまで積極的な来館に踏み切れていた若年女性層を中心とした新たな観覧者を獲得できたのは、この基礎的な展覧会の骨子が計画通り完成されていたためである。</p> <p>これまでの研究成果はもちろんであるが、調査成果や文化財修復、蛍光X線等の最新機器を活かした研究成果を積極的に公開できたことは、展覧事業のみでなく、各事業の成果を広く公開することにつながったといえる。</p>

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1412B A-2

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「時宗二祖上人七百年御遠忌記念 国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」に関する調査研究((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「時宗二祖上人七百年御遠忌記念 国宝 一遍聖絵と時宗の名宝」(31年4月13日～6月9日)のため、神奈川及び京都、滋賀を中心とする時宗寺院の所蔵文化財について調査・撮影を行い、併せて出品交渉も行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 淺漱毅
【主な成果】 (1)時宗、時宗総本山清淨光寺(遊行寺)の協力のもと、清淨光寺及び京都・滋賀の時宗寺院25箇所において、所蔵文化財の調査及び出品交渉を行った。さらには滋賀・浄信寺において悉皆調査を行い、地元教育委員会の報告書にも収められていない作品を発見した。また、京都・聞名寺においては行快作の阿弥陀三尊像を発見し、京都・極楽寺の毘沙門天立像の像内からは大量の納入品を発見するなど、重要な成果をあげ、12月17日の展覧会の記者発表時に併せて公表した。 (2)数値データ等の記録に加え、作品の細部や付属資料も含めた詳細な写真撮影を進め、作品間の様式比較や伝来等周辺情報の収集を可能とする画像データの蓄積を行った。 (3)作品調査と並行して出品リストの絞り込みを行い、展覧会への出品交渉をスムーズに進めることができた。 (4)既刊の研究書・論文、同時代史料等を幅広く参照し、各寺院の歴史及び所蔵作品の製作年代判定などに関して広く見聞を得ることができた。 (5)写真撮影については、可能な限り先行集荷のうえ館内で撮影を行い、経費節減とともに質の高い写真の確保に努めた。			
【備考】	(1)調査寺院 神奈川1箇寺、京都13箇寺、滋賀12箇寺 新発見の報道 12月18日朝刊(朝日新聞、産経新聞、日経新聞、毎日新聞、読売新聞、京都新聞) (3)出品予定件数 132件		



浄信寺調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	一遍によって鎌倉時代後期はじめられた時宗は、鎌倉期はじめた新佛教の中では後発にあたるが、踊り念仮や賦算などを通じて市中の人々に積極的に布教を行い、いちはやく信仰を集めた。京都は鎌倉(及びその周辺)とともに時宗の道場(寺院)が数多くつくられ、その信仰の一大拠点であったが、残念なことにこれまで京都における時宗の総合的な大規模展は行われてこなかった。そのような状況のなかで開催される本展は、時宗文化の素晴らしさをあらためて人々に知っていただくまたとない機会となる。30年度は本展に向けた文化財の事前調査を行い、仏教美術史の上からも重要となる新発見があった。その成果の一部は記者発表を通じて公表し、新聞等による報道など大きな反響もあり、所期の目標を上回る成果を得ることができた。なお、本研究成果の全貌は31年度の本展及び本展図録において公表することとなっている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究として、京都文化を中心とした文化財の収集・調査研究・展示・教育普及を実施した。そのなかで仏教美術の分野においては、京都を中心とした古社寺に関する調査研究を進め、情報を蓄積していくことが必要である。この点で、時宗という京都に大変縁の深い宗派の文化財について、質・量ともに充実した調査研究を進めることができたことは、今後の京都文化に関する調査研究、さらには中世以降の寺院研究に大きく寄与するものであり、極めて高い成果をあげることができたといえる。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1412C A-1

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 修理完成記念特別展「糸のみほとけ—国宝 緞織當麻曼荼羅と繡仏—」に関する調査 ((4)-(①-2))		
【事業概要】 織物や刺繡による仏像を調査し、調査の成果、新規撮影写真を上記特別展に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 内藤栄
【主な成果】 国内13か所、54件の作品を調査した。それによって、新出の作品の発掘が実現した。また、当館写真技師による新撮を行い、糸目が分かるような詳細なデジタルデータを蓄積した。この成果は展覧会会場に掲出された写真パネルやデジタルコンテンツ等に活用されたほか、展覧会図録に掲載した。また、併せて刺繡作家による技法説明用の複製製作、織物会社による緞織の複製製作を行い展覧会に出陳したほか、映像にして会場で放映した。技法が重要な展覧会であるだけに極めて意義深いものとなった。また、織物や刺繡作品を魅力的に展示する方法を研究し、ケースの手前側に作品を設置する方法を考案し、それに適した照明方法を考案した。			
 国宝・刺繡釈迦如來說法図（当館蔵）の染料に関する光学調査			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 織物や刺繡による仏像の特別展はほぼ半世紀ぶりであるため、新出資料の紹介、過去の研究の見直し、新規の写真撮影などが必要であったが、それを順調に実施した。 この分野の研究は、仏像や仏画に比較すれば遅れており、体系的な研究も進んでいなかったが、本展では仏像や仏画と比肩しうる価値のある分野であることを強調できた。 地道な研究を踏まえた特別展であり、仏教美術の専門館を標榜する当館ならではの独創性、専門性を発揮したが、一方で予備知識のない観覧者も楽しめる工夫をこらし、夏休み企画にふさわしい内容となつた。 国宝・緞織當麻曼荼羅（當麻寺所蔵）、国宝・刺繡釈迦如來說法図（当館蔵）の修理完成記念の展覧会であることも功を奏し、主要作品を網羅した、織物と刺繡の仏像に関する決定版と言える特別展となつた。 調査に際して最新の染料調査（可視分光分析）を実施し、新たなデータを学会に提示することができた。 展覧会図録に発表した繡仏・緞織の仏像に関する総論は、現在における当該分野の研究の到達点というべきもので、今後の研究の手引きとなる性格のものとなつた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> 博物館の重要な活動である保存修理の重要性を広く示すことができた。その意味で、保存と活用という文化財行政のありかたを問う企画であった。 博物館の任務である調査・研究を展示に反映し、一般には知られることの少ない織物や刺繡の仏像の世界を示すことができた。 分かりやすい展覧会をめざし、刺繡技法や緞織技法の分かりやすい解説と実演を行い、デジタルコンテンツによる細部鑑賞なども行った。 見やすい展示を心がけ、ガラスケースの手前側に作品を設置し、観覧者が間近に作品を鑑賞できる工夫を行い、公表を博した。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1412C A-2

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究			
プロジェクト名称	ア 特別展「第70回 正倉院展」に関する調査研究 ((4)-(1)-2))			
【事業概要】 特別展「第70回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に出陳される宝物を含む宝物全般についての調査・研究、展示環境についての研究、観覧環境についての調査・研究、その他宝物の適切な輸送方法など、多角的に研究を行う。				
【担当部課】 学芸部	【プロジェクト責任者】 工芸考古室長 清水健			
【主な成果】				
(1) 宝物についての調査・研究 ・展覧会の開催に当たり、宮内庁正倉院事務所の協力を得て、一部の宝物の閲覧、宝物調書の閲覧、宝物の詳細な写真の提供等によって最新かつ正確な情報の入手に努め、展覧会図録や会場の題箋、パネル等に反映させた。 ・正倉院、あるいは正倉院宝物についての研究成果を、展覧会図録所収の作品解説、小論文(「宝物寸描」)、公開講座、及び学術シンポジウム等を通じて公表した。また雑誌や新聞紙面等を通じて、研究員の日頃の研究成果を反映した最新の知見等をコメントやコラムのかたちで発信した。 ・研究員全員が参加する宝物についての研究会を実施した。				
(2) 観覧環境についての調査・研究 ・観覧者の多数集まる展覧会における適切な情報提供について考究するため、題箋やパネルの大きさ、位置等について検討し、アンケート等を通じて観覧者の発する意見や情報を収集した。題箋の内容・表記についての多言語化の観点も踏まえ、検討会を実施した。 ・宝物の照明方法について外部専門家と意見を交換し、効果的な照明を会場にて試みた。また、有識者の意見、あるいはアンケート等を通じて観覧者の発する意見や情報を収集した。 ・観覧者の多数集まる展覧会における適切な動線について考究するため、展示品やパネル等の配置、展示品への誘導方法、展示品の高さについて検討し、有識者の意見、あるいはアンケート等を通じて観覧者の発する意見や情報を収集した。 ・宝物の安全かつ魅力的な展示についての検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに実施した。				
(3) 展示環境についての調査・研究 ・宝物の適切な展示環境を考究するため、展覧会の会期中の温湿度データ、塵埃のデータを収集し、分析した。 ・宝物の展示環境についての検討会を、展覧会の会期前に宮内庁正倉院事務所とともに実施し、また会期後には実際の計測データを検証し、31年度以降の展覧会における展示環境の向上に資するための検討会を正倉院事務所とともに実施した。				
(4) その他 ・宝物の安全な梱包・輸送のための検討会を内部で行い、宮内庁正倉院事務所とも検討会を行った。				
【備考】 ・宝物に関する事前調査 7回 ・宝物についての内部研究会 2回 ・公開講座 3回 吉澤悟「正倉院三彩10話—正倉院に伝わる二彩・三彩陶器の特徴と謎—」(11月10日)ほか ・正倉院学術シンポジウム2018「正倉院宝物と新羅」 1回 ・『平成30年 正倉院展目録』(日・英) 奈良国立博物館 10月27日 日本語篇所収／宮崎幹子「正倉院宝物と壬申検査—写真と模写をめぐって—」ほか				



図録表紙

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	正倉院展の開催を円滑かつ安全に遂行し、最新の成果を広く国民に周知するという事業計画に基づき、概ね順調に成果を上げている。最新の知見を反映した作品解説を、学芸部全体での検討を経て展覧会図録に掲載し、一部は題箋・パネル等でも掲示した。また、小論文や講座、シンポジウムを通じて、最新の研究成果を公表した。さらに、27年度より実施している宮内庁正倉院事務所との諸々の検討会は深化を遂げ、一層充実してきている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当該中期については、主に宝物についての調査・研究、観覧環境についての調査・研究を重点項目とし、充実を図っていきたいと考えている。宝物に関する調査・研究は、日々更新される成果を踏まえて着実に進展しており、多くの画像やメディアを活用して、最新の成果を広く一般に伝えることが概ね達成されている。また宝物の観覧環境等に関する調査・研究も進展しており、観覧者の不満は以前に比べ相当低減している。今後は一層のデータ・情報の収集に努めるとともに、質の高い学術情報の普及を図りたい。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1412C A-3

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」に関する調査研究 ((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」展覧会開催のための、藤田美術館所蔵コレクションの調査・研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	情報サービス室長 岩井共二
【主な成果】 (1) 藤田美術館所蔵品調査を6月～31年3月にかけて行った。 彫刻25件、絵画86件、工芸45件、書跡34件、考古4件 (2) 調査によって、所在不明とされていたマニ（マニ教の教祖）像、未紹介の觀音三十三身像、仏本行集経（五月一日経）などの存在が新たに確認された。空也上人立像は、奈良伝来という来歴が明らかになった。作品によっては、近赤外線撮影やX線CTスキャンを行った。曜変天目茶碗については、8K高精細動画撮影を行った。			
<p>(3) 展覧会出陳品128件の確定 展覧会出陳のための保存状態を確認し、うち3件については事前に応急修理を行った。また、出陳品は全て当館カメラマンが撮影を行った。これにより、当館の資料写真を蓄積することが出来た。</p>  <p style="text-align: right;">曜変天目茶碗 8K 映像撮影風景 2019/03/01 10:20</p>			
【備考】 			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	31年4月に開催の特別展「国宝の殿堂 藤田美術館展」に際し、展示品の候補となる作品、及び関連作品等の調査・研究を精力的に進め、展覧会の充実や高度な学術情報の発信を図るという事業概要に従い、概ね目的を達成している。奈良にゆかりのある文化財や、未紹介文化財について、新たな知見を得ることが出来た。さらに、新規の写真撮影を行い、高精細デジタル画像の集積を行い、今後の研究に資する資料を蓄積した。

中期計画の実施状況の確認

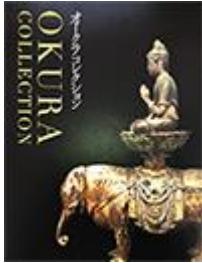
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	31年4月開催の特別展の充実という目的に向け、一定の成果を上げることができた。藤田美術館の所蔵品について、過去に当館が調査してきた成果を踏まえ、さらに一層充実させるような展覧内容に向け、前進することができた。藤田美術館所蔵品の写真等の関係資料を比較・検討することによって、単体の調査のみでは把握できない専門性の高い学術情報の収集に努め、当館の学術資源の一層の充実を図った。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1412D A-1

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展 「明治 150 年記念 オークラコレクション」に関する調査研究 ((4) -①-2))		
【事業概要】 特別展「オークラコレクション」に関する調査研究。 現存では日本最古（1917年設立）の私立美術館で、2019年秋リニューアル・オープンを目指し休館中の大倉集古館のすぐれたコレクションを紹介する特別展として企画。10月2日～12月9日に開催のため、その準備として調査研究を進めた。同コレクションを通じ、大倉喜八郎が行った文化財保護の志、喜七郎による海外への日本文化発信といった歴史的意義を紹介するとともに、アジア諸国との多様なコレクションに光を当てることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室主任研究員 山下善也
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> 大倉集古館に関する図書・図録・文献等の情報収集を随時行った。 大倉集古館学芸課員諸氏と面談し、大倉コレクションの概要についての情報収集を行った。 展示構成、展示リスト、輸送計画等について具体化、調査研究の内容に基づき3章構成の展覧会として結実させた。 256ページにおよぶ展覧会図録『オークラコレクション』（当館研究員等による作品解説、大倉喜八郎・大倉喜七郎紹介、大倉集古館の歴史と概要、論文4編収録）を作成し、販売した。論文は次のとおり。 <p>高橋裕次（大倉集古館学芸部長）「大倉コレクションの概要」 山下善也（学芸部文化財課資料管理室主任研究員）「大倉集古館の近世日本絵画」 小泉恵英（学芸部長）「大倉集古館の東洋美術と明治という時代」 田中知佐子（大倉集古館主任学芸員）「大倉喜七郎のパトロネージと羅馬開催日本美術展覧会」 <ul style="list-style-type: none"> 当館研究員による記念講演会を2回実施した。 <p>「大倉集古館の近世絵画-狩野派、琳派など魅力の作品群をめぐって-」（10月8日） 山下善也（学芸部文化財課資料管理室主任研究員） 参加者：112人 <p>「大倉集古館 - 日本最初の美術館はなぜできた? -」（10月13日）小泉恵英（学芸部長） 参加者：79人</p> </p></p>			
			
展覧会図録 『オークラコレクション』		記念講演会「大倉集古館の近世絵画-狩野派、琳派など魅力の作品群をめぐって-」	
			
		記念講演会「大倉集古館 - 日本最初の美術館はなぜできた? -」	
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> 大倉集古館学芸職員との打合せ（4月6日、4月27日） 寄託先の東京国立博物館にて作品調査（5月10日、5月11日） 			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大倉集古館が東京オリンピック2020に合わせた改修工事・閉館中であるからこそ、主要作品（国宝・重文・重美）のほとんどを借用できる絶好の機会であった。作品のリストアップにあたって、個々の作品の実地調査、文献等の確認等は、不可欠の作業であったが、作業を概ね実施することができ、過不足の無いリストを作ることができた。大倉集古館の展示施設の規模では主要作を一堂に展示することは困難だが、当館の広い特別展室ではその強みを活かした一堂展示により、実物鑑賞の機会を作った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき本調査研究を行った。1. 日本美術への眼差し 2. アジアへの眼差し、3. 世界（西欧）への発信という「3章構成」は、展示作品の地理的エリアの拡大を視点に置き、ストーリー化したものであった。さらに30年は明治150年の年であり、大倉喜八郎・喜七郎親子による収集の歴史と重なっている。その点に注目し、彼らによる文化財保護の志、海外への日本文化発信といった歴史的意義を紹介することができた点で、展覧会を実施した今日的な意義は大きかった。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1412D A-2

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究	
プロジェクト名称	ア 特別展「新安沈船展（仮）」に関する調査研究 ((4) -①-2))	
【事業概要】	2024年に開催を予定している特別展「新安沈船展（仮）」にかかる展覧会の準備にかかる調査研究	
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】 課長 白井克也
【主な成果】	<p>31年1月6日～1月10日に、特別展の主要な出品機関となる予定の韓国国立中央博物館及び関連する展示を行っている韓国国立海洋文化財研究所を当館職員5人が訪問した。韓国国立中央博物館においては、韓国における調査研究の現状と、韓国で2023年に開催予定の展覧会の企画進行状況を聞き取るとともに、今後の展示の方針について意見交換を行った。国立海洋文化財研究所においては、今後の特別展実施のための協力を取り付けるとともに、1973年の新安沈船の発見依頼、飛躍的に発達した、韓国における水中考古学の発展状況やその成果、水中文化財の保存処理に関する施設の状況、展示・普及の手法などについて調査を行った。</p> <p>今回の現地調査によって、韓国での2023年に開催される展覧会を、2024年ごろ九州国立博物館に巡回実施する基本方針について合意するとともに、日韓で共同して準備に当たるための協力態勢を構築した。</p>	
 現地調査風景		
【備考】	現地調査 1回	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度の調査により、日韓の協力態勢を確認することができた。また、展覧会の実施時期を、韓国では2023年（新安沈船が中国を出航してから700周年に当たる）、日本への巡回を2024年と、具体的な実施時期の目標を立てることができた。今後、定期的な相互交流を行って調査研究を進め、展覧会の具体的な内容について検討を進めることができる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	アジア的な視点で日本文化の形成を捉える九州国立博物館の設立趣旨からみても、中世東アジアの国際交流の実態を物語る新安沈船に関して、国際的な展覧会を開催することの意義は大きい。また、韓国において先進的な成果が挙げられている水中文化遺産保護について、日本で普及できるための知見を得たことも、文化財の保存と活用を図る上で、得るところが大きい。31年度以降も引き続き、定期的な相互交流による調査研究を行っていきたい。

【書式B】

施設名 文化財活用センター

処理番号 1413Hア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア レプリカやVR等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】	文化財に親しむ機会の拡大を図ることを目的として、レプリカやVR等の先端技術及び、文化財への活用事例についての調査を行い、それらの知見を活かした事業を企画・運営し、効果についての調査・研究を実施した。		
【担当部課】	本部文化財活用センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 小林牧
【主な成果】	(1)高精細画像によるレプリカ制作やデジタルコンテンツ制作に関して優れた技術を持つ、企業・機関等の視察・インター ビューを行った。 (2)レプリカやデジタル技術等を使ったコンテンツの公開を行っている国内外の博物館・美術館の視察・インタビューを行った。 (3)東京国立博物館本館においてレプリカやデジタル技術を活用した体験型展示企画を実施し、アンケートによる来場者調査を行った。 (4)キヤノン株式会社と連携して、高精細複製品の制作と活用についての共同研究プロジェクトを発足させた。 (5)凸版印刷、シャープなど、企業等と連携して高精細画像による文化財活用についての知見の交換を行った。		
【備考】	(1)調査先／凸版印刷「旅道」、大日本印刷本社、大塚オーミ陶業信楽工場、東京藝術大学COI拠点、NHKエンタープライズ、NHK放送技術研究所、ソニー、シャープなど（小林牧、松嶋雅人、小島有紀子、西木政統、高木結美、松沼穂積、樋口理央） (2)調査先／徳島・大塚国際美術館、鹿児島・霧島アートの森、パリ・アトリエドリュミエール、ミクロフォリ、ラヴィレット、貨幣博物館、自然史博物館、ルーブル美術館、科学博物館ほか、ロンドン・テートモダンミュージアム、大英博物館、V&A美術館ほか（小林牧、松嶋雅人、小島有紀子、西木政統、高木結美、松沼穂積、樋口理央） (3)アンケート調査実施事業／「なりきり日本美術館」（7月24日～9月9日）、高精細複製品によるあたらしい屏風体験「平家物語 一の谷・屋島合戦図屏風」（10月23日～12月2日）、高精細複製品によるあたらしい屏風体験「国宝 松林図屏風」（31年1月2日～2月3日）、8Kで文化財「国宝 聖徳太子絵伝」（11月27日～12月25日） ○そのほか発表等 「文化財保護法の改正と文化財活用のあり方について～東京国立博物館の試みを軸に」小林牧（6月30日 展示学会） 「ホンモノか、複製か—文化財活用をめぐる課題と実践」小林牧（31年3月5日 日本学術会議哲学委員会【哲学と文化環境分科会】公開シンポジウム）		
 <p>キヤノン株式会社との連携による高精細複製品の制作と活用についての共同研究プロジェクト 記者発表の様子 (10月29日)</p>			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財に親しむ機会の拡大を目的とした調査・研究を、4月の文化財活用センター準備室発足時から開始し、7月の文化財活用センター開設後も継続して行った。また、企業等、様々な技術をもつ機関との連携を積極的に行なった。これらの調査・研究によって得られた国内外の最新の事例及び最新技術に関する知見を活かして、多くの人々に文化財に親しむ機会を提供することができた。さらに、それらについてのアンケート調査も実施した。31年度は企業等との連携をさらに強化し、プロジェクトの推進を図るとともに、それらの事業についての評価調査を継続して行いたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施した。30年度は、文化財活用センター発足にあたり、先端事例の調査を重点的に行った。31年度も、技術革新ならびに変化し続ける社会の動向について常に最新の知見を得るべく、国内外の調査を継続して実施することが重要であろう。また、これらの知見を活かした企画の展開については、より対象者を広げるための方法について研究を進めるとともに、研究成果についての発表もより積極的に行いたい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1413Aア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館環境デザインに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	デザイン室長 矢野賀一
【主な成果】 <ul style="list-style-type: none"> ・「東京国立博物館・フィラデルフィア美術館交流企画特別展『マルセル・デュシャンと日本美術』」、「博物館に初もうで イノシシ 勢いのある年に」「縄文－日本における美の誕生」「親と子のギャラリー トーハク×びじゅチューン！ なりきり日本美術館」「松山・徳島の考古学」「世界文化遺産『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』登録記念 キリシタンの遺品」「博物館でアジアの旅」「日中平和友好条約締結周年記念 特別企画『中国近代絵画の巨匠 齋白石』」の展示デザインを行った。 ・券売機のインターフェイス、総合文化展チケットのデザインを行った。 ・甲冑作品を展示するための高透過低反射合せガラスや小型 LED 照明器具を用い、展示作業の安全性に配慮した展示ケースをデザインし観覧環境の向上につながった。 			
  			
【備考】 <ul style="list-style-type: none"> ・他館のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館でのデザインを調査し、特に30年度においては特別展及び総合文化展示の展示デザインのための参考とした。 ・調査先／フィラデルフィア美術館、サックラー美術館、メトロポリタン美術館、MOMA、ルーブル美術館、ギメ美術館、パリデジタルアートセンター、バイエルン州立エジプト美術収集館。 			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	目標を達成している。国内外の美術博物館デザインの最新事例を調査し、総合文化展示及び特別展への展開がなされている。31年度は引き続き国内外の美術博物館デザインの調査をおこなう。また最新の情報技術など本館の総合文化展示や展示室のスマート化などへ展開できるよう調査研究を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	目標を達成している。甲冑作品を展示するための高透過低反射合せガラスや小型LED照明器具を用い、展示作業の安全性に配慮した展示ケースをデザインし観覧環境の向上につながった。31年度は展示室のスマート化の調査研究及び本館リニューアルのデザインを進める予定である。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1413Aイ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館教育に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論と実践に関する調査研究を、教育普及事業の実践、参加者に対するアンケート、学校教員との研究会を通して行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	課長 伊藤信二
【主な成果】			
<p>(1)各種ワークショップ、スクールプログラム等を通して、来館者の多様なニーズに沿ったプログラムの開発とその運営に関する研究を行った。ワークショップ「トーハク劇場」では、29年に開発した、飛鳥時代を舞台とした法隆寺宝物館でのプログラムを30年度も2回実施し、低年齢層を対象としたプログラムの研究と実践を重ねるとともに、手応えを実感した。</p> <p>(2)海外からの来館者を主な対象とし、29年度より始めた日本文化体験プログラムを継続して実施した。書、きものをテーマとした気軽な体験型プログラムは、多くの外国人参加者をはじめとする多数の参加者を集め、好評を得ることが改めて確認された。(書体験 36日間 4,788人、浮世絵稽古演 2日間 102人)</p> <p>(3)障がい者に向けたプログラムの開発を目指した調査・研究を継続して行い、特に聴覚障がい者に向けて試験運用したUDトーク(音声認識ソフトによるコミュニケーション支援アプリ)を講演会、ギャラリートークにおいて本格実施した。</p> <p>(4)他館との連携事業として、上野動物園、国立科学博物館との国際博物館の日記念ツアーア「上野の山でサルめぐり」(5月13日)並びに関連展示、「親と子のギャラリー「サルのひろば」(4月17日~5月20日)を実施した。</p> <p>(5)小・中・高等学校の教員を対象とした研修会(7月27日)、東京都社会科教員を対象とした研修会(9月20日)を行い、意見交換を行った。</p> <p>(6)東京藝術大学との連携事業として、東京藝術大学の学生によるギャラリートークを行った。</p> <p>(7)ボランティア組織のマネジメント及びボランティアによる事業の開発等について調査・研究を行い、外国人対応をテーマとした研修を実施した。</p> <p>(8)ガイドアプリ「とーはくナビ」(日英対応)および音声ガイド(中韓対応)の利用状況調査を12月4日~14日の間で実施した。</p>			
【備考】調査			
<p>1)ワークショップ等における参加者アンケート調査12回、教員研修会参加者アンケート調査2回 ガイドアプリ「とーはくナビ」(日英対応)および音声ガイド利用状況調査1回</p> <p>2)全国博物館大会(11月28日~30日)分科会4「ミュージアム・コミュニケーション『多様な関わりを創る』市民との協働」(東京都美術館)で口頭発表を行った。(藤田千織 教育普及室長)</p> <p>3)韓国国立中央博物館の朴娟嬉(パク・ヨンヒ)氏(教育課学芸員)が学術交流で来日したことにより、同氏と博物館教育に関する協議と意見交換を実施した。また同氏を同行して国内の8施設を訪問。施設見学と担当者との協議を実施し、博物館教育事業の理念と現況に関する調査研究を行った。(伊藤信二 博物館教育課長、鈴木みどり ボランティア室長、藤田千織 教育普及室長、川岸瀬里 教育普及室研究員)</p> <p>4)国外施設調査:【米国】ニューヨーク近代美術館、イントレピッド海上航空宇宙博物館、アーツ・アンド・マイヌズ、ミュージアム・アクセス・コンソーシアム(藤田千織 教育普及室長)、【仏国】日本文化会館、Atelier des Lumières、Micro-Folie(川岸瀬里 教育普及室研究員)</p>			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	様々な教育事業の実践や、他館との交流・連携事業を通じて、博物館教育についての研究を実施した。30年度は特に外国人を主な対象としたもの、有料のプログラム、聴覚障がい者に向けてのUDトーク、ボランティアの外国人対応など、新たな対象や多様なニーズに対応するため開発した教育プログラムの実践・検証を行うことができた。31年度は、こうした方向を維持しながら、プログラムの更なる充実と博物館教育の発展に寄与する調査研究の推進を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期では、より幅広い来館者に向けた鑑賞支援プログラムの調査・研究と実践を目指している。未就学児を対象としたキッズデーなど、子どもを対象とした事業、障がい者を対象とした事業の調査・研究は、28年度から継続して行っている。30年度は、外国人を対象とした事業に対応したプログラムを29年度から検証的に継承し、手応えを得ることができた。ガイドアプリや音声ガイドのアンケートは同じく外国人観覧者のニーズを知る上で有意義であった。また、こうした取り組みは、2020年のオリンピック・パラリンピック後にも残るものとして位置付け、しっかりととした調査・研究のもと、実践につなげることが重要である。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1413A ウ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 凸版印刷と共同で実施するミュージアムシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタルアーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。			
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	課長 田良島哲
【主な成果】 ・既制作のコンテンツ「土偶」をもとに、当館品川室長の監修により、改編作品『DOGU 美のはじまり』を制作し、特別展『土偶』の開催に合わせて公開した。 ・日本刀の 3D データを素材としたコンテンツ開発を視野に入れて、当館所属の酒井主任研究員による監修のもとで、凸版印刷がスキーナによるデータ取得方法の調査研究を実施し、材質の表現や反射の特性を再現できる良質なデータを取得できる見込みを得た。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・既存データを使って展示等と連動したコンテンツを公開することができ、所蔵品のデジタルアーカイブ蓄積の有用性が再確認できた。 ・新しい分野である刀剣のデータ取得をめざす調査研究に着手し、良質なデジタルアーカイブとして保存活用できる方向性を見出しができた。31年度以降、この分野に関するコンテンツ制作の展望を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・デジタルアーカイブのデータ取得に関する調査研究については、新分野に着手し、着実な成果をあげている。 ・データの利活用については、新規コンテンツの制作はなかったが、既存のデータを有効に使い、集客力のあるコンテンツとして、毎年継続的に公開を行っている。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1413Aエ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	エ ICTを利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英2ヶ国語による鑑賞支援アプリ「トーハクなび」のユーザー動向解析を行い、より豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究を行った。また、児童生徒のための鑑賞支援アプリ「学校版 トーハクなび」のユーザー動向解析を行い、その活用・改善に関わる調査研究を行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	課長 伊藤信二
【主な成果】			
<p>(1)スマートフォンによる公式ガイドアプリ「トーハクなび」(日英2か国語対応)を継続して配信した。</p> <p>(2)29年1月より継続して、来館者サービスの一環として、「トーハクなび」をインストールした端末の貸し出しサービスを行い、その結果、アプリのアクセス数を大きく伸ばすことができた。</p> <p>(3)27年4月より継続して「トーハクなび」のユーザーログを集積・解析。来館者の鑑賞体験を深めるための情報の在り方と発信方法、的確なシステムについて、調査・研究を行い、報告書を作成した。</p> <p>(4)学校団体で来館する児童・生徒を対象としたスクールプログラムの一環として、タブレット端末によるアプリ「学校版トーハクなび」(中学生・高校生対象)の運用を継続した。児童生徒へのアンケート調査およびログの集積を行い、報告書を作成した。</p> <p>(5)ICTを利用した博物館ガイドについて、他館への情報提供や意見交換を行った。</p> <p>(6)共同研究プロジェクトとして、電通国際情報サービス(ISID)とクウジットの協力を得た。</p>			
 <p>鑑賞支援アプリ「トーハクなび」トップ画面 (英語版)</p>			
【備考】			
<p>1) 報告書「学校版トーハクなび」利用者の動向 4月、31年3月作成</p> <p>2) 電通国際情報サービス(ISID)とクウジットとの研究会を行った(1回)</p> <p>3) 他館との意見交換: 京都国立博物館、九州国立博物館、根津美術館、国立中央博物館(韓国)、北京故宮博物院(中国)など</p>			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>1) アプリ「トーハクなび」によるサービスを提供しつつ、ユーザーの動向についてのデータを集積することができた。</p> <p>2) 「学校版トーハクなび」でも、生徒たちの使用状況についてデータを集めることができた。</p> <p>3) これらの実績とデータをもとに、運営方法等の改善を試み、オリンピック・パラリンピックに向けた新しい鑑賞ガイドシステムの開発を目指して、具体的な検討を開始した。</p> <p>4) 現在の課題は、日英中韓による情報提供、ならびに展示替えに即した個別の作品解説の提供である。(当館は、展示作品数が膨大かつ頻繁に展示替えされるため、「トーハクなび」では本館、平成館考古展示室に限って個別作品解説を提供している)。</p> <p>5) 31年度は、これらの課題を克服すべく、新しいシステムの開発を目指したい。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>2020年に開催予定のオリンピック・パラリンピック開催にむけて、主に訪日外国人を対象とした鑑賞支援プログラムの充実を目指しているが、30年度は29年度から継続して現行のシステムのユーザー動向解析や他館のシステム等の情報収集を行い、それをもとに今後のシステムのあり方について検討することができた。31年度は、2020年度中の新鑑賞ガイドシステムの発進を目指して、そのコンテンツの開発と策定を目指す。</p> <p>また、学校団体での来館者に対しては、「学校版トーハクなび」の提供を継続して行いたい。</p>

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1413B ア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館教育及びボランティアに関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 本研究では、第一に、来館者サービスボランティア「京博ナビゲーター」の活動を実例に、対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究を行った。第二に、「文化財に親しむ授業」で講師を務める大学生及び大学院生のボランティア「文化財ソムリエ」の育成に関する実践と研究を行った。第三に、これまでの研究成果を活用し、子どもや海外からの来館者を対象とした教育的な特集展示を企画立案し、実施した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 永島明子
【主な成果】			
(1)京博ナビゲーターの活動 ・京博ナビゲーター202人の活動の指導及び監督。 ・ミュージアム・カート内の解説シートの多言語対応。 ・特別展「池大雅」関連ワークショップ「指で描こう！指墨画にチャレンジ」の企画・運営。 ・特別展「京のかたな」関連ワークショップ「まだかで見よう！はじめての刀」の企画・運営及び実施のための他館調査。(1回・徳川美術館) ・外部の調査員と共同で第1期京博ナビゲーター(29年度任期満了)に向けたアンケートの分析調査。 ・京博ナビゲーターの活動を含む教育普及活動についての視察の受け入れ及び意見交換。(4回・韓国文化財府景福宮管理所、韓国国立中央博物館、国立公文書館、ダン計画研究所)			
(2)文化財ソムリエ19人の育成 ・絵画担当研究員による教材に関する勉強会の企画・実施。作品に関する専門的な知識を伝えることで、授業案作成に関する引き出しを増やす効果があった。 ・岩絵の具や墨などの画材体験の企画・実施。訪問授業内でより具体的に画材の紹介を説明できる効果があった。 ・複製文化財の活用を希望する学校教員との交流会の企画・実施。 ・交流会に出席した教員による複製を活用した授業の実施。 ・「第34回京都市中学校総合文化祭」における高精細デジタル複製品を用いた「おしゃべり鑑賞会」の企画・実施。 ・他機関が実施している鑑賞教育の見学。(2回・醍醐中学校)。			
(3)研究成果を反映した特集展示「謎とき美術！はじめの一歩」(7月21日～9月2日)の企画・実施。 ・展示の理解の補助を目的とした4言語の謎ときシートの作成。 ・教育室研究員によるギャラリートーク及び関連土曜講座「願いを託された動物・植物—吉祥文様入門—」の実施。			
【備考】 本研究を踏まえた事業の実績については、処理番号1311B1、1311B2、1312Bも参照 (1)科学研究費助成事業「対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究」5年計画(研究代表者の育児休業のため1年延長)の3年目 (2)交流会参加の教員による複製文化財を活用した授業について、11月2日朝刊(京都新聞、日本経済新聞)に掲載			



訪問授業の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>京博ナビゲーターについては、来館者アンケートなどから、その活動が来館者の主体的な興味・関心を引き出し、博物館における効果的な教育普及活動として機能していることが確認できた。また、第1期京博ナビゲーターに向けたアンケートの分析調査を通して、論文執筆の下地作りを行った。</p> <p>文化財ソムリエ育成については、スクーリングなどを通じて多様なプログラムを立案・実践することにより、文化財ソムリエの主体的な参加を促し、多様で質の高い鑑賞授業を行った。教員との交流会及び複製を活用した授業は例年より参加者が多く、これらを通して学校教育と博物館教育双方のスキルを活かした複製文化財の活用方法について、より多角的に考察することができた。</p> <p>特集展示「謎とき美術！最初の一歩」については、29年度に実施した特集展示「京博すいぞくかん」に対する子どもの反応を踏まえて展示内容や解説に改良を加えた結果、小学校低学年の参加を可能にした。また、掲示物・配布物を全て4言語対応することで、海外からの来館者にも日本美術に親しむ入り口を提供することができた。</p> <p>海外を含めた外部機関から視察もあり、当館の教育普及活動が国内外の機関に周知・評価を得られていることが確認できた。今後もこれらの活動を継続して行い、それぞれの質の向上に努めたい。</p>

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究の中で、29年度に引き続き、中期計画を超える教育普及を目的とした特集展示を実施することができた。また、継続的に行っている京博ナビゲーターや文化財ソムリエに関する調査研究及びその活動も、年々質の向上が認められる。</p> <p>中期計画の4年目を迎える31年度は、これまでの成果をふまえ、それぞれの活動における問題点の解決に向けた調査研究を進めていきたい。</p>

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1413C ア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】	奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。		
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】	<p>(1)奈良市教育委員会との連携事業による世界遺産学習の一環として、奈良市在住の小学生の親子を対象とする新たな教育プログラム開発に向けて検討を重ね、仏像館見学や仏像クイズを通じて地域の文化遺産について学ぶ「親子で学ぼう 奈良の仏像」を7月25・26日に実施した。</p> <p>(2)奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げたESD(持続的開発のための教育)コンソーシアム文化遺産教育ワーキンググループにおいて、博物館施設を活用して地域社会への関心を高めるための方策について協議を重ねた。</p> <p>(3)同ワーキングで提言された展示と密接に関連するクラフト教材活用及びワークショップの実践として、特別展「糸のみほとけ」関連の親子ワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」を奈良教育大学との連携事業として開催し(7月29日)、小学生の親子が美しい色糸を用いた綴織の技法を実際に体験することで、繡仏や織成像など糸で作られた仏像をテーマとする展覧会への理解を深めることができた。</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> 「世界遺産学習」に来館した学校団体39校(奈良市世界遺産学習26校、その他13校) <p>※29年度実績：52校(奈良市世界遺産学習32校、その他20校)</p>		



親子ワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」実施風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館における教育普及プログラムの重要な柱である「世界遺産学習」については、奈良教育大学・奈良市教育委員会とともに立ち上げたESDワーキング等で内容を随時検証しながらその継続性と質の確保に努めるとともに、実施対象を全国から来館する小中高校生に拡大した結果、合計39の学校団体(奈良市26校/その他13校)を受け入れ、29年度並みの実績を達成した。さらに親子ワークショップ「織ってみよう！糸のみほとけ」や親子対象の教育プログラム「親子で学ぼう 奈良の仏像」を実施し、「世界遺産学習」の地域学習・家庭学習への浸透というESDワーキングが提唱する理念を実践することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏像を主なテーマとしながら奈良の歴史、伝統文化に関する教育普及事業として継続的に行ってきた「世界遺産学習」は、全国から来館する小中高校生に対象を拡大するなど、一定の成果を収めている。その内容の充実・向上に向けて継続的な検討を行っており、31年度から新たに導入するワークシートの利用についてESDワーキング等の場で協議を重ねた。今後も「世界遺産学習」を地域学習・家庭学習に普及させることを目的として、地元の教育機関と連携しながら博物館の展示内容に密着した小中学生の親子を対象とする教育プログラム、ワークショップの一層の充実を図っていきたい。また、「世界遺産学習」において生徒に対応するボランティアのための作品解説ガイドライン(テキスト)を作成し、31年度より使用する予定である。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1413D ア

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア NHKと共同で実施する高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究 ((4) -①-3))		
【事業概要】 当館では開館以来、世界で唯一の常設設備として8Kというスーパーハイビジョンシステムによる映像を公開してきた。4Kの4倍の密度を有する8Kが持つ臨場感あふれる優れた映像美を生かした、魅力的なコンテンツ作りを行う。多言語化などの新しいシステムの調査研究を推進する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 白井克也
【主な成果】 近い将来に追加する新しいコンテンツの作成に向けて、館内で協議を行った。九州国立博物館が大宰府政庁跡・太宰府天満宮と至近であるという地の利を考慮し、平常展（文化交流展）の3テーマエリア「遣唐使の時代」においての重要な位置を占める「大宰府」について、新たなコンテンツを製作することを決定した。関係作品を担当する研究員を中心による打合せを行い、作品の特性や今後の展示予定なども考慮し、コンテンツ製作の基礎となるシナリオ作成を行った。 毎年増加する外国人観覧者に対するサービス向上のため、昨年度中にコンテンツに対する英語・中国語・韓国語の翻訳原稿を作成、ナレーションの録音を行ったが、今年度に本格導入した。そのうえで、上映冒頭の注意事項に関して、中国語・韓国語によるナレーションの一部を再検討し、新規録音・視聴し、公開した。			
 <p>3テーマエリア展示室の様子</p>			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今後のコンテンツ制作にかかる方針を決定するとともに、多言語化措置の見直しを進め、サービスの充実に努めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	スーパーハイビジョンシアターでのコンテンツの提供は、文化財の普及にかかる先進的な手法のひとつとして重要である。今後もコンテンツのますますの充実を図りたい。

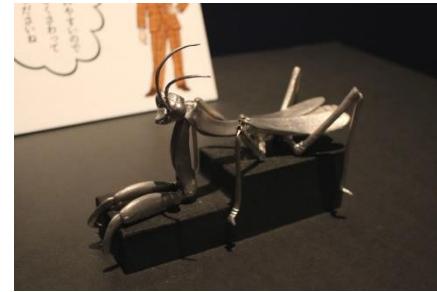
【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1413D イ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	イ 特別展のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究 ((4) -①-3))		
【事業概要】	特別展をより楽しくわかりやすくするための教育普及プログラムを実施する。30年度は「オークラコレクション」展、「京都・醍醐寺」展の2つの特別展において実施する。		
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 西島亜木子
【主な成果】	<p>過去の特別展のアンケート結果や、来館者調査に基づき、特別展の内容や来館者層に応じた効果的な教育普及プログラムを実施した。</p> <p>(1) 特別展「オークラコレクション」では、大倉集古館の魅力をわかりやすく伝えるため、展示作品を詳しく紹介するパネルと、大倉親子と大倉集古館にまつわる逸話を紹介するイラスト入りのパネルを会場内に8か所設置した。また、展示作品「自在蠍蟬置物」が実際にどのように動くかを体験してもらうため、「自在蠍蟬置物」のレプリカを制作し、体験コーナーに設置して来館者がさわれるようとした。</p> <p>来館者アンケートでの「大倉親子の解説パネルや自在置物蠍蟬をさわる体験コーナーはいかがでしたか」という設問に対して、回答があったもののうち93%は「とてもよかったです」又は「よかったです」と回答しており、大変好評を得た。具体的には「パネルがわかりやすくて良かった」「自在置物の蠍蟬に触れられたのが良かった」という意見が多く、満足度が非常に高かった。</p> <p>(2) 特別展「京都・醍醐寺」では、醍醐寺や一般にはあまりなじみがないと思われる真言密教について、イラストを交えて解説するパネルを展示室内に9か所設置した。内容は、「密教を日本に広めた空海について」「醍醐寺の始まりについて」「密教と顕教の違い」「醍醐の花見について」など、展示を見る際に必要な密教についての基礎知識に加え、展示されている作品をより深く掘り下げた内容など多岐に渡った。また、パネルの解説とあわせて、今回展示される密教法具の使い方を知ってもらうため、醍醐寺での朝の勤行の様子を撮影した動画を上映した。</p>		
【備考】			



「自在蠍蟬置物」のレプリカ

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	過去の特別展アンケートにより、イラストを交えたわかりやすいパネルは好評であるという結果が得られており、来館者からの期待も大きいことから、30年度も実施した。アンケートでもこれまでどおりの高評価を得ている。年齢や性別に関わらず、あらゆる層の方に満足していただいた。特に、特別展「オークラコレクション」での体験コーナー「自在蠍蟬置物をさわってみよう！」は、動く作品である自在置物にさわれるという九博オリジナルのプログラムである。実際の展示作品と同じパーツが動くよう制作したことから、作品の魅力を伝えることができたと同時に、展示理解促進につなげることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展の教育普及プログラムは29年度に引き続き、30年度のアンケートでも高評価を得ている。それぞれの特別展での来館者層や、来館者が期待する内容を想定してプログラムを実施することで、来館者のニーズに応えることができたといえる。それにより、中期計画における「教育普及事業に関する調査研究」のうち、特別展の教育普及については充分達成できたと考える。31年度以降も来館者の期待に応えるプログラムを調査研究していきたい。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1421Aア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館の環境保存に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 東京国立博物館による文化財の活用に伴い保全の必要性が生じる、保存環境、展示環境、輸送環境について調査研究し、今後の環境の向上に結び付けることを目的として実施する事業。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	課長（兼書跡・歴史室長） 富坂賢
【主な成果】	<p>(1) 展示環境に関する調査 当館が新規に作品を貸与する先の施設を中心に、展示環境の調査を行った。その際に協議した、環境改善や環境維持についての共通する課題や取り組み事例を情報共有することで、当館の環境保全についての有益な知見を得ることもできた。</p> <p>(2) 展示ケースの開発 立体物の陳列作業の安全性向上を目的とした、展示台一体型の展示ケースを開発した。</p> <p>(3) 海外輸送環境の調査 加速度データロガー、GPSデータロガー、タイムラプスカメラを併用し、これまで工程の詳細を把握することが困難であった海外輸送時の特に陸上輸送について輸送環境データ入手する手法を確立することができた。</p> <p>(4) 館内用輸送機関の開発 館内移動時に用いる台車上の輸送環境データを計測し、台車上で生じる振動や衝撃を効果的に緩衝する機能をもった台車を試作した。</p>		
【備考】	<ul style="list-style-type: none"> ・国内調査先：新ひだか町博物館、国立アイヌ民族博物館設立準備室、京都市考古資料館、長崎県歴史文化博物館 ・国外調査先：釜山市立博物館（韓）、パリ日本文化会館（仏）、プティパレ美術館（仏）、Glasbau Hahn 本社（独）、大英博物館（英）、クリーブランド美術館（米） ・論文による研究成果発表 和田浩 博物館における文化財の展示環境と保存技術 空気調和・衛生工学 92(5) 空気調和・衛生工学会（査読あり） 和田浩 東京国立博物館における虫菌害予防と光の演出効果、展示室内の環境保全について 第40回文化財の虫菌害・保存対策研修会テキスト 文化財虫菌害研究所（査読なし） 和田浩 東京国立博物館における展示ケース製作事例からみた展示環境保全の取組み 文化財の虫菌害 第76号（査読なし） 		



台車上の輸送環境計測

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特に展示環境と輸送環境の保全を目的とした調査研究を重点的に実施した。展示環境については全国的および国際的な技術水準についての情報を得る機会として貸与先の施設調査を積極的に活用した。また、展示環境には作品の陳列作業に関する安全性も重要な要素として存在する。開発した展示ケースはその点を最大限に考慮したものである。輸送環境に関しては海外輸送時の特に陸上輸送の環境解明について大きな成果を上げたと考えている。また、これまでほぼ未着手であった館内用輸送に対する調査研究についても開始することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の活用に伴い、展示環境および輸送環境との接触は必然的に生じる。それらの質的向上を目指した調査研究を継続することにより、社会的要求への対応と文化財の安全確保を両立できるものと考えられる。そのためには、国際的範囲で環境保全技術の最新情報および実例の収集と関係する研究者との協議を重ねる必要があり、その目的は十分に果たせている。また、館内輸送機関の開発に着手したことでの、展示の度に移動される文化財の蓄積疲労を減少させるための方法論を31年度以降に構築できる基盤が整った。輸送環境保全に関する研究は当館が持つ特色でもあり、当該研究分野を牽引すべく、今後も引き続き調査研究を重点的に継続したいと考える。

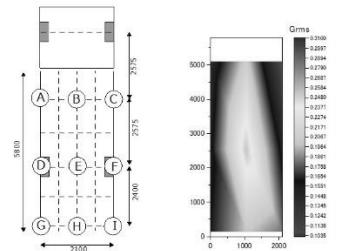
【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1421A イ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関する調査研究		
プロジェクト名称	イ 美術品・輸送機関・梱包資材の振動特性情報を集積した安全輸送のためのシステム構築 (4)-(2)-1)		
【事業概要】輸送機関、梱包資材、文化財が輸送中に発生する振動に対してどのような応答を示すのかを調査し、科学的根拠に基づく梱包設計を行うシステムを構築する。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	調査研究課環境保存室長 和田浩
【主な成果】			
(1) 論文による研究成果発表			
・和田浩 美術品輸送専用車両荷台上での振動に対する高速道路橋梁部伸縮継手の影響に関する研究 日本包装学会誌 27(4) 日本包装学会 8月 1日 (査読あり)			
・和田浩 RO/RO 船の乗下船時に美術品輸送専用車両の荷台上で発生する振動について 日本包装学会誌 27(4) 日本包装学会 8月 1日 (査読あり)			
・和田浩 他 文化財梱包の緩衝材に用いられるポリエチレンフォーム材の振動特性評価に関する研究 日本包装学会誌 27(5) 日本包装学会 10月 1日 (査読あり)			
・和田浩 実輸送データをフィードバックした文化財包装への取り組み 実務者のための力学的輸送包装設計ハンドブック (第 5 章第 3 節) テクノシステム 10月 23日 (査読なし)			
(2) 学会等による研究成果発表			
・和田浩 美術品輸送専用車両の荷台上で発生する振動レベルの分布 文化財保存修復学会 6月 17日			
・和田浩 文化財梱包・輸送の科学 第 11 回指定文化財 (美術工芸品) 企画・展示セミナー東日本会場 6月 25日			
・和田浩 RO-RO 船による文化財輸送における乗下船時の振動環境 日本文化財科学会 7月 8日			
・和田浩 美術品輸送専用車両を用いた文化財の低速走行輸送時の環境について 日本包装学会 7月 12日			
・和田浩 文化財梱包・輸送の科学 第 11 回指定文化財 (美術工芸品) 企画・展示セミナー西日本会場 9月 10日			
・Hiroshi Wada, Proposal of New Index for Transport History of Museum Objects, Symposium 'Managing Risks to Collections', Australian Institute for the Conservation of Cultural Material, Melbourne, 31年 2月 18日			
【備考】 学会等発表 : 6回 (内国際会議 1回)、論文 : 4本 (内査読あり 3本)			



美術品輸送専用車両の荷台上で発生する振動レベルの分布

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	陸上輸送における輸送環境への走行路面の影響、走行速度の影響を検証した。付随する成果として車両の個体差、荷台上的位置による差異も考慮すべき因子であることも判明した。また、これまでほぼ明らかにされなかつた船舶輸送時の環境データを解析し、その特徴を捉えることができた。文化財の梱包に緩衝材として多用されるポリエチレンフォーム材の振動応答特性の評価試験によってその特性を導き出すとともに、緩衝材の特性を評価する手法を一般化することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究を実施した。全体の研究計画は、輸送機関上で発生する振動、梱包資材の振動応答、文化財(素材、模造品など)の振動応答をそれぞれ調査し、最終的にこれらの情報を集積した科学的な梱包設計システムの基礎を構築するものである。30年度は輸送機関上で発生する振動、梱包資材の振動応答について十分な成果が得られた。31年度はこうした輸送環境内で文化財が受ける負荷が蓄積疲労としてその素材を消耗する現象について追究したいと考えている。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1421B ア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 修復文化財に関する資料収集及び調査研究		
【事業概要】文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行う			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 大原嘉豊 企画室研究員 井並林太郎
<p>【主な成果】</p> <p>【主な成果】</p> <p>(1)修復文化財情報の収集と調査</p> <ul style="list-style-type: none"> 30年度、文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、149件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。 当館研究員により9回行った修理工房の巡回のほか、修理技術者とともに実施した科学調査を含む調査を適宜実施し、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。 <p>(2)修復文化財情報の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> 29年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書）」に基づき、1,908件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。 <p>(3)模写作成のための文化財の調査</p> <ul style="list-style-type: none"> 当館と模写修理事業者（六法美術）による当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の復元模写（5か年計画）の2カ年目として、両者協議のうえ高精細画像を用いた上げ写しによって模写を進め、30年度は7月に原本の料紙の調査を行い、その成果をもとに料紙の作成・加工を進めた。 <p>(4)情報の公開と共有</p> <ul style="list-style-type: none"> 27年度に修理が完成した文化財133件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第16号（31年3月31日発行）に掲載した。 修理時の調査により発見された銘文33件を「銘文集成」として同書に報告した。 			
【備考】	<p>(1)データ収集件数 149件、巡回回数 9回</p> <p>(2)データベースの追加更新件数 1,908件</p> <p>(4)報告書 1冊（修理報告133件、銘文報告33件を含む）</p>		



復元模写作業

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所で行われる修復文化財情報の収集・整理については、データのデジタル化処理方法等、将来的な情報の応用に対する発展性を見据えて継続的に実施している事業であり、効率性・正確性を担保しつつ30年度も順調に実施できた。この内容は『京都国立博物館文化財保存修理報告書』にて逐次報告している。 30年度は当館蔵の国宝「蓮池水禽図」（俵屋宗達筆）の修理の過程において新たな知見を得るなど、成果を蓄積することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究活動の一環として、文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行った。本事業は、法人化以前から継続してきた基礎研究事業であり、中期計画でもその重要性に鑑みて継続性を重視している。文化財保存修理所に搬入される修復文化財の多寡は他律的条件であるため定量的評価になじまないものであるが、ほぼ安定した件数で推移しており、有形文化財の修復や模写にかかる調査研究の情報を継続的に蓄積していく所期の目標は順調に達成しており、31年度以降も継続していく。 当館蔵「若狭国鎮守新人絵系図」の復元模写も調査結果をもとにした料紙が作成されるなど、5か年計画の2か年目として順調である。 31年度計画も30年度に準じて実施していくが、得られた知見をもとにした研究の活性化が望まれる。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1421B イ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化財の製作・技法等に関する材質構造調査・研究 ((4)-②-1)		
【事業概要】博物館の展示・教育普及活動に関連する調査研究として、有形文化財の製作技術にわたる調査や材料等に関する調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室 降幡順子
<p>【主な成果】</p> <p>(1) 萤光 X 線分析法は、非破壊分析が可能であるため、共同調査等に係る材質調査として多くの調査を実施した。30 年度は特に金属組成、顔料調査、陶磁器胎土の分析調査を主としたものであった。</p> <p>(2) 実施した分析調査は、所蔵者の協力を得て修理所内工房と実施した寄託修理品の調査を含め、X 線 CT 撮像 13 件 (27 点)、萤光 X 線分析 (携帯型装置含む) 36 件 (395 点)、可視赤外分光分析 1 件 (40 点) であった。イメージングプレート (I.P) を用いた X 線透過撮影 4 回である。</p> <p>(3) 特に外部からの依頼で実施した滋賀県教育委員会からの美術工芸品調査 (懸仏) や鳥取県埋蔵文化財センターからの出土遺物調査 (埴輪、ガラス玉等) では、モバイル型分析装置 (萤光 X 線装置) を用いて現地にて実施するなど、機動的な文化財の科学調査に貢献することができた。</p> <p>(4) 施設利用申請による調査としては、早稲田大学からの千葉県龍角寺境内より出土した磚仏および瓦の胎土分析を実施した。</p> <p>(5) 当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の復元模写のため、高知県立紙産業技術センターに依頼し、原本の料紙分析を行った。</p> <p>(6) これらの研究成果を修理事業等に活かすとともに、その一部を講演、学会、論文等で発表した。</p>			
<p>【備考】</p> <p>(5) 研究成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学会発表：降幡順子・石田由紀子・岩戸晶子・神野恵・伊奈稔哲「奈良三彩・綠釉陶器の胎土中に含まれている鉄の化学状態の分析」日本文化財科学会第 35 回大会研究発表要旨集、7 月 7 日～8 日 ・講演：降幡順子「高松塚古墳・キトラ古墳壁画を守る—古墳壁画の保存修理ー」京都国立博物館夏期講座、7 月 ・講演：降幡順子「文化財を後世に伝える科学 - 博物館資料の科学調査 - 」けいはんなサイエンスカフェ、31 年 1 月 ・論文：降幡順子・伊藤信二「年記銘を有する銅製工芸品の萤光エックス線分析調査」『学叢』40 号、5 月 ・論文：降幡順子・石橋茂登・中川あや「古代寺院関連遺跡出土銅製品の非破壊調査」『奈良文化財研究所紀要 2018』、6 月 			



据え付け型萤光 X 線分析装置による測定

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30 年度は、収蔵品・寄託品の調査に加え、外部調査を実施する機会が増加した。使用科学機器も据え付け型とともに、モバイル型分析装置による調査事例も増し、幅広い分析調査を実施できた。成果の一部は、学会、講演会、紀要等により専門家のみならず広く市民に向けて公表することができた。今後も調査研究として一層のデータ蓄積に努めていき、報告書等で公表していく予定である。また 30 年度では施設利用申請による分析調査は初の取り組みとなった。今後も体制を整え継続を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究の一環として、有形文化財の製作技術にわたる調査や材料等に関する調査研究を実施した。30 年度は、収蔵品・寄託品の調査点数も増加し、調査研究事業としては順調に進展しているが、それらの結果を展示活用、教育活動等に結び付ける機会は、いまだ十分とは言い難い。寄託品の調査結果の公表に際しては、作品所蔵者の了承が必要であるため、了承を得やすい体制も整えていく必要があるといえる。31 年度以降は、より迅速な情報公開を可能とし、調査研究成果の展示活用も実施していきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 非破壊分析手法とその分析精度に係る調査研究 ((4)-②-1)		
【事業概要】博物館の展示・修復に関する業務の一環として、非破壊分析調査を実施する。また非破壊的な分析手法は、有形文化財に対して非常に有用な手法である一方で、どうしても分析精度に限界が生じるため、その分析精度に係る調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室 降幡順子
<p>【主な成果】</p> <p>非破壊で内部構造を明らかにできるX線CT調査は、文化財資料調査に多く実施されている。30年度は調査対象とする資料の材質を従来の彫刻（木質文化財）からさらに広げ、服飾（絹布・糸）、考古遺物（鉄製品）、漆工品（漆、螺鈿）、紙の調査もおこなった。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 30年度は、X線CTを用いた調査として、寄託修理品を含め、X線CT撮像13件（27点）実施した。 (2) 外部（京都大学）からの施設利用申請による調査を初めて実施した。 (3) X線CT測定では、金属鉄からなるテスト試料を用いて、X線CT画像の階調から求めた試料密度と、実際の密度との相違について測定条件による影響を計測した。 (4) 携帯型分析装置を用いた分析調査では、表面形状、劣化の程度、測定距離などの要因による測定誤差が生じることが知られている。そこで誤差の低減を図るために、30年度は測定距離による測定誤差の低減を目指し、標準試料測定、検量線作成などを実施し、現場での分析調査に有用なデータの蓄積に努めた。 (5) 染織材料についても同様に、色見本に対して可視赤外分光分析を実施し、測定条件、測定対象の差異などによる誤差の軽減とデータの蓄積に努めた。これらの成果は今後の非破壊調査に活用できるものである。 (6) これらの研究成果の一部を学会等で発表した。 			
<p>【備考】</p> <p>(6) 学会発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 杉野公子、降幡順子、能澤慧子「レプリカ制作を通してみる19世紀ヨーロッパのこども服—ウール地ドレス—」服飾文化学会第19回大会、5月 ・ 降幡順子、山川暁、南谷恵敬、一本崇之「X線CTを用いた内部構造調査—「懸守」（国宝・四天王寺蔵）の調査事例ー」文化財保存修復学会第40回大会、6月 ・ 降幡順子・辻本与志一・金曼貞・早川泰弘・建石徹・高妻洋成・宇田川滋正「キトラ古墳天井・星宿図の螢光X線元素分析調査」日本文化財科学会第35回大会研究発表要旨集、7月 			



X線CT装置による聖餅箱の測定

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	非破壊分析手法として、X線CT、実体顕微鏡、螢光X線等の測定機器を用いた調査をおこなった。仏像等の彫刻や納入品の構造調査、浮世絵等の絵画材料等の調査を実施し、多くの情報を所蔵者、研究員、修理担当者と共有することができた。今後は30年度に実施したデータの蓄積から、有形文化財と装置の特性を生かし、より正確な情報を得ることができるよう、各装置の最適な測定法の確立を目指したい。さらに蓄積データの有効な活用として、研究者間での情報共有について検討していく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究に関する調査研究として、非破壊分析調査の実施および装置精度に関わる調査研究を実施した。30年度は対象とする有形文化財の材質の幅を広げるなど、順調に実施することができた。これらの研究成果の情報公開については、十分に生かす機会が少なかったことから、31年度以降は展示活用や研究会等も活用して、より迅速な情報公開を実施していきたいと考えている。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1421Cア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	ア 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響等に関する調査研究 (4)-②-1)

【事業概要】

館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の3点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を図った。

- (1)温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査
- (2)展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察）
- (3)文化財害虫トラップの設置及び回収

【担当部課】 学芸部	【プロジェクト責任者】 保存修理指導室長 鳥越俊行
------------	---------------------------

【主な成果】

- (1)29年度に引き続き、展示室や展示ケースに設置した無線式温湿度センサーで24時間リアルタイムモニタリングを実施した。蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し展示ケースの気密性向上に役立てた。収蔵庫についても29年同様、温湿度データロガーとデジタル温湿度計を用いた定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行い、空調の調整に役立てた。
- (2)正倉院展終了後に、展示ケース内のアクリル製治具などから塵埃を採取・電子顕微鏡にて観察し、塵埃の状況からケースの気密性に対する評価を行った。調査結果を踏まえ、気密性向上のための修理や部材交換などのメンテナンスを実施した。
- (3)29年度に引き続き、文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置し、2か月に1回交換を行った。調査結果を蓄積し分析することでIPM(総合的有害生物管理)を推進し、文化財害虫の生息が確認された箇所を重点的に清掃し被害の低減に努めた。また、清掃と防塵マット交換を定期的に実施し、展示室・収蔵庫の周辺の衛生環境保持に努めた。



昆虫類調査用トラップ設置の様子

【備考】

- ・学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に1回程度開催し、保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねている。

- (1)展示室内温湿度調査：174か所
 - (2)展示ケース内ほか粉塵調査：25か所
 - (3)文化財害虫生息状況調査：150か所
- ・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：11回開催

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続した調査の実施やデータの蓄積を着実に行っている。また調査で得られた結果を踏まえ、ワーキンググループでの情報共有や議論を行い、保存環境の保持と改善を図った。データの共有化を進め、保存環境の維持や向上を進めると共に円滑な監視体制を整えたい。なら仏像館についても同様に館内環境維持のため継続して調査をすすめデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示室や収蔵庫では、温湿度並びに文化財害虫に関する継続したモニタリングや調査を年間を通じて行っている。なら仏像館も同様にデータの蓄積を着実に継続して実施することで、中期計画の達成を目指す。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1421Cイ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究
プロジェクト名称	イ 文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))

【事業概要】

本事業では、以下の3点の内容について実施した。

- (1)修理方法の記録を残し将来の文化財修理に資するため、館蔵品や寄託品の保存状態に関する科学的な調査を行う。その内容を保存カルテとして記録する。
- (2)館蔵品や寄託品の修理を着工するにあたり、修理文化財の保存状態に関する情報を得るために科学的な調査を行った。また、調査結果を踏まえた修理調書を作成している。
- (3)修理中の文化財から取得した材質・銘文等の情報について調査と分析を行った。また、その結果を当館の研究紀要などへの掲載等を行いデータの蓄積を実施している。

【担当部課】 学芸部	【プロジェクト責任者】 保存修理指導室長 鳥越俊行
------------	---------------------------

【主な成果】

- (1)29年度に引き続き、館蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察するとともに、得られた情報をふまえ保存カルテを作成している。必要に応じて光学調査も併せて実施し、作品の基礎データを蓄積した。
- (2)29年度に引き続き、館蔵品や寄託品の修理に伴い、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテと調査結果をふまえて修理調書を作成し、館内鑑査や修理方針の策定に役立てた。
- (3)29年度に引き続き、修理中の木製文化財から得られた木片について、共同研究の一環として京都大学生存圏研究所との協定に基づき樹種同定を実施し樹種を同定した。また、修理中に発見された銘文は、当館研究員が翻刻を行い情報化と整理を実施した。26年度から29年度の成果については、31年度当初に刊行予定の文化財保存修理所修理報告に掲載すべく準備を進めている。



樹種同定のための顕微鏡観察

【備考】

- ・保存カルテや修理調書を基に修理された文化財は、修理完了後の翌年度冬に開催される特集展示「新たに修理された文化財」にて公表している。
- (1)保存カルテ作成件数：総計103件
(内訳 絵画：26件、書跡：2件、彫刻：27件、工芸：12件、考古：36件)
 - (2)修理調書作成件数：総計9件
(内訳 絵画：1件、書跡：1件、彫刻：4件、工芸：2件、考古：1件)
 - (3)材質調査及び銘文調査件数：3件
(内訳 材質調査実施件数：3件)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所の修理技術者と連携を進め、X線CT、X線透過撮影や顔料調査などの科学的調査を行い、修理に有用な成果が得られた。保存カルテについても整備を進め、修理方針の検討に役立てた。また、材質調査や銘文調査も引き続き実施し、データの蓄積を図った。

中期計画の実施状況の確認

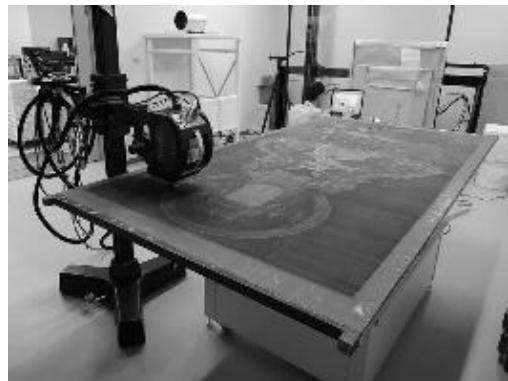
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の文化財保存修理所は、奈良をはじめとする国指定品の修理における拠点であり、修理技術者との連携は今後も重要である。本事業は、修理に関する基礎情報を収集し、その成果を公開するものであることから、31年度以降についても引き続き調査を行い、情報の蓄積を図ることで、中期計画の達成を目指す。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1421C ウ

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の2点の内容について実施した。 (1)館蔵品や寄託品の修理前や修理中等に併せ、光学調査(X線透過撮影・蛍光X線分析)を実施した。そして、修理方針の策定に有効な情報を取得し反映させた。 (2)文化財保存修理所での修理中の文化財については、当館の研究員と工房の技術員が共同で光学調査を実施し、得られた結果を修理へ反映している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1)館蔵・寄託の文化財(彫刻や漆工品など)の修理等に併せ、X線CTスキャナやX線透過撮影を実施し内部構造や納入品の把握を行った。また、絵画の彩色材料である顔料に関する情報を得るため、蛍光X線分析装置を用いた分析を行った。これらの光学調査は修理に活用すると共に、データの蓄積も進めた。 (2)当館研究員と工房の技術者が共同でX線CTスキャナ、X線透過撮影及び蛍光X線分析などの光学調査を行った。館蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、修理へ成果を随時反映させることができた。特にX線CTスキャナの導入により、修理前や修理中に調査を行うことができるようになったことで、彫刻作品や漆工作品のより安全な修理に役立てることができた。			
 <p>絵画の彩色材料調査</p>			
【備考】 ・調査件数 X線CTスキャナ調査回数：2件（X線透過撮影調査を含む） 蛍光X線分析実施回数：1件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	29年度に引き続き、修理等の際に内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るために光学調査を実施した。X線CTスキャナの活用により調査の質が大幅に向上した。光学調査の結果は修理調書に反映させるとともに修理方針の策定にも役立てている。31年度についても継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	X線CTスキャナは順調に稼働し、彫刻や漆工品などの修理に大いに役立っている。文化財保存修理所での修理内容をふまえ、X線撮影や蛍光X線分析などの調査を行うことで、修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できた。31年度も調査を継続し、データの蓄積を図ることで中期計画の達成を目指す。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1421D ア

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 X線CTスキャン、三次元計測、蛍光X線分析等によって文化財の材質・構造等に関する研究を外部研究者と協力して実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】			
(1) ジャワ「ガムラン」構成楽器の構造形態と音響の関係 インドネシア・ジャワの「ガムラン」を構成する青銅楽器の構造形態、製作技法及び音響の相互関係を明らかにすることを目的とした筑紫女学園大学との共同研究の一環として、X線CTスキャナおよび3Dデジタルイザによって楽器の形態を測定し、音階と構造の関係を調査した。また、楽器の外側及び内側の表面の蛍光X線分析を行った結果、内側表面からのみ鉄が検出され、楽器製作時に鉄製の槌によって内側から打ち込みを行ったことが示唆された。今後は、楽器打撃時の音響計測を実施し、構造形態と音響特性の関係を検討していく。			
 <p>「ガムラン」構成楽器の3Dデジタルイザによる計測風景</p>			
(2) 茶入の伝統的な製作技法 茶入の製作技法と内部構造の関係を検討するために、高取・薩摩・唐物など各種茶入のX線CTスキャンを実施した。その結果、CT画像において気泡・ヒビといった粘土内部の空隙を可視化でき、また、底部の糸切の痕跡や石膏を用いた後補部を検出することができた。気泡及びヒビの存在状況は茶入の製作技法に関連するものと考えられ、今後は画像解析に基づいた空隙の定量評価を行い、製作技法との関係を詳細に検討していく。			
(3) 伝藕糸織仏画の材質調査 蓮から紡いだ糸（藕糸（ぐうし））で織ったと伝わる仏画3幅について、作品の寄託先の担当者と共に、顕微鏡下における観察及び赤外分光分析による材質調査を行った。調査対象の3作品は全て藕糸を使用して織成されており、緯（よこいと）は藕糸と絹を撚り合わせた類例をみない技法で作られていることを強く示唆する結果が得られた。今後、研究紀要等で成果を公表する予定である。			
【備考】			
<ul style="list-style-type: none"> ・X線CT調査件数 20件、調査回数 160回 ・三次元計測調査件数 7件、調査回数 45回 ・学会発表：「国宝『初音の調度』-耳盟・輪台、渡金箱、旅眉作箱-のX線CTによる構造・技法調査」 日本文化財科学会第35回大会（7月6日～7日） ・論文：「野村美術館所蔵・南蛮毛織抱桶水指の科学分析」『野村美術館研究紀要 28号』 			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は26件の文化財調査を行うことができた。特に、30年度から新たに筑紫女学園大学、日本大学、姶良市、直方市、北九州市等との共同研究に着手し、上記の成果を得ることができた。これらの成果は、各種文化財の製作技法に関する理解を深める上で重要であるのみならず、31年度により詳細かつ定量的な学術研究を遂行する基盤をなすものである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで中間計画に沿って様々な文化財の調査を実施し、文化財の保存と活用を推進するための基礎データを蓄積しており、30年度も継続して取り組むことができた。30年度末には本事業の中核的な分析装置であるX線CTスキャナの機器更新が完了するため、31年度以降はさらに高精細な調査分析に取り組む。また、X線CT及び三次元計測によって得られた視覚的データを数値化する画像処理手法を検討し、より客観的なデータ解析を行う予定である。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1421D イ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究
プロジェクト名称	イ 博物館における文化財保存修復に関する研究 ((4) -②-1))

【事業概要】

九州の保存修復の中核となる当館文化財保存修復施設の機能を活かし、西日本地域の大学において文化財保存修復を学ぶ学生を対象とした技術研修を実施する。また、地方行政及び博物館等施設において、文化財の保存修復の担い手となる人材を育てていくためのフィールド調査及び調査結果に基づく教育機会の提供を行う。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 志賀智史
--------	-----------	-------------	-------------

【主な成果】

- ・「文化財保存修復研修」

実施日：8月27日～31日の5日間

参加者：広島市立大学4人、九州産業大学2人、佐賀大学1人、別府大学1人の計4大学8人

内容：屏風の下張り製作

協力者：一般社団法人国宝修理装潢師連盟

大学・大学院で文化財保存修復を学ぶ学生を対象に、装潢修復技術を学ぶ機会を提供することができた。屏風の下張り製作を通して、伝統的な日本の紙文化財の構造を学び、その修復技術の一端を実習することで、受講者に文化財や保存修復への理解を深めてもらうことができ、将来の修理技術者の育成にも寄与することができた。

- ・「古文書保存基礎講座」

実施日：31年1月25日、26日

参加者：地方行政及び博物館等施設において古文書の調査・保管・修復担当者

内容：25日 文化財の保存修理及び古文書の保存と活用についての講義、糊焼き実習

26日 紙文化財の取り扱い実習、応急手当の実習

当館、福岡県教育委員会及び筑紫野市歴史博物館の三者共催事業。古文書の調査・保管や応急手当について研修する場を設けることができた。

- ・「古文書保存基礎講座」受講機関へのアンケート調査

調査対象：159機関（18年度～29年度に本講座を受講した機関）

11年に渡って実施してきた古文書保存基礎講座について、研修で得られた知識や技術の活用度をはかり、直面する課題やニーズ等の現況を把握するため、受講機関へのアンケート調査を行った。その結果、多くの機関において研修内容を日常業務に活用していることを確認できた。一方で、近年の受講機関の多様化により、近代資料や水損資料の保存を課題とする機関が増えていることや、経験年数の短い担当者が多く、専門家が不足していること等、現場が直面する課題も明らかとなった。

- ・文化交流展示「文化財をまもりたえる博物館」

実施日：5月15日～7月1日（7週間）

展示場所：文化交流展示室 第1室

これまでバックヤードツアーでしか知ることができなかつた博物館の役割について、修復作品を中心に展示することで、より多くの方々に文化財保護という博物館の役割を知って頂く機会を設けた。展示は29年度に引き続き、文化財をまもりたえてきた「保存箱」を中心に、「修理」、「模写模造と科学調査」、「収蔵」、「環境」の4つのテーマで展開した。



「文化財をまもりたえる博物館」展示風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大学と文化財保護の現場における両機関において、将来及び現在の文化財の保存修復の担い手を対象に、30年度も継続して研修の機会を設けることができた。公共の財産である文化財を次世代に守り伝えていくためには、人材の育成を継続的に行う必要がある。そのため上記のアンケート調査等を活用することで、現場に即した実践的な研修を今後も継続していく予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	行政機関職員への研修、将来の修復技術者の育成、博物館来館者への展示を通じた普及啓発を行うなど、中期計画に沿って多方面への文化財保存修復に関する教育活動を行うことができた。また、受講機関へのアンケート調査の結果は、今後の博物館での文化財保存修復に関する新たな取り組みを検討する上で、大変貴重な成果となった。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1421D ウ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究
プロジェクト名称	ウ 博物館危機管理としての持続的IPMシステムの研究 ((4)-②)-1)

【事業概要】

本研究の目的は、我が国の博物館におけるIPM（総合的有害生物管理）普及のための地域共働システムづくりである。本研究では、研修会の開催、及び地元NPO法人やボランティア、大学・専門教育機関・地域文化施設の連携によるIPM研修プログラム確立を通じ、IPMの社会的理解度を深めつつ、博物館等におけるIPMを軸にした自立的地域共働システムづくりを目指すものである。

【担当部課】 学芸部博物館科学課

【プロジェクト責任者】 主任研究員 秋山純子

【主な成果】

(1)イギリスから文化財施設の虫害対策の専門家を招聘するとともに、国立民族学博物館からも講演の協力を仰ぎ、IPMセミナーを実施した（10月24日）。国内の博物館、美術館、図書館関係者のみならず、館内でのIPM事業にかかわるスタッフ、NPO法人、ボランティアあわせて175人の参加を得た。

(2)IPM研修を29年度に引き続き実施した（10月25日、26日）。IPM研修の受講は各施設の職種の異なる2人1組（総務系と学芸系など）での参加を原則としている。30年度のIPM研修では、募集定員24人のところ、北海道から九州まで全国58の施設から109人の応募があり、34人が受講した。

28年度、29年度に受講した館で、再度申し込みをするところも多く、このIPM研修が各館で役立っていることが伺える。また、無記名でのアンケート結果では「とても良かった」と最高の評価で回答した参加者が全体の79%以上と、非常に満足度が高い結果を示しており、引き続きIPM研修を実施する必要があるといえる。

(3)館内向けIPM研修の開催

館内スタッフの希望者向けにIPM研修を実施した（5月23日）。館内のスタッフに当館のIPM活動を知ってもらう良い機会となった。

(4)環境ボランティア活動として、館内ウォッチングや博物館科学課スタッフによる小話会、昆虫インジケータ観察などの活動を実施した。



IPM研修風景



IPMセミナーにおけるイギリスのヴァレリー・ブライス氏の講演



環境ボランティア活動での館内トラップ交換風景

【備考】

- IPMセミナー 1回 参加人数：175人
- IPM研修（2日間） 1回 参加人数：34人
- 館内希望者向けIPM研修（1日間） 1回 参加人数：21人
- 学会研究会等発表：木川りか、秋山純子、富松志帆、武藤美代、泊智子、柿本大典、大城戸博文「ガラス外壁を有する博物館建造物における照明を利用した衝突野鳥の対策」文化財保存修復学会第40回大会（6月16日、高知）、秋山純子、木川りか、富松志帆、武藤美代「九州国立博物館における各種資料の低温殺虫処理について」文化財保存修復学会第40回大会（6月16日、高知）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今回のIPM研修ではより実践的に生物処理方法の選択を検討する実習を加えたことで、実際に自館に戻ったときに役立てられるという感想が多かった。IPMの実践に向けセミナーや研修の内容を検討し、確かな形で普及できた。31年度も引き続き内容等を精査し、実施していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画のとおり、文化財の保存に関する博物館等の業務に関連し、セミナーやIPM研修等を全国の博物館等から担当者を受け入れて実施している。IPM研修は毎年、受講の希望者が多く、今後もこのようなニーズを踏まえつつ、調査研究により最新の状況を反映した教育活動を実施していきたい。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1421D エ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	エ 文化財に使用された彩色材料に関する面的調査法の検討 ((4) -②-1))		
【事業概要】 近年、文化財の科学調査が一般的に行われるようになってきた。しかし文化財は脆弱な材質、構造のものが多く、文化財の科学調査は、調査のための作品移動の機会をなるべく少なくし、短時間に非破壊で行うことが求められる。これまで制限がある中での点分析が主流であったが、文化財を総合的に理解するには面的な広がりで捉える調査が必要である。本研究では文化財の科学調査に面的な手法を導入した有効な調査法を検討する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 秋山純子
【主な成果】			
(1) 標準カラーチャートの赤外線画像をもとに「博物図譜」(香川県立ミュージアム保管)画帖4帖の赤外線画像を解析した結果を日本文化財科学会で発表した。(7月7日、8日)			
(2) 顔料・染料を塗り重ねた標準となるカラーチャート作成のため、染料(青花)の調査を行った。(8月1日、2日:東京文化財研究所)			
(3) 顔料・染料を塗り重ねた標準となるカラーチャート作成のため、材料の選定や内容について意見交換を行った。(8月10日、11月13日:京都国立博物館内修理工房)			
(4) これまでの赤外線画像による面的調査の成果を踏まえ、スペイン・サラゴサ美術館所蔵の浮世絵を調査・撮影することができた。この浮世絵はフランス・ボルドー大学の研究所で彩色の科学調査が行われており、点分析の成果を赤外線画像によって面の広がりで捉えることができた。(9月23日~10月1日:フランス・ボルドー大学、スペイン・サラゴサ美術館)			
(5) 香川県立ミュージアムにて「博物図譜」の顔料について蛍光X線分析を実施し、使用されている彩色材料の解析を行った。(31年2月15日、16日)			
【備考】 調査回数: 5回 学会発表等: 「赤外線画像と彩色材料の成分との比較について」日本文化財科学会第35回大会(7月7日、8日)			



スペイン・サラゴサ美術館での調査の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでの研究成果を踏まえて、赤外線画像による判定が有効な緑色に着目した標準カラーチャートを作成した。また、海外の浮世絵を調査する機会を得て、絵画の中でもこれまでと塗りの状態が違う刷り物に対して、次につながる赤外線撮影をすることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関する調査研究を実施した。本研究では面的調査に赤外線画像が有効であることを検証してきた。これまで実際の資料で検証するため調査を重ねてきた「博物図譜」をもとに、面的調査に有効な彩色材料に絞った標準カラーチャートを作成し、データを蓄積できた。また海外での調査でも赤外線画像による面的調査が有効であることを確認することができた。

【書式B】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1421D オ

業務実績書

中期計画の項目	①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関する調査研究					
プロジェクト名称	日タイにおける文化財調査と資料集成 ((4) -②-1))					
【事業概要】						
これまで知られてきた日タイ交流史料を新出の交易・文化交流資料から見直し、日本とタイにおける文化財調査を行い、その資料を日タイにて共有する。本成果は今後の展示、文化財収集の基礎資料となる。						
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長 原田あゆみ			
【主な成果】						
30年度は、日本とタイに伝わる更紗の研究として、明治初期にタイから日本にもたらされた貝葉写本と包裂、江戸時代に日本に伝わった更紗裂帳、タイに伝わる更紗を比較調査した。						
また、当館所蔵の端物切本帳13冊の詳細なデータをまとめ、デジタル版及び紙版報告書として刊行した(31年3月)。						
大谷大学真宗総合研究所と共同で実施してきた織田得能(1860~1911)請來パーリ語貝葉経と包裂の調査は3年目にあたる(31年1月31日~2月1日)。また、30年度も引き続き、タイ芸術局との共同調査を行い(31年2月5日~8日、2月22日~28日、3月22日~27日)、調査データを日タイにて共有した。						
						
ペーリ語貝葉経と包裂共同調査 大谷大学総合博物館 31年1月31日		伝統的修復技法の調査 タイ・芸術局伝統工芸部修理所 31年2月25日	日タイ関係資料の調査 タイ・アユタヤー遺跡 31年2月26日			
【備考】						

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	30年度は、収集してきたデータの整理と平行して、特に輸入更紗に関する調査報告書の準備を進めた。本調査研究は東京国立博物館所蔵の端物切本帳調査をまとめた『端物切本帳画像一覧』(3巻)から継続するもので、30年度は当館所蔵の端物切本帳についての『端物切本帳画像一覧』(5巻)を刊行することができた。本成果は、大谷大学真宗総合研究所との共同調査研究においても有効に活用されているだけでなく、日本各地に収蔵される端物切本帳との比較研究により、輸入染織研究に寄与することが可能である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財に関する調査研究を実施した。中期計画3年目にあたる30年度は、これまでの調査成果の整理並びに専門家向けの報告書の作成を中心に作業を進めた。31年度も引き続き日本、タイ国内の調査を継続予定である。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1422Aア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究 ((4)-②-2))		
【事業概要】 東京国立博物館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	情報管理室長 村田良二
【主な成果】			
1)	収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、貸与管理、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、隨時改善を重ねて機能を向上させた。		
2)	作品検索機能について、制作地で検索できるようにした。		
3)	展示案に含まれていた寄託品が返却された場合に、展示案の画面で警告を表示するようにした。		
4)	文献管理機能を新規に開発した。列品等が掲載または言及されている展覧会図録、雑誌記事等の文献のデータを追加することにより、ユーザの利便性が向上した。		
5)	機構内4博物館の収蔵品を公開する「ColBase」とのデータ連携について検討した。		
【備考】 収集データ件数 229,958 件 (内訳) 作品データ件数 218,145 件 平常展データ件数 5,147 件 鑑査会議データ件数 97 件 貸与データ件数 1,789 件 修理データ件数 2,669 件 文献データ件数 2,111 件			

文献データ管理画面

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発でき、学芸業務に欠かせないツールとして着実に発展させることができた。作品検索において制作地を検索条件に指定できるようにすることにより、検索の効率を向上させた。また、展示案が作成されたあとに、案に含まれていた寄託品が返却により使用不可となったことについて警告を表示することにより、従来担当者の記憶に依存していた部分をシステム化して抜け・漏れがないようになれた。文献データ管理機能を追加したことにより、作品ごとの過去の文献を参照することが大幅に容易になり、調査研究等の業務に役立った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間では、システム全体の設計を再検討し、さらに発展させていく。30年度は、継続的な機能改善と同時に、プログラムコード全体の改善を行い、「ColBase」とのデータ連携について検討することができた。31年度以降は、ユーザインターフェース関連のライブラリの更新に着手するとともに、「ColBase」とのデータ連携のために公開データの出力機能の実装に着手する。

【書式B】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1422A イ

業務実績書

中期計画の項目		(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究	
プロジェクト名称		イ 創立 150 年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究 ((4)-②-2))	
【事業概要】 34 年度の当館創立 150 年へ向けて、『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。30 年度は関係文書類の付箋挿入と整理、PDF などデータ化を進め、保存措置を講じる。また、『150 年史』執筆者に向けて資料提供を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長 恵美千鶴子
【主な成果】			
(1) 収集した文書類の整理・目録化・保存措置 (4 月 2 日～31 年 3 月 29 日：週に 1～2 日) 資料保管室（資料館 3 階）に収集した約 8,500 件の館史関係文書類について、27 年度に完成した目録(仮)と対応するための付箋挿入を進めた。また、資料の保存や出納のために、中性紙箱への入れ替えを行った。以上は、資料整理補助謝金アルバイト 1 名と、東京国立博物館百五十年史編纂室員 2 名、編纂室 AF1 名がともに作業を行った。			
(2) 東京国立博物館百五十年史編纂に向けた打合せの実施 (5 月 23 日ほか) 『150 年史』編纂のためのワーキング打合せを実施した。29 年度に決定した執筆者に、執筆依頼を行った。 また、執筆者を集めて、編集調整会議 (2 月 22 日) を行った。			
(3) 館史の内容に即した文書類の整理・デジタル化 a) 『百年史』資料のデジタル化 (4 月 3 日から) 『東京国立博物館百年史』編纂の際に用いられた資料・原稿等の PDF 化を進めるとともに、『150 年史』編纂の資料として活用すべく館史資料のテキストをデジタル・データ化した。AF1 名と謝金アルバイト 1 名がこれを進めた。 b) 海外交流展覧会資料のデジタル化 (7 月 3 日から) 『150 年史』編纂に向けて、執筆資料とするために、海外交流展覧会に関する資料のデジタル化を行った。室員 1 名、AF1 名、謝金アルバイト 2 名がこれを進めた。 c) 『150 年史 年表 (稿)』の作成 (5 月 10 日～6 月 29 日) 『150 年史』執筆の資料とするために、これまで蓄積してきたデータを年表に落とし込み、冊子を作製した。			
(4) 総合文化展にて館史に関わる展示の実施 (10 月 30 日～12 月 25 日) 本館 15 室「歴史の記録」にて、館史にかかる古写真などの展示を実施した。また、この展示に関連するギャラリートークを、室員 1 名が行った。			
(5) 問い合わせへの対応と関係資料の提供 (12 月 21 日ほか) 『150 年史』執筆者などへの資料提供と、館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。			
【備考】 (1) 収集した文書類の整理：65 日間実施 (2) 編纂ワーキング打合せ（全体）と個別打合せ、編集調整会議：6 回実施 (3) a) 『百年史』資料のデジタル化：55 日間実施 (18 件約 14,000 点) b) 海外交流展覧会資料のデジタル化：20 日間実施 (30 件 414 点) (5) 資料提供・問い合わせ対応：22 件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27 年度より継続的に行って來た文書類の整理・保存措置について 30 年度も進めることができた。また、収集・整理した文書類のデータを活用し、調査研究の歴史に関するデータを収集し、編纂資料年表（冊子本）を作成することができた。引き続き、館内各所に所在する文書類を『150 年史』編纂に有効に活用できるようにするとともに、展示など他の事業にも役立つようなデータ作成を行う。

中期計画の実施状況の確認

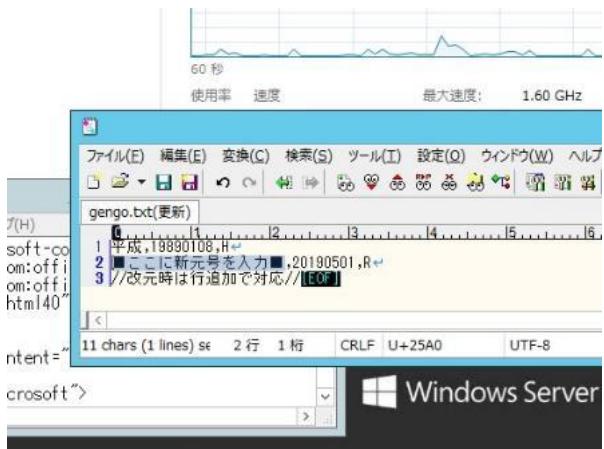
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料目録について館内での周知が進み、文書類の活用希望者も増えてきた。また、館史に関わる問い合わせや調査研究などの要望に迅速に対応できるようになったことから、中期計画に対する進捗状況は順調である。31 年度以降も引き続き文書類のデータ化を進めるとともに、利用しやすい文書整理を行い、さらなる活用を図っていきたい。

【書式B】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1422B ア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究 2) 博物館情報、文化財情報に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財情報に関する調査研究((4)-②-2)-ア)		
【事業概要】 当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討するとともに、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長（兼列品管理室長） 羽田聰
【主な成果】			
<p>(1)当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館におけるインフラネットワークの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催し、文化財情報に関する調査研究を推進した。</p> <p>(2)博物館に求められるデジタルアーカイブズや、国立国会図書館を中心に整備が進むジャパンサーチへの対応のため、近年の他機関における動向や社会的ニーズの変化を踏まえ、メタデータの整備や画像提供のあり方について、継続して調査・検討を行った。</p> <p>(3)改元の準備として、文化財情報システムの帳票プログラム等について検討を行い、新元号を処理可能なよう改修を行った。</p> <p>(4)文化財保全のための収蔵・展示環境を監視する環境モニタリングシステムについて、セキュリティ向上のためWindows10対応や、館内携行用タブレットの仕様変更による作業性向上など、各種改善を行った。</p> <p>(5)写真及び撮影におけるデジタル化の推進に伴い増大する画像データを安全にバックアップするため、29年度に導入したUDPバックアップ方式について、実運用を踏まえた検証を行いつつ、適宜改修・増強を図った。また、激甚災害対策として、さらに遠隔地でのバックアップができないか、最新のアーカイブ規格（LT0-8、Gen, 2 ODAなど）について検討を開始した。</p>			
 <p style="text-align: center;">プログラム改修 (文化財情報システムの改元定義)</p>			
【備考】			
・情報システム検討委員会		6回	
・情報システム調査		6回	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館のデジタルアーカイブズや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催したほか、環境モニタリングシステムの改善や画像ストレージシステムの改修を通じ、文化財情報に関する調査研究を推進した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画で求められている文化財情報に関する調査研究について、写真及び撮影におけるデジタル化の推進に伴い増大した画像データの効率的かつ安全な収容を進めるため、29年度に大幅に容量性能を向上させたバックアップシステムを、安定稼働に乗せる事ができた。 31年度以降は文化財情報システムを含めた博物館アーカイブズの調査研究に特化した分科会を設置し、本調査研究をより推進していく予定である。 情報システム委員会での検討課題が多岐にわたることから、31年度以降は文化財情報の調査研究をより強力に推進するためのアーカイブズ検討分科会（仮称）を設置することを予定している。

【書式B】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1422Cア

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究 ((4)-②-2)		
<p>【事業概要】 当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開並びに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長 宮崎幹子
<p>【主な成果】 デジタル撮影の安定的な稼働を目指し、撮影機材、環境、保存用ストレージ、体制等の整備を行い、多数の撮影を実施した。情報システムや公開用データベースの更新を適宜行い、情報の公開と拡充に積極的に取り組んだ。30年度は、画像保存用のストレージのリプレイスを実施するなど、設備面の整備に注力した。</p> <p>(1) 特別展「国宝 春日大社のすべて」(以下、「国宝 春日大社のすべて」) 並びに「糸のみほとけ一国宝 績織當麻曼荼羅と繡仏」(以下、「糸のみほとけ」) の開催と連動して、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各分野の文化財の撮影を行った。「国宝 春日大社のすべて」では、その機会がとりわけ限定される神道美術の撮影が多数叶った。また、54年ぶりに繡仏を展観する特別展となった「糸のみほとけ」でも、各地の優品を集中的に撮影することが出来た。これらによって、当館における文化財アーカイブズの更なる充実が図られた。</p> <p>(2) 29年度に引き続き、ガラス乾板の保存活用事業を実施した。これは、デジタル化、ガラス乾板の保存処置(カビや埃の除去)、畳紙・保存箱への納入と、新たな専用キャビネットへの排架とが連動したもので、館内の貴重な歴史資料の保存活用を目指す事業である。30年度はガラス乾板のデータベースを構築し、仏教美術資料研究センターにおいて情報公開をおこなった(6月)。保存についても、年度内に全ての作業が完了した。ガラス乾板の被写体の同定については、引き続き各部門の協力を受けながら行っていく。</p> <p>(3) 33年に刊行を予定している、快慶作品を集めた大型図録の基礎資料を収集するため、高野山等において文化財調査にともなう撮影を実施した。この活動は、当館のアーカイブズの充実だけにとどまらず、広く学界へ裨益する出版事業にも結び付けられる成果である。</p>			
<p>【備考】</p>			



撮影風景（阿弥陀三尊像 和歌山・光臺院）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館では、文化財アーカイブズの形成を重要な活動のひとつとして位置付けている。なかでも拝観や移動、調査の機会が稀少な文化財を画像データとして蓄積し、共有可能な研究資源としていくことには、大きな意味がある。文化財の撮影は、保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から各年度の実績を評価することは必ずしも適切ではないが、主な成果でも述べたとおり、学術的に重要でありながら撮影の機会を得ることが難しい文化財について、継続的に調査を実施して質の高い画像データを取得し、公開へと繋げていることの意義は非常に大きい。近年では、文化財写真の黎明期を伝えるガラス乾板のデジタル化にも取り組むなど、更なる発展も視野に入れている。今後も当館の展覧会事業等と密接に連携しつつ情報の蓄積を続け、仏教美術情報の大拠点として、文化財アーカイブズの質・量双方の維持に努める予定である。 人員と予算が限られる現在のような体制で、他館と比して遜色ない幅広い活動を展開できている点も評価できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	デジタル撮影を含む画像データの作成については、現在のところ安定的な稼働を維持できている。内部での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が必須である。また、現在行っているカラー・近赤外線・透過X線のデジタル撮影に加えて、29年度より本格稼働したCT撮影についても、情報の蓄積と共有を実現させるべく、機材・設備の充実が急務である。 当館では仏教美術分野において国内唯一と言っていい貴重な画像データのコレクションを運用しているが、CT撮影に代表されるような文化財調査の進展に併せ、文化財アーカイブズの拡充が図れるよう、更なる体制整備が肝要である。今後も文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能するべく、文化財アーカイブズ形成の実践を続けていくとともに、それを下支えする理論の構築にも取り組んでいく。

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1430A

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等							
【年度計画】 (4館共通)								
1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウム等を開催する。 4) 平成31年のICOM(国際博物館会議)京都大会2019に向けた活動を促進する。 (東京国立博物館)								
1) 学術交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。 2) アジア国立博物館協会(ANMA)理事会・定期大会、IEO(国際展覧会オーガナイザー会議)、日中韓国立博物館館長会議等の国際会議へ参加する。								
担当部課	学芸企画部企画課国際交流室			事業責任者	室長 楊銳			
【実績・成果】 (4館共通)								
1) 中国、韓国、米国の博物館・美術館等から計79人の研究者を招へい・受け入れ、研究交流を行った。 2) 中国、韓国、インドネシア、マレーシア、イスラエル、米国、ヨーロッパなど11カ国・地域の博物館・美術館等へ研究職員を52人派遣し、収蔵品とその活用に関する研究および、研究交流を行った。 3) 文化庁支援、北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業の一環として国際シンポジウム「世界の中の日本美術—オリエンタリズム・オクシデンタリズムを超えた日本理解」(31年1月18日、東京国立博物館)及び日本美術専門家会議(31年1月19日、同館)を開催した。 4) 第66回全国博物館大会(11月28日~30日、東京都)への参加を通して、ICOM京都大会への参加を呼びかけた。 5) ICOM-ASPAC日本会議2018(12月1日~2日、九博)への参加を通して、アジア太平洋地域の博物館関係者との情報交換、交流を推進した。 (東京国立博物館)								
1) 韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館等との学術交流協定に基づき、研究員の交流・派遣を行うとともに、海外での文化財調査や特別展など共同事業の企画・実施準備、国際会議に研究員を派遣した。また、今年はロシアにおける日本年から「江戸絵画名品展」(9月4日~10月28日、ロシア・ブーシキン美術館)開催にあたり、現地の展示環境等に関する助言を行ったのをはじめ、国際的な調査研究、ネットワーク構築、交流事業の推進を図った。 2) 外国人来館者に日本美術をより理解し、楽しんでいただくため、多言語対応担当者を海外に派遣し、各国の公私立博物館の多言語化の対応状況を調査し、当館の多言語化環境の向上に促進した。								
【補足事項】 (4館共通)								
上記研究員派遣人数は当館予算による派遣延べ人数を示す。 科学研究費助成事業等外部資金等を含む人数は69人。 (東京国立博物館)				  <p>「江戸絵画名品展」(9/4) 学術発表会(11/27)</p>				
1) 研究員の海外交流の成果を館内で共有するため、学術交流発表会及び派遣者による研究交流成果報告会を実施した：①韓国国立中央博物館研究員(6月29日朴永萬氏・11月27日朴娟嬉氏)、当館研究員(31年1月25日遠藤主任研究員・飯田アソシエイトフェロー) ②中国・上海博物館研究員(11月26日徐方円氏・12月12日李蘭氏)、当館研究員((31年4月上旬予定 山本研究員・猪熊兼樹主任研究員)								
【定量的評価】項目								
30年度実績	目標値	評定		26	27	28	29	
海外からの研究者招聘	79人	-	-	経年変化	47	83	73	35
海外への研究者派遣	52人	-	-		18	47	60	67
国際シンポジウム開催数	1回	-	-		2	1	1	1
国際シンポジウム参加者数	256人	-	-		422	284	463	334
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 韓国国立中央博物館・中国上海博物館との協定に基づく主体的な招へいに加え、海外の優れた研究者を招聘するとともに、館研究員を海外に派遣、研究者交流を活性化することにより、博物館活動に対する示唆が得られるよう努める。また、30年度で5度目となる米国・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業には5カ国22人の参加があった。これらの取り組みにより海外研究者・博物館関係者との交流が進み、今後の展覧会等事業や研究交流につながっている。今後、交流対象国をさらに広めていくことに努めたい。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 例年規模の研究者招へいと派遣により成果を達成し、順調に遂行できた。第5回となった米国・欧州ミュージアム日本美術専門家会議では、世界の中の日本美術—オリエンタリズム・オクシデンタリズムを超えた日本理解に活発な議論が進み、交流を通じて、文化の理解し合うことを図った。						

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1430B

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等								
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 平成31年のICOM(国際博物館会議)京都大会2019に向けた活動を促進する。									
担当部課	総務課 学芸部	事業責任者	課長 數馬厚人 企画室長 山川暁						
【実績・成果】 (4館共通) 1) 講演会・展覧会等のために海外研究者14人を招へいし、外国人客員研究員1人、特別研究員1人の海外研究者を受け入れた。 2) 研究交流及び研修等のため、職員延べ35人を海外へ派遣した。 3) ・一郷韓国美術史研究院院長姜友邦(カンウバン)氏を招へいし国際特別講演会「日本と韓国の仏画の新解釈」及び日本研究者との座談会(31年1月26日)を開催した。 ・北京画院理論部主任呂暁氏を招へいし土曜講座「木匠から巨匠へ：齊白石の人生と芸術」(31年2月23日)を開催した 4) ・ICOM京都大会に向けて、九州国立博物館で開催されたICOM-ASPAC及び関連の国際会議へ職員を派遣した。 ・京都市内博物館施設連絡協議会主催の「ICOM京都大会プレイベント」に協力し、事業への冠付与や明治古都館(本館)の特別公開を行うなど開催機運醸成に努めた。									
【補足事項】 1) 招へい者のうち2名は文化庁「平成30年度外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」による。 2) フランス・ギメ美術館との学術交流協定に基づき、当館職員1名がギメ美術館にて調査を行った。 3) 呂暁氏の土曜講座は特別企画「日中平和友好条約締結40周年 中国近代絵画の巨匠 齊白石」の関連講座である。 4) 文化庁創立50周年、国際博物館会議(ICOM)京都大会開催1年前を記念し、オリジナルクリアファイルを配布した。									
【定量的評価】 項目		30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
海外からの研究者招聘		14人	-	-		2	2	2	2
海外への研究者派遣		35人	-	-		14	17	21	21
国際シンポジウム開催数		1回	-	-		1	1	0	1
国際シンポジウム参加者数		99人	-	-	168	200	0	140	
【年度計画に対する総合評価】 評定 : A		【判定根拠、課題と対応】 外国人招へいや職員派遣などの海外交流に加えて、30年度は外国人研究者の受け入れや北京画院及び東京国立博物館との共催である特別企画「日中平和友好条約締結40周年 中国近代絵画の巨匠 齊白石」も実施した。外国人招へいにあたっては文化庁「平成30年度外国人芸術家・文化財専門家招へい事業」を活用するなど、外部資金も積極的に活用した。また、ICOM京都大会開催地の国立博物館として機運醸成に努めた。以上のことから、年度計画の目標を上回る成果をあげることができた。							
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。									
【中期計画に対する評価】 評定 : B		【判定根拠、課題と対応】 30年度は韓国より姜友邦氏、中国より呂暁氏を招へいし、講演会及び座談会並びに土曜講座を開催した。31年度以降も引き続き機会を捉えて、海外研究者も交えたシンポジウム、講座、講演等の実施を検討する。また、ICOM京都大会開催地として、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与できた。31年度に開催されるICOM京都大会に向け、引き続き一般の方も含めた広報活動を実施していく。							



国際特別講演会の様子

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1430C

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等							
【年度計画】(4館共通)								
1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 平成31年のICOM(国際博物館会議)京都大会2019に向けた活動を促進する。 (奈良国立博物館) 1) 学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館等との交流を活発に行う。								
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 内藤栄					
【実績・成果】(4館共通)								
1) 中国・韓国の研究者等10人を招聘し、最新の研究状況について情報交換するとともに、今後の研究や展示および博物館活動全般について意見を交わした。また、修理完成記念特別展「糸のみほとけ—国宝 縞織當麻曼茶羅と繡仏—」でイギリスの美術館から展示品を借用するにあたり、先方のクーリエを2人、招聘した。 2) 職員のべ20人を諸外国に派遣し、文化財に関する研修および現地研究者との研究交流を実施した。 3) • 正倉院学術シンポジウム2018「正倉院宝物と新羅」を11月3日に開催した。30年度は東国大学校(韓国)の教授1人を招聘し、講演及び日本国内の研究者3人とのパネルディスカッションを行った。計227人の参加があった。 • 國際講演会「慶州皇隆寺と韓国出土文字資料の世界」を31年2月1日に開催した。学術交流事業で招聘する国立慶州博物館研究員による国際講演会を行い、計40人の参加があった。 4) ICOMの委員会の一つであるCOMCOLの年次会合(9月24日~28日、カナダ、ウニペグ、Canadian Museum for Human Rights)に出席し、国内ではICOM2019京都大会の担当者会議(9月)と ICOM国際委員会委員長意見交換会(10月)に参加した。 (奈良国立博物館) 1) 中国上海博物館、中国河南博物院、韓国国立慶州博物館との間で、学術交流協定に基づいて職員を派遣し、また先方の館員を招聘して、それぞれの専門分野にかかる研究交流、意見交換を実施した。								
【補足事項】(4館共通)								
1) 海外からの招聘人数の内訳は、上海博物館(中国)3人、河南博物院(中国)2人、国立慶州博物館(韓国)4人、東国大学校(韓国)1人、大英博物館(イギリス)2人。 2) 当館から海外への派遣人数の内訳は、国立慶州博物館(韓国)3人、国立中央博物館(韓国)2人、上海博物館(中国)3人、河南博物院(中国)2人、遼寧省博物館(中国)2人、洛陽市(中国)1人、インドネシア国立中央博物館ほか1人、ライデン民俗博物館ほか(オランダ・ドイツ)1人、Canadian Museum for Human Rights(カナダ、ウニペグ)1人、フリアギヤラリーほか(アメリカ)1人、クリーブランド美術館(アメリカ)3人。 3) • 正倉院学術シンポジウム2018「正倉院宝物と新羅」 11月3日 発表者: 崔應天氏(東国大学校教授) • 國際講演会「慶州皇隆寺と韓国出土文字資料の世界」(於当館講堂) 31年2月1日 発表者: 李鎔賢氏(国立慶州博物館学芸研究士) 4) COMCOLの年次会合では、各委員の発表を聴講するとともに、京都大会をプレゼンテーションした。また、COMCOLミーティングでは、プレカンファレンスの準備状況を報告した。 (奈良国立博物館) 1) 学術交流協定に基づいて、以下の交流を実施した。 • 中国上海博物館から職員3人を10日間招聘し、当館から職員3人を10日間派遣した。 • 中国河南博物院から職員2人を15日間招聘し、当館から職員2人を15日間派遣した。 • 韓国国立慶州博物館から職員2人を各1か月間招聘し、当館から職員1人を4週間派遣した。								
 上海博物館からの招聘者、京都国立博物館にて教育プログラムを体験 (12月21日)								
【定量的評価】項目								
30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29	
海外からの研究者招聘	12人	-		9	13	9	17	
海外への研究者派遣	20人	-		13	20	16	22	
国際シンポジウム開催数	-	-		-	-	-	-	
国際シンポジウム参加者数	-	-	-	-	-	-		
【年度計画に対する総合評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評定: B		招聘数・派遣数とも、例年並みである。招聘時及び派遣時における文化財調査や研究交流、展示に関する意見交換は着実に実施できている。30年度は新たに、これまで国内の研究者を招聘し開催してきた正倉院学術シンポジウムにおいて、初めて海外の研究者に口頭発表を依頼し、好評を得た。						
【中期計画記載事項】								
我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】		【判定根拠、課題と対応】						
評定: B		学術交流協定に基づく交流は、招聘・派遣とも順調に実施できている。海外の機関との信頼関係構築のため、今後も相互交流を継続していく必要があるが、派遣時・招聘時における文化財調査、研究交流、展示に関する意見交換などの内容を、現状よりもさらに充実させていかなければならない。ICOM京都大会に向けては、国内の準備委員会はもとより、国際委員会にも職員を派遣して意見交換し、準備状況は順調である。						

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1430D

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信																																															
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等																																															
【年度計画】 (4館共通)																																																
1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催する。 4) 平成31年ICOM(国際博物館会議)京都大会2019に向けた活動を促進する。 (九州国立博物館) 1) 学術文化交流協定を締結している海外博物館等との交流を活発に行う。 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招へいし、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。 3) ICOM-ASPAC(国際博物館会議アジア太平洋地域連盟)会議を開催する。																																																
担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課	事業責任者	課長 木川りか 課長 山野孝 課長 國谷勝伸																																													
【実績・成果】 (4館共通)																																																
1) 海外の博物館・美術館等の研究者を21人(うち13人はICOM-ASPAC日本会議出席のため)、招聘した。 2) 当機構職員を中国、韓国、スイスなど14か国へ45人を派遣し、研究交流、調査研究等を行った。 3) ICOM-ASPAC日本会議2018を開催した。 4) ICOM-ASPAC日本会議2018において、ICOM京都大会2019から委員を招聘し、講演の場を設けた。 (九州国立博物館) 1) 韓国国立公州博物館及び韓国国立扶餘博物館の研究員各1人を招聘し(6月4日~17日)講演を行った(6月5日)。 2) イギリスのV&A美術館のヴァレリー・ブライス氏、国立民族学博物館の日高真吾氏等を招聘して、博物館等のIPM(総合的有害生物管理)に関するセミナーを実施した(10月24日)。日本全国の美術館、博物館等から多くの関係者の参加を得て、交流を促進した(参加人数:175人)。 3) 12月1日・2日にかけてICOM-ASPAC日本会議2018を開催し、12か国から集まった講演者により「文化財が未来へつなぐ-自然災害と博物館-」のテーマに沿って文化財の防災等について議論し、200人の聴衆を集めめた。また、災害から文化遺産を保護するために博物館が果たす役割について述べた太宰府宣言も採択した。																																																
【補足事項】 (4館共通)																																																
2) 國立故宮博物院(台湾)で開催された「第4世代の博物館:館長学術フォーラム」(7月26日~27日)に出席し、博物館の運営や展示手法等について講演を行った。																																																
<table border="1"> <thead> <tr> <th>【定量的評価】項目</th> <th>30年度実績</th> <th>目標値</th> <th>評定</th> <th rowspan="2">経年変化</th> <th>26</th> <th>27</th> <th>28</th> <th>29</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>海外からの研究者招聘</td> <td>21人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>35</td> <td>51</td> <td>43</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>海外への研究者派遣</td> <td>45人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>82</td> <td>77</td> <td>67</td> <td>47</td> </tr> <tr> <td>国際シンポジウム開催数</td> <td>1回</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>2</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>国際シンポジウム参加者数</td> <td>200人</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>403</td> <td>80</td> <td>173</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table>								【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29	海外からの研究者招聘	21人	-	-	35	51	43	9	海外への研究者派遣	45人	-	-	82	77	67	47	国際シンポジウム開催数	1回	-	-	2	1	1	0	国際シンポジウム参加者数	200人	-	-	403	80	173	0
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29																																								
海外からの研究者招聘	21人	-	-		35	51	43	9																																								
海外への研究者派遣	45人	-	-	82	77	67	47																																									
国際シンポジウム開催数	1回	-	-	2	1	1	0																																									
国際シンポジウム参加者数	200人	-	-	403	80	173	0																																									
【年度計画に対する総合評価】 評定: B		【判定根拠、課題と対応】 海外の博物館・美術館等から研究者を21人招聘し、また、学術文化交流協定館をはじめ、45人を海外へ派遣した。年度計画どおり、事業を実施できた。																																														
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。																																																
【中期計画に対する評価】 評定: B		【判定根拠、課題と対応】 29年度に引き続き、海外の研究者を招聘し、博物館等のIPMに関するセミナーを実施するなど、中期計画に沿った事業を実施できた。 2019年ICOM京都大会に向けて、ICOM-ASPAC日本会議2018を開催したことにより、国内外の博物館・美術館等とのネットワークを構築できた。																																														



V & A美術館ブライス氏の講演

【書式A】

施設名 東京国立博物館

処理番号 1440A

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
<p>【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (東京国立博物館) 1) 「東京国立博物館情報アーカイブズ」等を運用し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2) 紀要・図版目録等を刊行する。 3) 法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。 4) 研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回)</p>								
担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課	事業責任者	課長 浅見龍介 課長 田良島哲					
<p>【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『東京国立博物館文化財修理報告XIX』を刊行した。 (東京国立博物館) 1) ・「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」の運用を継続し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。 ・特集印刷物リーフレット等5件のPDFファイル版を当館ウェブサイト上に全件公開することによって研究情報の普及を図った。 2) ・『東京国立博物館紀要』54号を刊行した。 ・『東京国立博物館図版目録 東洋古鏡篇』を刊行した。 3) 『法隆寺献納宝物特別調査概報 XXXIX 文王呂尚・商山四皓図屏風 1』を刊行した。 4) 研究誌『MUSEUM』673号～678号を刊行した。 ○『東京国立博物館セレクション 高野切と仮名の美』を刊行した。 ○特別展図録9件・特集印刷物8件(リーフレット5件、冊子3件)を編集した。 ○東京国立博物館ハンドブック(日本語、中国語、韓国語)の改訂版を制作した。 ○出版企画委員会4回、『MUSEUM』『紀要』等編集委員会7回を開催し、博物館出版事業の拡充を図った。</p>								
【補足事項】								
【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
定期刊行物 紀要等 『MUSEUM』 『東京国立博物館ニュース』 特別展の開催回数(海外展除く) テーマ別展示の開催件数 講演会等の開催回数	16件 4件 6件 6件 8回 28件 159回	16件 4件 6件 6件 － － －	経年変化		16 4 6 6 6 22 127	16 4 6 6 6 31 146	16 4 6 6 8 33 160	16 4 6 6 5 28 199
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 紀要、『MUSEUM』、『博物館ニュース』等の定期刊行物16件を刊行するとともに、文化財修理報告、図版目録等を計画どおり刊行することができた。また、ハンドブック改訂版の制作で新しい情報も提供することができた。さらに、「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」で研究員の調査研究活動等に関する情報を随時公開。加えて、特集印刷物リーフレットのPDFファイル版をウェブサイトに掲載することで、さらなる情報公開に努めた。						
<p>【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。</p>								
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 『東京国立博物館図版目録 東洋古鏡篇』を発行するなど、図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行するとともに、来館者の要望が高い出版物を刊行し、販売部数を伸ばすことができた。また、ウェブサイトでの公開等、インターネットを活用した調査研究成果の発信を行うことができた。また今後「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」での発信をさらに拡充する。						

【書式A】

施設名 京都国立博物館

処理番号 1440B

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (京都国立博物館) 1) 研究紀要『学叢』を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイトで公開する。 2) 社寺調査報告書等を刊行する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	企画室長 山川暁 連携協力室長 浅湫毅					
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『文化財修理報告書16』を刊行した。 (京都国立博物館) 1) 『学叢40号』を刊行した。30年度は『学叢30号』のPDFを当館ウェブサイトにて追加公開した。 2) 『社寺調査報告29 金剛寺(彫刻編)』を刊行した。 ○特別展覧会にて2件、特集展示にて1件、特別企画にて1件の図録を刊行した。(定期刊行物実績値には含まない)								
【補足事項】 (京都国立博物館) ・特集展示「美麗を極める中国陶磁」図録は、当館が所蔵する松井コレクションの全容を紹介するものであり、今後の中国陶磁研究の基礎となるものである。 ・特別企画「中国近代絵画の巨匠 斋白石」図録は、中国・北京画院所蔵の斎白石作品を紹介するものであるが、当館研究員が編集及び執筆を行っていることに加え、日本語・中国語を併記した意欲的な図書である。								
 <p style="text-align: center;">特集展示、特別企画図録</p>								
【定量的評価】 項目	30年度実績	目標値	評定	年 変 化	26	27	28	29
定期刊行物 紀要等 『博物館だより』 『Newsletter』 特別展の開催回数(海外展除く) テーマ別展示の開催件数 講演会等の開催回数	11件 3件 4件 4件 2回 9件 37回	11件 3件 4件 4件 - - -	経 年 変 化		10 2 4 4 2 4 36	11 3 4 4 3 7 39	10 2 4 4 2 9 45	11 3 4 4 2 8 32
【年度計画に対する総合評価】 評定 : B	【判定根拠、課題と対応】 計画的に定期刊行物を発行し、博物館活動の周知に貢献した。 『学叢』には、教育普及活動に関する論文や科学調査機器を用いた分析結果の紹介も含まれている。 特別企画及び特集展示の図録は、最新の研究成果を盛り込むとともに画像を多用し、手にしやすい内容となるよう心掛けた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評定 : B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画3年目となり、学叢及び社寺調査報告書を継続的に刊行し、調査研究の成果を適切に公表する体制が組めている。今後も着実に成果を出しながら、WEB媒体を活用して広範囲に情報を発信する手法を探りたい。							

【書式A】

施設名 奈良国立博物館

処理番号 1440C

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表		

【年度計画】

(奈良国立博物館)

- 1) 研究紀要『鹿園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイトで公開する。
- 2) 東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品等の光学的調査について、報告書を刊行する。
- 3) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長 内藤栄
------	-----	-------	--------

【実績・成果】

(奈良国立博物館)

- 1) 研究紀要『鹿園雑集』21号の刊行に向けて準備し（31年4月刊行予定）、これまでに刊行された号を当館ウェブサイトに掲載し、研究成果を広く公表した。また、30年度に新たに構築した奈良国立博物館リポジトリを活用し、インターネット上で『鹿園雑集』掲載論文を公開した。
- 2) 東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品などの光学的調査に関する報告書『朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻一研究編一』の31年度刊行に向けて調査資料の分析を進め、9月7日に編集会議を開催した。
- 3) 文化財修理の報告『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』の刊行に向け準備を進めている。

【補足事項】



展覧会図録等

【定量的評価】項目	30年度実績	目標値	評定	26	27	28	29
定期刊行物	6件	5件	A	5	4	6	6
紀要等	0件	1件	D	1	0	2	2
『博物館だより』	4件	4件	B	4	4	4	4
特別展の開催回数（海外展除く）	3件	-	-	3	3	3	3
テーマ別展示の開催件数	4件	-	-	9	4	4	4
講演会等の開催回数	27回	-	-	27	28	26	26

【年度計画に対する総合評価】

評定：B

【判定根拠、課題と対応】

研究紀要『鹿園雑集』21号の31年4月の刊行に向け、編集作業を行った。既刊号の掲載論文については、これまでのウェブサイトだけではなく、30年度に新たに構築した奈良国立博物館リポジトリにおいても公開した。そのことにより、当館の調査研究成果へのアクセス性が向上した。また、東京文化財研究所と共同で行っている光学的調査について、30年度は調査資料の分析及び報告書の編集会議を行い、報告書の31年度内の刊行という目標に向けて、準備を進めることができた。その他定期刊行物についても順調に刊行、公開することができており、目標を達成している。

【中期計画記載事項】

文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	<p>調査・研究の成果は、展覧会に関わる刊行物を中心に発信している。研究紀要『鹿園雑集』を30年度中に刊行することはできなかったが、30年度より既刊号掲載論文のリポジトリでの公開を開始するなど、アクセス性の向上に努めた。また、29年度に引き続き、文化財の修理報告書の刊行に向けて準備を進めている。さらに、30年度は『なら仏像館名品図録』を改訂し、彫刻の新収品や新寄託品のデータを加えて掲載することができた。例年の事業に加え、新たな取り組みも実施でき、中期計画は順調に遂行している。</p>

【書式A】

施設名 九州国立博物館

処理番号 1440D

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表								
【年度計画】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。 2) 博物館科学に関する印刷物を刊行する。									
担当部課	学芸部博物館科学課 学芸部文化財課 学芸部企画課	事業責任者	課長 木川りか 課長 原田あゆみ 課長 白井克也						
【実績・成果】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』第14号を刊行した（部数900部）。 2) 『九州国立博物館 文化財修理報告』第1号（発行部数750部）を編集、刊行した。14年度から17年度までの当館経費による修理の報告書をまとめた。 その他、特別展図録・特集展示図録等を8冊刊行した。（うち特別展図録3冊） ・特別展図録 『至上の印象派展 ビュールレ・コレクション』、『オークラコレクション』、『京都・醍醐寺—真言密教の宇宙』 ・特集展示図録等 『国宝 銅鐸絵画』、『全国高等学校 考古名品展』、『坂本コレクション受贈記念 北斎と鍋島、そして』、『平戸松浦家伝来の伊能図』、『響銅でつながる大宰府と東アジア』。 ・当館所蔵の端物切本帳についての『端物切本帳画像一覧 九州国立博物館所蔵本』（5巻）を刊行した。									
【補足事項】 1) 『東風西声』第14号では15本の論文を掲載した。（うち当館職員執筆7本、外部研究者からの寄稿5本、外部研究者との共同執筆3本） 2) 『九州国立博物館 文化財修理報告』は、当館所蔵品、当館経費で修理を行った当館以外の国立博物館等所蔵文化財、当館文化財保存修復施設で修理を行った文化財について、修理に関する記録をまとめたものである。第1号では、14年度から17年度までの文化財修理を対象とした。対象文化財の基本的情報、施工会社、修理前後の写真、使用材料、修理で得られた知見等を掲載する。これらの情報を公開することで、次回の修理での参考となるだけでなく、美術史や歴史学等の学術研究、修理事業の普及啓発など、多方面での活用が期待される。31年度以降も順次刊行する計画である。									
		  東風西声第14号表紙 九州国立博物館文化財修理報告第1号表紙							
【定量的評価】項目		30年度実績	目標値	評定	経年変化	26	27	28	29
定期刊行物		5件	5件	B		5	5	5	5
紀要等		1件	1件	B		1	1	1	1
季刊情報誌『アジアージュ』		4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数（海外展除く）		4回	-	-		5	4	4	3
テーマ別展示の開催件数		9件	-	-		11	8	6	6
講演会等の開催回数		80回	-	-		82	87	77	84
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 研究紀要について、15本の論文を掲載し、「重要文化財「色絵松竹梅文瓶子」に関する一考察」及び「題箋管理システムとその構築に係る検討過程について」等、当館の収蔵品や展示に関する内容を中心とし、内容がより充実したものを作成することができた。また、文化財修理報告書も予定通り刊行した。その他、特別展図録、特集展示図録においても調査研究の成果を報告した。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。									
【中期計画に対する評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 予定どおりに印刷物を刊行することができた。また、調査研究の結果を文化交流展示やさまざまな機会に応じて公表することができ、中期計画に沿って順調に計画を実施している。研究紀要と修理報告については、インターネットでの公開の可能性を探りつつ、さらに普及活動を進めていくことを計画している。31年度以降もさらに充実した内容で印刷物の刊行を継続していきたい。							